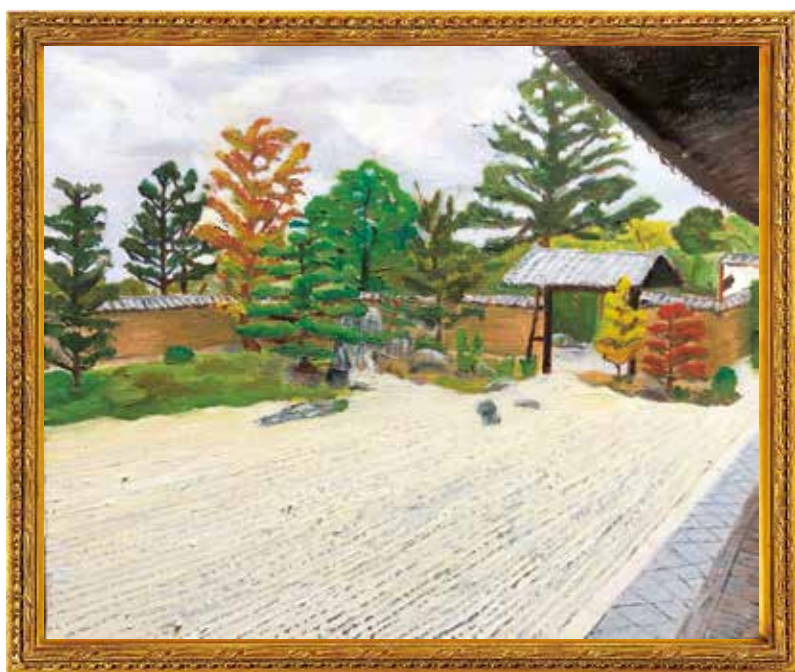


悠遊

第二十六号



企業OBペンクラブ



子等の背に

柔らかき陽や

散り桜

下山 健夫



安曇野は

水湧くところ

五月来る

中村 晃也



漂流の

記憶ふたたび

春嵐

松田 昌康

悠遊

第二十六号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「大徳寺芳春院の花岸庭」

塚田 實

秋の日の早朝知人を介して紹介された芳春院住職を訪問した。芳春院は前田利家の夫人まつが建立した大徳寺の塔頭である。抹茶をいただきながらご高説を拝聴し、お話の後は住職自らの案内で境内を巡った。

花岸庭は本堂前の枯山水の庭園である。「昭和の小堀遠州」と言われる故中根金作氏が作庭した。庭は山溪より流れ出る水がやがて大海へ帰る大自然を表している。大きく広がる白砂と簾目が印象的だった。紅葉も始まりかけていた。

寺を辞するときにはとても爽やかな気分になっていた。

目 次

▽巻頭言……………	清水	勝 4
-----------	----	-----

Ⅱ 特集Ⅱ 創立三十周年記念座談会

Ⅱ 特集Ⅱ 平成とともに—OBへの三十年—

▽企業OBペンクラブの三十年……………	都甲	昌利 18
▽OBペンが時代を区切るか？……………	細谷	博 20
▽平成時代を観る……………	安藤	晃二 22
▽平なり—この三十年……………	野瀬	隆平 24
▽フォト句事始め……………	中村	晃也 26
▽吟行デビュー……………	田中	みづえ 28
▽企業OBペンクラブとの出会い……………	岩崎	洋一郎 30
▽企業OBペンクラブの思い出……………	大野	昱 32
▽平成のわが半生……………	西川	武彦 34
▽激動の昭和から平成、そして『悠遊』……………	富岡	喜久雄 36
▽OBペンクラブとの出会い……………	大塚	喜子 38
▽平成を振り返る……………	森田	晃司 40
▽平成元年の出来事とその波紋……………	児玉	寛嗣 42
▽『企業OBペンクラブ』と私……………	清水	勝 44
▽サラリーマンの「三き」……………	塚田	實 46
▽快挙！ 平成期における母校の再興……………	上原	利夫 48

Ⅱ 自由テーマⅡ

▽私にとって平成とは……………	上田	信隆 50
▽私の脳トレ・ジム……………	稲宮	健一 52
▽私と俳句と父……………	志村	良知 54
▽窓際族の愉しみ……………	首藤	静夫 56
▽追悼の辞（玉山和夫さんへの追悼）……………	濱田	優 58
▽研究考察—「浪速と博多」……………	浜口	須美子 60
▽薬師寺の三尊像……………	大月	和彦 62
▽傘の秋……………	池田	隆 64
▽九州北部豪雨の地 朝倉を見つめて……………	木村	敏美 66
▽南アルプス南部縦走……………	阿部	典文 68
▽母の教え……………	新井	良侑 70
▽BAJ連邦……………	市川	忠夫 72
▽箱根を駆けた老「いだてん」……………	内田	満夫 74
▽歴史を繙く……………	大泉	潤 76
▽縄文思想は奥深い……………	大越	浩平 78
▽シルクロードの旅—七つの印象—……………	大津	隆文 80
▽UNという名の少年……………	大平	忠 82
▽言葉あれこれ……………	大森	海太 84
▽新国立劇場の新芸術監督……………	川口	ひろ子 86
▽幼馴染……………	下山	健夫 88
▽順番と職人不足……………	杉浦	右藏 90
▽私の交遊録……………	田原	敬 92

▽日本民族を滅亡させないために

―焦眉の急は戦後教育の建て直し― 鳥海 博 94

▽戻った財布 長尾進一郎 96

▽高野山から熊野へ 新田由紀子 98

▽戦後日本経済の分岐点 野上 浩三 100

▽はばかりながら? 浜田 道雄 102

▽お家がだんだん遠くなる 濱田 優 104

▽亡き友の夏(続・父と子) 原田 信 106

▽ジャズに浸った青春時代 平尾 富男 108

▽断捨離 廣澤 重穂 110

▽「ペチカ」で結ばれたご縁 藤原 道夫 112

▽入院騒動記 松谷 隆 114

▽寿命 松田 昌康 116

▽Don't Disturb 三 春 118

▽散歩仲間と十七年 村谷 卓一 120

▽朝の顔 八木 信男 122

▽引越し騒動記 矢澤 正二 124

▽落研 囃し 山縣 正靖 126

▽ローマの壁巡り 松浦 俊博 128

▽七十五歳のつれづれ 斉藤 征雄 130

▽リハビリテーション 川村 邦生 132

Ⅱ 創作短編Ⅱ

▽棚に上げて 馬場真寿美 134

▽和泉式部に会いに行こー 内藤真理子 139

▽これもDNA? 福本多佳子 144

Ⅱ 活動報告Ⅱ

▽何でも書こう会 150

▽掌編小説勉強会 151

▽サロン21 152

▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞 153

▽二〇一八年「ペン川柳」勉強会の成果 157

▽ペン・フォト句会 162

▽英語を読もう会 163

▽何でも読もう会 164

▽ホームページ関連 165

▽企業OBペンクラブ本年の歩み 166

▽会員名簿 170

▽編集後記 172

表紙制作 福本多佳子

表紙の絵 塚田 實

カット 安藤 晃二 木村 敏美 首藤 静夫

山縣 正靖 野瀬 隆平 福本多佳子

(五十音順)

巻頭言

創立三十周年とこれから

会長 清水 勝

本号の特集は『平成とともに——OBペンの三十年——』です。

『企業OBペンクラブ』は平成元年十一月に、商社OBの方十七人で創立されました。その後、企業OBだけでなく幅広い業種や女性の方も含め、現在は七十名ほどの会員で構成されています。

創立当初は出版に力を入れていましたが、活字離れ、IT時代を迎えても、常に新しい対応を図ってきました。そんな中で昨年は「活性化プロジェクト」が発足し、数々の提言が出されました。その第一弾がホームページのリニューアルです。月例会の他に八つのプロジェクトや勉強会が開催されており、それらの成果を外部発信する役割として大いに期待されています。

今一つは新規会員の入会促進です。本号をお読みの皆さまには、『企業OBペンクラブ』ってどんなことをしているのか、と興味をお持ちいただき、ぜひ見学に来ていただきたいと存じます。

さて創立三十周年を迎え、これからどう成長し、発展していくかが重要だと思っています。

そこで思い浮かぶのが、サムエル・ウルマンの『青春』の詩です。その一節を抜き出してみます。

年を重ねただけで人は老いない。

理想を失うときはじめて老いる。

六十歳であろうと十六歳であろうと人の胸には

驚異にひかれる心、おさな児のような未知への探求心

人生への興味の歓喜がある。

頭を高く上げ希望の波をとらえるかぎり

八十歳であろうと人は青春の中にいる。

『企業OBペンクラブ』の会員は、まさしく青春の心を持ち続けています。幸いにも会員の中には、科学に強い人、経済動向や社会の変化に関心のある人、語学が得意な人もいます。関心事や趣味も幅広くお持ちです。共通するキーワードは探求心・希望・理想です。

それらを存分に発揮し、世の中に役立つべく発信し、実行する道を探りたいと考えています。

特 集

創立三十周年記念座談会



当会の創立三十周年を記念して座談会を行いました。会
を長年指導して頂いた諸氏の中から、今回は左記の五名の
方に当時を振り返って頂きました。(平成三十年十二月開催)
写真向かって右から

平尾富男さん(平成15年入会)

西川武彦さん(〃 13 〃)

松谷 隆さん(〃 14 〃)

金京法一さん(〃 13 〃)

都甲昌利さん(〃 7 〃)

司会 首藤静夫 (〃 25 〃) (『悠遊』編集委員)

清水会長挨拶

平成元年十一月に当会が発足、三十年の節目を迎えま
した。とはいえ年齢でいえばま
だこれからです。

当会が伸びていくために、
これまでを振り返りながら存
分に語って頂き、今後につな
げていきたいと思います。



清水さん

司会 最初に、入会の経緯や当時の雰囲気などについてお話し願います。

都甲 入会は会発足後六年

目かな。当会に新日鉄OBの村田さんという人がいた。

僕が朝日新聞に投稿した文章が入選したら、彼から誘いが来てその縁で入った。

当時は三菱商事の会議室でやっていた。商事の八木さんが会長だったのでその縁だろう。

金京 中学の同級生の大野さん（会員）に誘われた。会社をやめてやることがない、大したことはあるまいと一発返事した。

毎月の例会に初めて行ったらシーンとしている。入口に事務の人がいて会費を千円取られ、ものものしい雰囲気。四十年もサラリーマンやってきて、え！また



金京さん



都甲さん

か、という感じ（笑い）。

幹部と一般会員とで分けられているようで重苦しい。

えらいところに来たなと思った（笑い）。

しかし一杯飲む段になると現役時代の話などで打ちつけて雰囲気が変わる。

自分は物を書きたい、本を出したいという希望がある訳ではないが、この会に関わっていると、何となくそういう機会に巡り合うかもという気分だった。

西川 平成十三年に入会、

六三歳だった。現役を引退

後、あるところで当会のパンフが置いてあった。何気なく見ていたら、会社の同僚の都甲さんの名前を見つ

け入会を決めた。この種のパンフが目立つところに置いてあることは重要で、私のように当たることもある。

松谷 平成十四年に入会した。さきほどの村田さんの同級生が、当会とは関係なく、英語を読む会を指導されていたのでそこで活動を始めた。有楽町でやっていたが、



西川さん

部屋が使えなくなつて困っていた。すると村田さんから、この会でも英語の活動をしていると紹介され、それが縁で入会した。当時、都甲さんが運営委員長をや



松谷さん

つておられた。当会の会員で松竹の奥山元社長が興された文芸サイトの新企画があつて、入会二カ月なのに、お前このプロマネをやれ——。人使いの荒いところだと思つた（笑い）。

平尾 私は、松谷さんの翌年、高橋孝蔵さん（平成三〇年逝去）の紹介で入った。高橋さんは東京外大の先輩で、学生時代はボートで名をはせた人です。

入会すると、高橋さんが北田会長と相談、私に事務局長をやらせ、松谷さんに運営委員長をやつてもらい、二人で会を引っ張ることを考えておられたようだ。



平尾さん

川柳の会の立ち上げもやらされた。会の長老の一人、小林さんの前で、ある時下手な川柳を披露したら、「川柳の会を作ろう、君と松谷君が僕に協力してくれ」となり、これも二人の合作となつて現在まで続いている。

出版事業について

司会 年史によると最初の十年、出版活動が活発ですね。
都甲 神保町の出版社が縁で出版活動が展開された。われわれの活動を知り、商業ベースの出版のアドバイスをしてくれた。書き手がこちらは七十人もいる、いろんな分野の経験者がいるのでテーマも豊富だった。『逆風に向かう君たちへ』という本を出したらかなり売れた。
同人誌『悠遊』は創立五年目で立ち上げた。中身が濃いのでこれも売ろうと考えたが売れなかった。

金京 北田会長の時、『プレジデント』誌から、サラリーマン人生の面白そうな話を募集する話があつた。

先方の条件も承諾して色々協力したが、出来上がつても一冊も送つてこない。しぶしぶ買って読むとこちら原稿そのまま。こんな業界なのかと思つたね。

西川 『プレジデント』には僕も寄稿した。入会時期が若干遅かったせいとか、出版事業はそれほど覚えていない。ただ年史にあるように、よく出版しているし、ＩＴ時代の手前の、出版業としては最盛期のころだったと思う。司会 どういう内容が多かったのですか。

金京 バブルを経験し、はじけるのも経験した時代なので、それを背景にしたサラリーマン物が多かった。この少し後で北田会長自らサラリーマンと年金を絡めた本を出したが売れなかった。時代の動きが反映されるようだ。当時の例会なども出版の話でもちきりだったが、売れない本をどうしようかというトーンだった。

中村 これらの本はどなたかが一人で？ それとも手分けして書いたのですか

西川 基本は大勢の人が参加してということでした。

清水 僕も入会後すぐ書かされました。

中村 売行きはいかがでしたか。

西川 紙の印刷の時代だったし、「企業ＯＢ」というのが珍しいので、もてはやされた時期でした。印税収入で数百万がたまり、会はお金持ちでした。

『知らぬは日本人ばかりなり』（マネジメント社）は出版第一号でこれは売れた。今でもアマゾンなどで残っているはずだ。

安藤 印象に残っているのは、さきほどの村田さんで、彼は韓国語の辞書の本を出版した。本屋から自宅近所から足で稼いで頑張っていた。

平尾 出版はハウツー物が多かった。自分が入会の際は出版はすでに下火。再び出版の議論が出たときに、ベンクラブだから文芸物を出さなきゃだめだと。それで、川柳の本を出すときに掌編小説の人も誘って合体で出した。『卒サラ川柳―不良老人たちの溜息』です。これに気を吐いて三冊、四冊までいった。

西川 流れでみると、当会のメンバーは昔は海外駐在者



が圧倒的、しかも良き時代に良い経験を積み、次の時代に残そうとし、フォローの風にも恵まれて良く売れた。

司会 初期には会の運営を巡って激しい議論が交わされていたようにですね。

松谷 当時の八木会長と他のメンバーとで小説研究会の運営で軋轢があったと聞いている。

西川 八木さんは、これからはサラリーマンが世に出て行かなくては、といって「サラリーマン新党」を立ち上げ、自ら党首となって船出したが伸び悩んだ。それやこれやがあった時代です。

野上 北田会長はどういう方ですか。

松谷 僕が知っていることかというと、元会長の八木さんも北田さんも三菱商事出身。八木さんが参議院議員になり、北田さんはその政策秘書になって二人の関係はずっと続いた。さらに言えば学生時代からラゲビー部の腐れ縁ですね。

野上 私は出版に興味をもっています。一年前に会で出版の企てがあった時には、八百字のエッセイをベースにということだった。それには無理があると思ったが、い

ずれにしろ会の出版については興味があります。

各勉強会について

金京 「何でも書こう会」の思い出です。当時、十数人が集まり、一人ずつ自分の持参した作品をお互にお互に読む。二人ほど雰囲気の違いがいて批評する。かなりえげつない調子だ。例えば僕の文章を見て「あなたの文章は軽薄という言葉が合う」というんだ。クソミソだね。この二人は自分では文章を出さず、批評だけするんだ。これはエライ勉強会だと思った。

ただ、この批評には訳があって、当時の北田会長にはある信念があった。この会の目的は出版することだ、出版する以上は素人の文章ではだめだと。一軒ずつ本屋を回っては置いてもらう苦労もされていた。それで新聞社のOBにきてもらい、みんなの文章を見てもらったんだね。

司会 小説研究会は何度か挫折していますね。

都甲 ある会員が『青年重役』というのを書いて当選したのを契機に小説へのムードが盛り上がった。八木さん

や北田さんたちの熱意があった。

司会 「俳句」も早いですね。

都甲 俳句は平間真木子先生が非常に熱心で、よく指導してくれた。今の西川知世さんがその後継者です。

司会 次いで「何でも書こう会」がスタート。さらに「ダベリ会」という昼食会が始まりました（今はない）。

「英語トーク会」が在日大使館員をお呼びして始まり、「環境問題研究会」という個別テーマの勉強会も始まっています。

都甲 そうそう。とにかく面白そうだと思うものは、果敢に立ち上げた時期ですね。

司会 次の、十年～二十年目の時期に移ります。

この時期、会長は北川さんが長く、後半に西川さんにスイッチ。運営委員長は都甲さんから松谷さん、事務局長は中村爽さんから平尾さんにと若返りが進んでいます。

この時期の特徴は第一期の出版活動中心から勉強会活動にウエイトが移りました。勉強会がさらに充実し、「英語を読もう会」「サロン21」「川柳勉強会」が続々と登

場、さらに小説が「掌編小説勉強会」として定着してきました。「サロン21」は、金京さんが長い間引っ張ってこられました。いかがでしょう。

金京 入会した時、勉強会はずでに走っていたが、何をやっているのか皆目分からなかった。

月例会では各勉強会から前月の報告があるのに、サロン21だけ、報告はありませんという。そのプロマネはまもなく辞められた。すると北田会長が僕に、後を頼むんだ。今までの内容が分からないので参ったね。

本屋にいくと、新書つてあるでしょ。いろんな出版社がいろんなテーマについてうまくまとめている。これなら何か役立つものがあるかと思ひ数冊読んだ。レジメをA4にまとめた。当日コピーを全員に配ってその本の解説をしたんですね。二十一世紀に関連しそうなものを選んでやった。

勉強会の場所は日本記者クラブ。水割をのみながらやった。十数名かな。うまくいった、和気あいあいと。僕が本の解説をし、みんなが感想を述べあう。

記憶に残っているのでは、今、習近平が一带一路とい

ってるが、その当時から別の言葉で同じことを書いたのがあった。

新書は馬鹿にならないと思った。これ以上はマンネリになるので、森田さんに代わってもらいました。

安藤 現在「英語を読もう会」のプロマネをやっているが当時は日本にいなかったもので、変遷を殆んど知らない。

松谷 英語は「何でも書こう会」の前に一時間やっていました。英語が一時間、書こう会が三時間。英語は中村爽さん、次に中村將陸さんがリードしておられた。

司会 この時期のもう一つの特徴に、「電子化」への対応があります。

松谷 契機になったのが「インバック」(インターネット博覧会)。これに企業OBペンとして出品しようとして。それに備えてIT勉強会を始めた。横河電機出身の多田修さ



何でも書こう会(熱海合宿)

んの指導のもと、プログラミングの方法を学んだ。平成十四年当時で、会員数八十二名でしたが、すでに四十六名がメールアドレスを持っていました。インバックに出した当会のHPですが、HP自体は動かずユーザーがそのHPにアクセスすると、そこから先に飛んでいって個々の作品にたどり着くというもの。

会員皆さんの熱意がすごかったのが印象として残っています。

司会 勉強会をずいぶんおやりになっていますね。

都甲 三鷹のパソコンハウスに出かけて行って、皆さん励んでいましたね。

松谷 だから本格的HPを立ち上げる時はスムーズでしたよ。見積りを取ったら十二万円から四十八万円まで大きな幅があった。理事会に説明したら、金京さんが一言、「十二万円でやりましたまゑ」。これが最初のHPです。平成十六年かな。このシステムをやるときは、私と平尾さん、中村將陸さんが中心だった。五年目にシステムダウンがあり、委託先を代えることになりました。

平尾 それで切り替えたのが今のリプラス社です。

この切り替え以前は大変だった。皆さんの作品を僕と松谷さんとで、いちいち手で処理した。今のよう各自で自動的に載せられなかったから大変でした。安く上げる必要から自分たちが手足となってやりました。

活動場所

都甲 今のセンターに落ち着くまでは色々とありました。私が運営委員長の時、三菱商事の会議室が使えなくなり活動場所を求めてさまよった。結局この近くに新日鉄の施設があつて一時期そこに落ち着いた。ところが……

平尾 都甲さんたちがご苦労されたが、その新日鉄も使えなくなった。どうしようと、市中の貸部屋で高い料金を取られて。

都甲 そうそう。渋谷の貸部屋は苦労しましたね。それで松谷さんと探したんだ。たまたまNHKの知人から、このオリンピックセンターを紹介された。近いし広いしどうだろうかと会に提案した。人脈というのは有難い。

松谷 月例会でも以前は千円取られていたんです。ここに来てから月例会はじめ会全体でやる行事は、今や無料

になった。

とにかく一人月千円。勉強会でも千円、小さい部屋でも千円。余れば会の収入、そんなバカな（笑い）。

運営委員長と事務局長

司会 両者の関係、分担はどうなっていましたか。

松谷 運営委員長は表向きは月例会の司会役。平尾事務局長とは密なコンタクトでしたからね、分担とか考えずにお互いに時間がある方がやりました。

平尾 会場準備や予約などの裏方は主に事務局長、会議が始まると運営委員長の進行という感じだが、臨機応変でした。

会員数

司会 平成十一年頃の百人が最高で、その後六十人まで減っています。ゴタゴタが効いていますか？ 百人近い人数の時は月例会も壮観だったでしょうね。

都甲 いや、大して変わらない。一度勘定したが、平均三十四人だったかな。

電子出版

松谷 電子出版は2006年の『ビルマ戦線はこうだった』が最初です。

ビルマ戦線の英国軍兵士たちが書いたものを日本語に訳した。初めは普通の出版を企てたが、出版社から売れないといわれたので電子出版を考えました。

「でじたる書房」のサイトにタイトルを打つと出てきます。表紙絵は山縣さんをお願いした。

司会 その後は？

松谷 あとが続いていないですね。

20〜30年目

司会 直近の十年間は女性会員が続いて入会しています。遠隔地会員の参加も始まりました。

西川 女性会員は、JAL出身の深田祐介さんを当会の名誉会長に招聘したときに、彼のアドバイスで実現した。海外駐在者が中心だった会が大きく変わった。三春さんがそのトップバッターです。

三春 第一号と知らずに入会して驚いたが、また、こんなに長くいるとはねえ（笑い）。

平成二十年入会だけど、先ほどの出版という雰囲気はなくて勉強会がメインでしたね。

入会年齢も皆さん、かなり若くして入ってこられたんですね。私も五十歳台後半での入会ですけど、今は定年が伸びている分、入会が遅くなっているかな。

司会 福本さんは、三春さんに次いで入会されていますね。

福本 ただ、数年間は幽霊会員だったから当時の事はよく分からないわ。

大越 そんなことないでしょ。深田さんが女性数人を従え、新年会か出版パーティかで颯爽としてたよ（笑い）。

司会 遠隔地では倉藤さんや浜口さんが早い。

野瀬 大阪の浜口さんは「800字文学館賞」の公募で彼女が優勝したときに、ご主人と二人でこの会に見え、それを契機に入会されました。いい光景でしたよ。

福岡の木村さんはホームページでご主人が見つけて、こんな面白そうところがあるよ、となって。やはりご主人と一緒に来られました。

西川 会に女性の参加がなかったらどうなっていたことか。会の発展にとって大きな転機だったと思います。

留学生との交流

司会 日米学生会議の皆さんを招待したり、外部交流も手掛けていますね。

西川 それは岩崎さんが中心でやっておられました。

司会 中国と韓国の留学生との交流もやっていますね。

野上 それは私が紹介して呼んだものですね。日米学生会議で世話役の岩崎さんが動けなくなり、それではと私の縁故で紹介しました。

安藤 ICUの学生をよんで交流したこともあったね。

志村 学生会議の学生さんは新年会にもきてもらっていましたね。

司会 アイデアを出し合って、色々とトライしていた様子がよくうかがえます。

当会の今後

司会 これからは、今後の活動に焦点を当てて、全員で

討議したいと思います。忌憚ないご意見をお願いします。
野上 お話を伺うと先輩方のご苦労がよく分かりますね。
清水 先輩たちからお話を聞いて、今後の進め方の参考にするのは意味があると思います。

西川 ちょっといいですか、今後の活動について、一つは場所の問題。このセンターで七〇人規模でうまくやってきたと思う。だけど、会員が全国的になったし、遠隔地の会員の方の活動をどうするか。会費は減額されて良かったが、活動自体をどうサポートするかがポイント。会の若返りとも絡めて討議したい。

僕が会長るとき、新聞にアプローチして回った。知合いを見つけては接触し、当会の活動を記事にしてもらいたいと頼みました。サンケイ新聞と東京新聞が取り上げてくれました。マスコミの活用も一つの手段として考え



フォト句(例)

てよいでしょう。

中村 「フォト句」は珍しいといふので、朝日新聞の取材を受けて、一度載ったことがありますね。

清水 今年も『悠遊』二五周年記念号をマスコミに配布した。日刊自動車新聞が二回取り上げてくれた。

今はマスコミに強いコネがない。手がかりが弱い。

西川 当会が出した川柳の本の帯は、下重暁子さんに書いてもらった。こういうコネは大事にしたい。

それと、僕は今まで書き溜めた掌編小説をまとめて簡単な本にした。周囲に読んで貰おうと——。同様にエッセイも相当書き溜まっているので、何とかしたい。こういう愉しみ方もありますね。

清水 池田さん、藤原さん、川口さん他個別にはすでに出版されています。馬場さんも準備中です。これらもHPなどでPRしたいですね。

本格的な出版社でなく、原稿を校正などしないでポンとだしてくれる出版社がある。完全手作りで安いし簡単です。ただし出版不況の今、自費出版になるでしょうね。

安藤 売れる本、というところが一番難しいね

斉藤 会の今後ですが、会員の新陳代謝の視点と、新たに入られた方に何を楽しんでもらえるかという内容からの視点と両方が大切だろうと思います。出版について再度考えるか、という気もしましたが——。

司会 出版熱の時代には数人の熱烈な人がいたのか全体に出版熱が高かったのか、どうでしょうか。

大越 八木さん、北田さんの二人がぐいぐい引っ張っていったと思いますよ。

斉藤 ものにより、一つのテーマを全員で分担する方法もあったようですよ。

清水 平成十七年の『年金暮らし心得帳』はその例です。僕も入会してすぐ書かされた。これは余り売れなかった。それ以来、会は出版活動から遠ざかりました。

野瀬 出版不況の今日、商業出版は夢だが無理でしょう。西川さんがいわれた個人の愉しみとして、小本形式にまとめるというのは私もやっている。いいことだと思う。

それとは別ですが、折角いいHPを持っているのだから、これをどう使うかは大きいと思います。

団塊世代もいよいよ最終の職場を終えて、何をやろう

かと思っている人は大勢いると思う。彼らが私たちの活動を知ったら興味を覚える人は必ずいる。

そこにこのHPをいかに結びつけられるか。一般の方の興味をわれわれのHPにいかにリンクできるか、それが一番実際的ではないでしょうか。日本中につながっている訳だから――。HPを軸にした新しい媒体をメインに考えたい。

当会HPのようにリンク先がいっぱいあるというのは有利だろうね。

松谷 その通りです。リンク先が広いことが重要です。

その開拓をしていこうよ。

野瀬 まったく賛成です。

清水 大森さん、いかがですか。

大森 今回「何でも書こう会」のプロマネを仰せつかりました。入会して日が浅いですが、僕の思いは文章をどう練り上げるか、というベースを深めたい。出版にしても何にしても期待に応えられる中味でないと何にもならない。そこに注力したいと思っています。

司会 福本さんのご友人の飯島さんが参加されています。

今までお聞きになって、お気づきのことがあれば。

飯島 飯島と申します。HPのお話ですが、会からどこかにリンクするのも大事でしょうが、一般個人の興味を起点にして、個人の側からOBペンのサイトに興味の矢印が届くようにしてもらえると有難いです。

西川 僕の例だと、当会の「エッセイコラム」に「シルバー川柳風景」という題名でアップした。一般の方がシルバー川柳と検索したら、「エッセイコラム」まで飛んできた。

だから飯島さんのお話のように、「企業OBペンクラブ」を知らなくても、文芸に関心のある人がこのサイトにこられるように工夫するといいいね。

志村 今のHPで一番アクセスが多いアイコンは「個人著作検索システム」で月間千件。全体のアクセス総数は推定で月間四、五千件。決して少なくない。活発です。

それを利用して、入会を働きかけやすくするためにトップページを一新した。この活用を考えたい。

司会 長時間のご討議、有難うございました。これをもとに更に面白いペン活動を目指しましょう。

特 集
平成とともに—OBペンの三十年—



写真 福本 多佳子

企業OBペンクラブの三十年

都 甲 昌 利

企業OBペンクラブが創立三十年を迎えたという。普通老人クラブというものは数年で立ち消えになると言われているのでこれはすごい記録だ。

理由はこうだ。会社人間で企業に一生を尽くした我々は共通の認識を持っている。物事に耐える性質だ。定年になっても何かにチャレンジしようという精神もある。共通認識を持った人間たちの集まりである「企業OBペンクラブ」は当然その理由に値する。

『悠遊』発刊に当たり第二代目の鳴澤会長（東銀OB・経済評論家）は「肝心なのは当クラブが単なる老人クラブに墮することなく、その目的である知的生産活動を追求し、さらなる発展を期するという基本方針を認識する必要がある」と述べている。

幸い当クラブは各業種にわたる多彩な知識、経験、ノウハウ、更には土地鑑、語学鑑、人脈を有する企業OB

の集団であり、この知的プールは誠に貴重なものである。このプールを活用し自己研鑽のみならず、相互研鑽を積み重ね更に会員の層を厚くし準現役・現役を含め、後に続く世代の人々の参加を図るならば十分所期の目的を達成することは可能であると思う。このような活動を記録し後世にと伝えるために同人誌『悠遊』が発刊されたのである。

設立当初はいろいろと苦労があった。集まる場所の問題である。都内を探し回った。最初は当会には三菱関係の会員が多くいたため、丸の内の「菱和クラブ」で会合を持った。会員が増加し手狭になり、参宮橋の新日鉄「日新寮（代々木倶楽部）」なども利用し、ようやく現在の青少年センターに落ち着いた。ここに落ち着くまで当時の運営委員長だった松谷さんの努力があった。

更に忘れてはならないのは、当クラブの名誉会長であった直木賞作家深田祐介氏が「ペンクラブに女性会員がないのは不自然だ。女性会員を入れるべきだ」ということで、女性会員の入会が始まった。現在では彼女らは男性以上に活躍している。

企業OBペンクラブの歩み		
暦年	トピックス	会員数
H1 '89	17名で創立	17名
H2 '90	「企業OBペンクラブ」と正式決定	
H3 '91	『知らぬは日本人ばかりなり』第一号出版	47名
H4 '92	雑誌連載3、新聞連載2、単行本3。飛躍の年	
H5 '93	「俳句勉強会」発足	
H6 '94	『悠遊』創刊 「短歌教室」発足	71名
H7 '95	「何でも書こう会」スタート	76名
H8 '96	「英語トーク会」スタート	80名
H9 '97		82名
H10 '98	「小説研究会」スタート。	85名
H11 '99	十周年記念イベント	99名
H12 '00	インパック(インターネット博覧会)に出品	
H13 '01	「英語を読もう会」、「サロン21」スタート	91名
H14 '02		88名
H15 '03	IT登録会員が7割超	77名
H16 '04	「川柳勉強会」スタート。ホームページスタート	67名
H17 '05		61名
H18 '06	オリンピック青少年Cに活動拠点。	58名
H19 '07	「掌編小説勉強会」スタート。 「800字文学館」の外部公開スタート	59名
H20 '08		62名
H21 '09	「800字文学館賞」第一回公募	67名
H22 '10	「フォト句会」スタート	69名
H23 '11	東日本大震災の義援金活動	72名
H24 '12		69名
H25 '13		72名
H26 '14	『悠遊』のデジタル化(創刊号～21号)	70名
H27 '15		75名
H28 '16		67名
H29 '17	「何でも読もう会」スタート。	70名
H30 '18		69名
H31 '19	ホームページ刷新	65名

(出典:『悠遊』各号より 当会事務局にて抄録)

いかなる組織も時間の経過とともにマンネリに陥る。これを防止するためには、若い世代の方々が当クラブの

基本理念を認識し後の世代に引き継ぐことであると思う。そうすれば企業OBペンクラブは末永く存続するだろう。

OBペンが時代を区切るか？

細谷 博

「平成とともに——OBペンの三十年——」というテーマを与えられ、念のためチェックして驚きました。OBペンが創立されたのは平成元年、即ち一九八九年のことで、前日の昭和天皇の崩御を受けて一月八日（筆者とエルビス・プレスリーが一三時間の時差を伴って一九三五年に生誕した日）から平成の御代は始まっていたのです。

時の小渕官房長官が「平成」とやや細めの字体で黒々と書かれた紙片を掲げた場面が、本年五月一日の元号改元が決まってからしばしばテレビに現れています。実は平成元年と言われてもピンとこないのですが、西暦で一九八九年と言われると、もうまじまじとベルリンの壁の崩壊と、それに続く長年に渉る東西冷戦の終了の影響の大きさに、期待と安堵に身を震わせた事を思い出します。

それまではと言うと、たとえば旧ソ連のモスクワに行くのに国際都市ウィーンを経由して入り、短期間の滞在

しか認められないので、用もないのに何回も西側に出入りしたり、日本側でも容疑を回避するため、一旦退社してダミー会社社員として共産圏に出張し、仕事が終了して帰国次第、また元いた会社に戻職するなど、テクニクスの限りを尽してやって来た、その労苦と不安から開放され、もうびくびくしながら税関検査を受ける事もなくなったことに、密かに快哉を叫んだ事でした。

そして二年後のソ連の瓦解から社会主義東欧の解体と続き、七十年に渉る壮大かつ高価な共産主義国家建設の実験は、多大な人的および経済的損害を巻き込んで失敗に終わりました。私自身が共産圏貿易に熱心だったのは、政治的にかの国の思想に共鳴していた訳ではなく、ジャズを聴く自由もない、その国、地方に相應しい、社会的にジャズやロックの要素を含んだ音楽が生まれ、普及することをお願いしたからなのも大きな理由のひとつでした。社会主義的な仮面をかぶって自由主義社会も認める名曲を作り続けたシヨスタコヴィッチはともかくとして、命日がスターリンと同日だったため、新聞の死亡記事もたった三行で片付けられたプロコフィエフなどは、音

楽史上最も不運な作曲家と言えます。

従って、平成になって十年以上を経て二十一世紀に入った頃には、欧州のEUも二十を超える加盟国の平和で、政治的にも安定した地域となり、米国もパックス・アメリカナの時代を謳歌して、第三次世界大戦なんぞは永久に回避できる体制になりつつあると世界中の楽観主義者を安心させていたのが一転、どん底に陥れたのが二〇〇一年の米国の同時多発テロ（九・一一事件）でした。

仏教国の私には想像を超える内輪争いで、宗教と政治経済が複雑に絡み合った中東から西アジアの紛争が数百万の難民を生み出して、安定と繁栄に向かっていた西欧諸国まで巻き込んで、EUそのものが瓦解しそうな状況です。特に、曾て世界の七つの海を制していた英国が、EU脱退を決めたまでは格好が良かったが、いざ実施となつて斜陽の国の実態まで世界に曝してしまい、長年の国境争いの仏独両国が、難民流入問題を発端に仲良く政治情不安定になるなど、第三次世界大戦こそ避けられているが、快い平和の空気はどこに行ったのかという現状です。

その平和の気分がまだ残っている数少ない国の一つが日本ですが、その日本もロシア、北朝鮮、中国、韓国などあからさまに国境問題で敵対姿勢を隠さない国々に囲まれ、かつての占領国である米国までもがどこまで日本を守ってくれるのか怪しくなっています。

更に国内を見ても平成七年の阪神淡路大震災、二十三年の東日本大震災の防ぎようもない自然災害の他にも、オウム真理教による地下鉄サリン事件、頻発するオレオレ詐欺事件、SNS悪用の誘拐殺人事件など、平成の時代になってから発生した、あるいは増加した社会的なマイナス要素も我々を圧迫しています。

そして今上天皇御自身の発意で、天皇の地位を皇太子に譲り、元号を新たにするその年がOBペンの三十周年記念とは、何と巧みに仕組んだものかと感嘆の極みであります。一年後に迫ったオリンピックを控えテニス、卓球、バドミントンなどの国際試合での朗報が新年に入つて続々ともたらされ、OBペン会員としてまだまだひと踏ん張りしなければと、覚悟を固めております。

平成時代を観る

安藤 晃二

私が「平成」を迎えたのは、米国の最南端メキシコ国境の町であった。建機部品製造メキシコ事業経営のため数年間駐在した。カントリークラブのレストランに、ご近所の医師夫妻を招待した。着席するや、「まずは、貴国のエンペラーのご崩御に衷心よりお悔やみを」と杯を向ける友人の礼節に満ちた態度が忘れられない。思わず表情をひきしめた。脈々と引き継がれるスペイン文化の伝統を感じさせる一幕でもあった。

一九八九年、帰国するとバブルが弾け、世界のその後を占う出来事「天安門事件」、「ベルリンの壁崩壊」が起こる。中国に萌芽する自由を垣間見るが、国家権力が押さえ込む。冷戦の終結は世界に平和への期待感をもたらす。前世紀以来苦悩した歴史の自浄作業と取り組む姿が如実に見えるが「そうは問屋が卸さない」。

欧州では、ECからEUへと進む。域内での自由移動、単一市場、九六年には統合通貨ユーロが誕生する。通貨を主権の一部と信ずる英国は通貨統合に不参加、世界に蔓延するポピュリズムの潮流の中、EU離脱に動く。残留派の保守党主導が敗北した国民投票直後に就任したメイ首相、是とされた方針を誠実に進め、泥沼を歩く。本流の民主主義国の面目躍如である。メンバー国の財政、移民問題、右傾化と、ユーロ懐疑派を内包しつつEUは苦悩する。EU統合の最重要意義は「平和」、何千万人もの犠牲を払った両大戦の惨禍からの訣別を誓う高邁な理念がある。

米国では、九〇年代のクリントン政権下、経済躍進、財政の健全化と共にIT技術の発展が世界に大きく寄与する。GWブッシュ政権時の「米国同時多発テロ事件」をきっかけに、米国はイラク戦争、アフガン紛争にめり込む。帝国主義に対峙するイスラム。過激なイスラム国が世界を脅かす。オバマ政権は対イラン制裁緩和に動き、温暖化問題、TPPなどグローバルな枠組み構築に

腐心する。オバマ氏は米国大統領として初めて広島を訪れる。

現職トランプ政権は就任と同時にバリ協定(気象変動)離脱を宣言、通商での米国第一主義は「米中貿易戦争」を招く。実は最新鋭の通信技術5G時代の覇権争いが裏にあるという。対北朝鮮敵対の先鋭化を経てトランプ氏は米朝会談を実現、北の非核化を求める。不法移民対策でメキシコ国境壁建設計画に全米が揺れる。シリアのアサド政権、イランを支持するロシアとは、冷戦さながらの対立状態。イスラエル、サウジに加担し、中東情勢は複雑化する。大統領選でのロシア疑惑の爆弾を抱え国論は二分し政権に対する外交に関する懸念が強い。

大国化した中国の「一带一路」政策、南沙諸島や発展途上国への展開には目を見張るものがある。米中緊張の中の親日ムードに、日本としては最大限建設的な効果を求めたい。北朝鮮が米朝会談を前に中国に急接近する。深刻な拉致問題の方は一ミリの進展もなく、やる瀬無い。

この時代、国内では概して低迷感が覆う。災害が続き、

またリーマン・ショックの金融危機にも翻弄された。日銀の大規模緩和によるデフレ脱却策、出口が見えず、おカネが流れ、何かのバブル再燃さえ危惧される。企業業績と裏腹に一般消費低迷で景況感は鈍い。国家予算の三分の一を占める社会保障費だが人々の将来不安を拭えない。政府は消費税拡大を進めるが、財政赤字の累積は一〇〇兆円を超える。

地球規模の問題に戻ると、「世界平和」こそ、人類が真に希求する光である。唯一の被爆国日本が、あろう事か、国連の「核兵器廃絶条約」に否を投ずる。核兵器保有による強国間の均衡下、日本はその核の傘下での軍事同盟に縛られ、動きが取れない歴史の皮肉、この国の将来には未だ超克すべき懸案が尽きない。現代史の未曾有の運命に身を投じ幾多の試練を通り抜けてきた日本が、混沌の世界で国際協調の立て直しに乗り出し、平和国家としての矜持を示す、その夢は失うまい。幾十年の、いや幾百年の計が求められよう。

「平成」の時代、世界に生きて、ひしひしと思う。

平なり——この三〇年

野瀬 隆平

今年、日本は新しい世を迎える。「平成」を継いで新しい天皇が即位され、元号が改まる。

激動の昭和、大戦が終わった後は幸いなことに戦争に巻き込まれることなく、平和な時代を過ごしてきた。この意味で「平成」の世はその元号の通り、自然災害は別として平穏無事に過ぎて行った。世の中に争い事が無いのは何よりも望ましいことである。しかし一方、人々の暮らしの面から振り返って見ると、色々な問題が浮かび上がってくる。一言でいうと、平成の三〇年間、特にその後半、日本の経済はずっと停滞し続けてきた。

経済が成熟した段階に入り、人口も減少に転じたのだから、仕方がないと主張する人もいるが、他の成熟した先進国と比べ日本だけ異常なので、この理由が必ずしも射けているとは思えない。

例えば、GDP（国内総生産）の推移を国別に比較したグラフをご覧いただきたい。

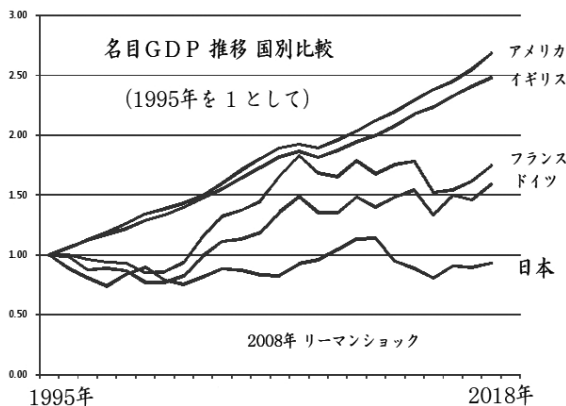
グラフが示す

通り、他の先進国と比べて、日本の成長率の推移が異様であることは一目瞭然である。アメリカが2・5倍にも伸びているのに、日本はなんとゼロ、いや縮小しているのだ。

実質賃金の推移を国際的に比

べて見ても、日本だけがここ二〇年下がり続けており、GDPと同様に異常であることは明らかである。

何故、日本だけがこのような結果になったのか。原因



の一つとして、世界的なIT革命の流れに日本がうまく乗れなかったことを挙げる人もいる。平成元年のころから、パソコンやインターネットの普及によりこの変革が始まった。多くの国はその機能を十二分に生かして生産性をあげ、経済を成長させてきた。しかし、日本は古いシステムから脱却しきれず旧態依然としたまま、その波に乗れなかったというのだ。

しかし、それ以外にも見落としてはならない原因がある。日本の経済政策、特に財政・金融政策に問題があったのではないか。均衡財政にこだわるあまり、緊縮政策によって経済を委縮させた。また、金融政策においてもインフレを恐れ引き締めすぎたのではないか。

平成の時代は、経済面においても正に平^{へい}なりの時代だったのである。成長が止まり貧富の差も広がった。若い世代の人たちが将来に備えて消費を抑え、何よりも安定性を求めて、新しいことに積極的に取り組む意欲を無くしたように思える。

政府は今年、消費税率をアップする方針だという。実行すれば、経済的なマイナスを押さえる措置をいくら講

じて、経済は委縮し更に格差が拡大する恐れがある。世の中が平穩無事であることは良いことだ。しかし、今日の経済状況に安住して、企業や個人のマインド、社会の仕組みを変えなければ、日本は現状から脱却できず発展する世界から取り残されてしまう。そればかりではない、格差拡大の行き着く先には、最も避けなければならない分断と争いが待ち構えている。

第四次産業革命と言われるように、人工知能（AI）やロボットが急速に進歩し、世の中は予想したよりもはるかに速い速度で変わって行くだろう。この波に乗り遅れないよう、企業や個人が丸となつて取り組むと共に、国もそれを支援する政策をとることが強く求められる。

次の世が、人工知能―「人知」、いや「仁智」が治める世になつて欲しい。

新しい御代の始まりにあたり、繁栄に向かうべき経済に水を差すような政策だけは避けなければならない。

むしろ新しい天皇の即位を祝して、政府が記念硬貨を発行し、あまねく国民に分け与えるような、思い切った決断をして欲しいものだ。

フォト句事始め

中村 晃也

サラリーマン生活を振り返ればあつという間の四十年余りだった。よい上司や友達に恵まれたとはいえ、会社生活の悲喜こもごもや、恨み辛みは今更思い出しくもないし、これからどんな趣味と生きてゆくかが問題だった。

根っからの旅行好きに加えて、晩年は外資との合併会社に携わっていたので、公私を問わず国内国外旅行は多かった。撮り貯めていた写真を整理している最中に我ながら良い写真があるのを見て、写真集でも発刊してやろうかと思いついた。

以前『フェアウェイのダンディ達』『海を渡ったダンディ達』という二冊の本を発刊したことがあったので精神的な抵抗はなく資金だけが問題であった。女房に相談すると「貴方がやりたいなら」といって資金の三分の一を提供してくれた。

出来のよい写真を四十枚ほど選び、それぞれに説明をつける段になってひとつのアイデアが閃いた。写真のキヤプシヨンの代わりに俳句をつけたらどうだろうと、早速写真の風景に合わせて俳句を作ってみた。

小生の母親は結社こそ持たなかったが俳句雑誌『女性俳句』の編集長を二十年以上続け、昭和五十八年には現代俳句協会賞を受賞した経験があるいっぽしの俳人だ。

小生は母の存命中は俳句にこれっぽちの興味もなかったが、いわゆる門前の小僧で全く知識がないというわけではなかった。

なんとか全写真に俳句をつけて大胆にも『団塊が思わず嵌まるフォト俳句』と命名して平成十九年に自費出版した。この種の出版物としては本邦初演の快挙であったと自讃している。

「写真はいいが俳句がいまいちなあ」というのが大方の反応であった。俳句を勉強したいと感じていた矢先、同期の大泉氏が「俺も俳句を習っているんだ。どうだ、

このクラブに入会しないか」といって紹介してくれた企業OBペンクラブに早速入会し、平成二十一年から西川知世先生のご指導のもと俳句の勉強を始め、そして病みつきになった。

体力の衰えとともに山登りもゴルフも段々億劫になりだした頃に、一生打ち込める知的な趣味に巡り合えてよかったと皆様に感謝している。

一方、自費出版の『フォト俳句』自体は話題にはならなかったが、平成二十年になってNHKが『カシャッと一句・フォト575』という番組を放映した。

これはお題写真に句をつける、または句に写真をつける、お題にあわせて写真と句を作るという趣向の大衆的な投稿番組であった。

小生の投稿作品は入選頻度が高く相当数の作品が全国放映されたばかりか、小生自身が視聴者代表としてNHKの番組に出演する光栄に浴した。この出演が契機となり同好の士から銀座フォト句会なるお集まりに招待され、その会の有力メンバーになった。

趣味で始めたフォト俳句が世間に広まり、本分野での先覚者の一人としての小生の地位が固まった。このようなDNAを与えてくれた母親には感謝している。

平成二十三年から皆さんのご協力を得て、ペンクラブにフォト句会が立ち上がった。画像を活用したユニークな勉強会として定着し、ホームページに掲載されるようになるのと外部の読者も多く、毎月安定したヒット数を得るようになった。

仲の良い勉強会メンバーが楽しみながら研鑽を重ね、平成二十九年には『フォト句で遊ぼう』という作品集の発刊まで漕ぎ着けた。

この分野では、近年お題写真を見て俳句を作る「プレバト」なるTV番組が巧みな演出で評判になり、一段とフォト句の裾野が広がっている感がある。

企業OBペンクラブも三十周年を迎え先人のご努力に敬意を表すると共に、クラブの更なる発展のためにフォト句会の活動がお役に立てばと念願する次第である。

吟行デビュー

田 中 みづえ

フォト句会に入会し一年、フォトは言うまでもなく、我が句の下手さ、特に日本語の稚拙さを痛感。同時に俳句の面白さに触れ、もっと学びたいと昨年九月、俳句会に移った。十月、まずは形からと「水え」と俳号を名乗り、十一月、箱根の仙石原湿生花園で吟行デビューとなった。花園前で集合。蕎麦屋で腹ごしらえしつつ、湿原は火山の爆発後の窪みに水が溜まって生じたことを先輩方から教わった。冬ざれた空の下、花園を縦横に走る木道を、賑やかな中年女性のグループ、手を繋いだ老夫婦、乳母車を押す若夫婦など老若男女がそぞろ歩いている。

木道の両側の木々の多くは紅葉も終わりに近づき、枯れ始めている。そんな景色の中、少し離れた所の鮮やかな青い色が目を射た。近寄ると、袋状の複雑な形の花である。「鳥兜ですよ」と教えられた。サスペンス劇場ではお馴染みだが、実際にお目にかかるのは初めてだ。こ

こで一句！ いや、「百年早いヨ」と鳥兜に毒づかれたようで、あっさり兜を脱いだ。

木道の片側に茅原が開けた。本道を外れて茅の間を進む。全部ススキにしか見えない。ススキ以外の茅もあるはずだが。植物に疎い私らしからぬ観察は前夜の予習の結果だ。句会で席題が出されると季語を調べるだけで時間切れになるので、季語の下調べをしたのだ。

パソコン画面に出てきた大量の晩秋の季語の中で、いかにも秋らしい「萩（ハギ）の声」が気に入った。でも、何だか字面が違う。あれっ、「萩（オギ）」だ。はあ？

获って何？ パソコンの回答。「ススキに似るが芒がない。穂はススキよりも長く白く柔らかい」。続いて「混同している人が多い」。はい、ここにもいます。そして最後に「オギやススキの総称が茅（カヤ）」。

茅原に深く入り込んだようで、人の姿が見えない。聞こえるのは茅の葉擦れの音だけ。ああ、これが「萩の声」か。その名も神山という山が爆音を轟かせてから三万年、今、静寂の中で萩の声に耳を傾けている私。ここで一句！ いや、入りたい語句が多すぎて、十七文字に収まらない。

鈍色の空から弱い光が射し、その下に広がる枯茅野が黄金色に輝いている。葉の曲線や茎の直線は巨匠の筆も敵わない。まるで屏風だ、それも金箔の。ここで一句！いや、何に焦点を当てればよいのか。とりあえずノートにメモしておこう。「金箔で描くほかなし！」

風に茅が一斉に同じ方向に靡く。ここで下調べで見た「律の風」を使いたい。朝ドラで涼やかな風のような律クン（ぶっちゃけ佐藤健クン）を髣髴とさせる季語だ。だから「リツの風」と早とちりしたが、正しくは「リチの風」で秋らしい風。ふと見ると、茅の間で吾亦紅がピヨコンピヨコン気儘なリズムで揺れている。ここで一句！ いや、吾亦紅も入れると季重なりだ。

茅原を抜けると庭園が開けた。遅咲きの菊や竜胆が咲き、作業員が木々の手入れをし、観光客が池に架かる橋を渡っている。藤棚の下「考える人」や急に立ち止まり空を仰ぐ人、指を折りつつ徘徊、いや俳諧している人は句会の先輩方である。

あっという間に集合時間になり、宿に入り、即、句会。四句を短冊に書いて提出。続いて他の会員の五句を選ぶ。

さすが、どの句も吟行の醍醐味である「囑目」、つまり、その目で見た景色を生き生きと描き出している。言葉も絶妙だ。結果、多くの句が複数票を得た。

私の句は案の定ゼロ票、と思いきや一票ゲット。それは提出時間が迫って焦り、茅野でのメモをそのまんま書いた「金箔で描くほかなし枯茅野」。票を入れて下さったのは何と先生であった。先生の票は二票分だから、うれしさも二倍。総じて私の句への会員評は「着眼点は良いのだが……」「詰め込み過ぎ」「整理されていない」。肝に銘じます！

ともかくにも吟行デビューが無事終了し、ほっとした私を待っていたのは山海の料理。沼津直送という魚の美味なこと！ 会話もワインも進んだ。続いて温泉。神山の噴火に感謝しつつ、つつい長湯した。

部屋で一休み。お腹も暇も重い。「皆さん、カラオケ始めている頃ね。じゃ、お先に」と同室のIさんの弾んだ声。微かな音……荻の声？ すーっと冷たい空気……律の風？ バタンとドアの閉まる音。暇も閉じた。

企業OBペンクラブとの出会い

岩崎 洋一郎

私がこのクラブの存在を知ったのは、一九九五年だったと思います。会社は常務理事を最後に退社し、その後は独立の個人コンサルタント業を始めました。在任中に築いた外国会社関係を中心に戦略的提携や技術提携分野でのコンサルタントとして、順調に事業は進みました。

また、大学のゼミの先輩と後輩が日本興業銀行の企画室にいて、外国から日本の各種企業への紹介を引き受けて処理する部署に属していました。興銀としては日本の融資先との関係上、紹介はするけれど外国企業の側に立って折衝するわけに行かず、代わりに自由な身の個人であった私を推薦していただきました。この方法で新規のクライアントをかなり獲得しました。

事務所の設置は、個人的に親しい涉外弁護士事務所の一部屋を借りることができて、助かりました。その法

律事務所の若手弁護士とも仲良くなりました。ある日、その方から「国際交渉の本を出しませんか？」とお誘いを受けてびっくりしました。その方、仲谷栄一郎先生は筆の立つ方で、それまでに『契約の英語』等の著作がある方でした。ある出版社から『交渉の英語』を執筆する依頼が来たそうです。その方は、自分よりも国際交渉の経験の豊富な私に執筆を譲るというのです。そう言えば、それまでに彼との雑談の中で、私は彼に私が欧米の超一流会社 (DuPont, UCC, ICI, BP Chemicals 等々) との数多くの交渉経験を披露していました。

本を著したことのない私はびっくりしましたが、私の知見や経験が他人のお役に立てればとも思いい、彼との共著を条件に引き受けました。早速本屋に行き、この分野の既刊書や、著作の基本を記した本を求め探しました。ここで、企業OBペンクラブの存在を知り、その著作を買いました。直接的な参考になる内容はなかったのですが、この集団に興味を持ち、加入することになりました。出版用の原稿を書くのは大変でした。常用漢字以外の

漢字を使う、漢字が多すぎる、仮名遣いが今様になっていない等々。それらは全部仲谷先生に直していただきました。そのほかにもいろいろ助言をいただきました。

そのおかげで本の評判はよく、次いで日興企画社から同じような趣旨の本の執筆依頼が来しました。今回も共同執筆として、本格的な本を書きました。上中下の三巻で、中と下巻にはCDをつけて、音声で交渉での声の強さや抑揚等々も伝えました。この本は、十年以上も渉外弁護士の本読推薦書として、渉外弁護士界で推奨されました。このような好ましい結果となったのも、私がある間に企業OBペンクラブの皆様のご経験や発言によって、文筆家としての磨きが一段と向上した所為ではないかと、密かに感謝しております。



企業OBペンクラブの思い出

大野 昶

僕が我らの「皇太子」と同年生まれということもあって、平成という年がはじまったのは会社によってはもう定年の五十五歳でした。

丁度世界ではソ連邦の崩壊に続く、東西ドイツの統一と大規模な変革の時代と重なっていました。

また、大変残念なことですが、日本の経済成長の停滞も平成のスタートと重なっていました。

五十七歳で役職定年が来るのを潮時に、第二の人生をスタートしたので、企業OBペンクラブに昼間参加することは不可能でした。

丁度その頃石川先生（当会員）の講演をお聞きする機会があつて、週末に新聞記者クラブで八木先生（初代会長）を中心に勉強会を開いているから入会しては、と有難いお話があり、それが企業OBペンクラブとの出会いのはじまりでした。

中小路さん流に言えば企業OBペンクラブ内での分派行動だったようですが、部外者の僕には全くあずかり知らぬことでした。

もしこのメンバーの中の北田さんが鳴澤さんの後任として会長に就任しなければ、僕がこのクラブの一員になることはなかったはずだ、と複雑な心境です。

実はこの時の理事の選挙で亀井さんをはじめとして三高、京大のラグビー部のOBが四人いてその票で北田さんが会長に推薦されたようです。

この勉強会のメンバーでペンクラブの会員でなかったのは、僕の記憶が正しければ、中野さんと僕の二人だけだったと思います。その二人が八木先生の「クラブに入つて北田さんを応援しろ」の一声で入会することとなりました。

中野さんはクラブを退会されていますが今も元氣にご活躍のようです。実は伝説上の人物なのですが、皆さん誰でもご存知の、彼にまつわる話題を取り上げます。

朝ドラ「まんぷく」の安藤百福さんがカップラーメンで全国制覇をするについて、これを三菱商事の販売網に

乗せた人こそ中野さんでした。まず大阪支店の担当者として日清食品のカップラーメンを西日本一円に広げました。ここで商事内に問題が生まれました。東京本社担当者はカップラーメンを馬鹿にして真面目に取り上げようとしませんでした。ここで多分日清食品からの要請だったでしょう、中野さんが東京本社に転勤となりました。この後の中野さんの努力でカップラーメンはついに全国区の商品となりました。この事実をNHKは取り上げるのか、中野さんの登場を期待しているのですが。

この話の他にも中野さんの大活躍はあの熊取谷^{いすた}さんとのベブルビーチ・ゴルフクラブの買収劇でした。今でも中野さんは「あれほど注意したのにサインをしてしまった」と残念がっています。

ペンクラブに入ってから素晴らしい方々とお会いできました。特に印象に残った方々に触れたいと思います。僕にとって八木先生と石川先生は特別の存在ですが、ご存知の方も多いかと思えますので割愛します。

最初に感激したのはキリンビールの方々でした。「午後の紅茶」のヒットについての亀井さんのお話でした。

一女性の提案だったようですが、今でも大ヒット商品です。キリンの風通しのよさに感心しました。亀井さんは偶然にも信越化学の三宅さんと神戸一中の同級生で、三宅さんが僕の案内で壁のできる前のベルリンのブランドンブルク門をバスで通ったという思い出があります。その上亀井さんは猪木正道さんが京大に戻った時のゼミの学生さんだったとお聞きしてますます驚きました。伊賀上野の猪木家とは我が家は親戚です。

その部下の阿部さんも凄い方でした。彼がキリンバレッジの社長時代にはアサヒ飲料は手も足も出ませんでした。ワンダがファイアーに肩を並べるのは阿部さんが社長を辞めた後の話です。アサヒは樋口さんの後の社長の池田さんがアサヒ飲料の社長を後継者に指名したことから今の大差がついてしまいました。

話を平成に戻します。今の天皇にしてみれば、世間で定年の五十五歳で即位して三十年、八十五歳ではないですか。いい加減にしてくれよ、というのが本音でいいと思います。天皇という激務を氣遣う周囲がないのはどうしたことか。

平成のわが半生

西川 武彦

平成が始まった一九八九年、筆者は香港での駐在が終わって東京本社に戻らず札幌にいた。

海外での任務は、アジア・オセアニア地区での広報・渉外であった。一種の情報活動で、出張した回数は数えきれない。VIPの接遇も仰せつかり、作家では、同じ会社にいた深田祐介さんを始め、五木寛之さん、堺屋太一さん、渡邊淳一さんなどとゴルフや夜の世界で親しくご一緒させて頂いた。

今度は、北の大地での同じ仕事。道内のNO2扱いでトップの裏の顔と言ったところか。札幌では、仕事で知り合ったホテルの総支配人や大手タクシー会社の経営者たちと意気投合して、ボーカルカルテット「ダンディフォー」(D4)を結成。歩く広告塔として道内で歌いまくった。サッチョンだから夜はススキノに沈む。

こんな美味い仕事は長続きしない。二年後、本社に呼

び戻された。今度は人造りの部門長だ。社員研修・能力開発などだが、退職後の過ごし方も主なテーマの一つになりつつあった。有言実行せねばなるまい。

B型は一気に走った。東京に戻った歌仲間とD4を再生、香港時代の仲間とは男声合唱団を再結成、ゴルフをやめて会員権を処分し、八ヶ岳山麓にログハウスを建てて都会と田園の棲み分けを始めた。

間もなく、同じ指向の、個性豊かで各種才能を持つ別荘族で構成する「SNAC」(Society of Nature & Culture・八ヶ岳富士見高原の自然と文化愛好会)に誘われた。会員数二〇〇。そこで『高原の春秋』という会誌を編纂していたのが、深田祐介氏の秘書G夫人だ。深田さんはJAL時代広報部に長く、仕事仲間には筆者も親しい都甲昌利さんがいた。

その頃である。ネタ提供などで少しは関わった深田さんの『新西洋事情』『新東洋事情』に感化されて、潜んでいた物書きへの憧憬が頭をもたげた。ご縁もあって、八ヶ岳と都会の棲み分けを描いた『ウッディライフの四

季々八ヶ岳富士見高原の十二月月』が、創樹社から刊行され、新聞・週刊誌で嬉しい書評も頂いた。

まもなく、その団体では、村長役の会長に推されて以降十二年間、Gさんたちの事務的援助を得てお役を務めたのだから、縁は奇なりである。

そんな折、ある時卒サラ後のセカンドライフを推進する某省の外郭団体を訪れると、受付近くのブースに企業OBベンクラブの入会案内冊子が置いてあった。捲れば運営委員長が事務局長に都甲さんの名前があるではないか。早速連絡をとり、OBペンに入会させて頂いた。まもなく、クラブ内の運営がなにかと揉めるなか、人畜無害だったのか「とにかく冠をかぶれ」というご命令で、数年前まで十年間も会長職をお預かりした次第である。

その間ベンクラブ活動では、時代の流れもあり、紙の出版と並行して、独自のサイトを立ち上げてネットでの発信が主流になり、今に至っている。

会には、一時名誉会長を務めた深田さんの意向もあって有能な女性群が加わり、ぐっと柔らかくなって活性化

した。現在の会員数七十名は、会場として定着している代々木のオリンピック記念青少年センターに見合った適度な規模として維持されているが、高齢化は避けられないから、企業と同じで、常時若返り・リフレッシュのため知恵を絞らねばなるまい。

日本人男性の平均寿命をこえた今、筆者のクラブ生活は二十年近くなった。その間に綴って会のサイトに載った川柳は約三五〇句、エッセイは九十点、掌編小説は七〇編となるうか。大変な数である。川柳は、出版された卒サラ川柳本に秀句のみ収まった。

エッセイ・小説も、取捨選択・編集して出版するという夢を持っている。

数年前から自宅の一階でシェアハウスしている数名のなかに、イラストの巧みな若い女性がいる。いずれは彼女に頼んで装丁して貰い、あの世への土産に出版するか、とご隠居は怪しくつぶやいている。

激動の昭和から平成、そして『悠遊』

富岡 喜久雄

今年の『悠遊』のテーマは「平成と共に」とある。

「平成」の典故は史記の「内平外成」だそうで、内に平らかを願うてのこととか。平成冒頭には、湾岸戦争でイラク虜囚の身とはなったが、その後は平らかだった。

だが、我が人生、どうも「激動の昭和と共に」の印象の方が強い。習近平も訪ねたという「盧溝橋」の銃声一発でこの世に生を受け、国民学校に入学すれば、幼い頬に予科練仕込みのビンタを貰い、どんぐり拾いに、松根油集めと、学業どころではなかった。しかし努力空しく二年で敗戦。DDTとサントニン、脱脂粉乳と余剰小麦の米国援助で生き残ったら、世は「義より利」の世界となった。ガンバリズムとモウレツでお家大事と頑張れば、何時の間にやら、GDPも世界二位。「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と煽り立てられ、NYにビルまで買う始末。と思った途端に長き停滞。合理化旋風吹き荒れて、男女

雇用均等法に非正規雇用、今や外人技能者受け入れに名を借りた移民導入と、巻き込まれた戦争こそ無かったが、思えば世はそれほど平らかでもなかったようだ。

日本の歴代天皇は神武より平成で百二十五代だそうだが、古い先輩達は神武、綏靖、安寧……と暗記させられたと聞く。一方元号による年号表記は実務的には不便だ。今年まもなく新元号が発表されるが、配られたカレンダーには皆、元号がない。

途中で変わるからだ。タイには仏歴、イスラム圏にもイスラム歴があったから、それぞれの文化を尊重するは良しとしても、合理性は無視できなからう。パソコン出現前、大型コンピュータへの経年計算プログラム作りで、明治は六七、大正は十一、昭和は二五を組み込んで換算したことを思い出す。西暦なら手間がないのにと考えたものだ。官庁文書は今でも必須だそうで、とは言え元号などは使わなければ良いなどと言えば、日本としての情緒もなくなるから言わない。

この身は嘗て天皇陛下下の教育係も務め「日本及び日本人」なる雑誌を主宰した杉浦重剛の作った中学校の卒業

生でもあるのだ。学制改革間もない当時、新制中学は進駐軍のバラック跡だった。それに引き換えコンクリート造りの校舎の玄関ホールには「義を見てせざるは勇なきなり、これぞ日本人と言う」と大書されたレリーフが掲げられていて、毎日登校の都度それを見上げ、帽子をとって一礼、口述したことを思い出す。後年、発展途上国の国造りに意気を感じたのもその影響かもしれない。

職業生活でも、忖度、巧言令色、諂いを嫌い「義と仁」に生きてきたと言えば、大言壮語の嘘だとの声が聞こえそう。真偽はともかく、最後のシンガポール子会社での再建を済ませて、悠々自適の身になった頃、経済的には窮々でも、気分的には悠々と過ごせるだろうと期待していた。だが、落ち着かない。そこで、閑居して不善を為しても拙いと、現役時代に仕事上見聞した発展途上国の発展に協力しようと、JICAの民間支援活動に応募してみた。一応オース国の首都機能拡充とのテーマだったので都市開発の経験が役立ちそうだと思えたからである。先方は一勝負終えた歴戦のビジネス戦士達を活用しようとの思惑の様だった。それでも経歴から提供可能

力、語学力、途上国支援への想い（情熱）等の審査があった。面接官の経歴も多様のようなだったが、同類の気安さからか、上から目線からか、その一人が言った。

「今や悠々自適でしょう、なのに、どうして応募したのですか」と聞いてきた。そこで、思わず

「悠々などとは、とんでもない、窮々自適ですが窮乏不食ほどでもない。しかし、そうした国も未だある事を見てきたので、義を見てせざるは勇なきなりでしょう」と、つい余計なことを言ってしまった。

多分、「生意気な奴だ、却下」となるかと即座に反省したが遅かった。しかし結果はOKだったので彼等も「義を感じる勇者」だったのだろう。それから四年、最後に国立病院の民営化計画をも纏め、ラオスを去った。

帰国後、海外経験者の集まりであるとする「企業OBペンクラブ」の紹介記事を見て、自叙伝執筆の文章修業をと参加希望を出したところ、自己紹介文「仁義」が刺激になったか、仲間に入れてもらえた。

爾来、励むも文にはならぬが、

気分だけでも悠遊の境地を満喫したいもの。

OBペンクラブとの出会い

大塚 喜子

「読むことは苦手だけど、書くのは好き…」そう言いながら文章教室に通っていました。愛用していたワープロがダウンしたので、製造元の富士通に問い合わせると「この製品は既に部品の保有期限が終了しました」と素気ない回答でした。書きたいと思える話が見つけれないままに、ニューヨークに行くことにしました。膝の痛みで、サポーターが手放せない私を心配した夫が「ネタ探しに行くの?」と言いながら同行してくれました。

私達は、互いの年齢を考えれば、今回が最後の外国旅行になるのではないかと思い、画集片手にあの絵も観ておきたい、この絵も観ようと言いながら美術館を巡りました。

十日目に膝が音を上げて歩行が辛くなった以降は、ホテルの部屋でテレビを見たり近くに食事に出かけたり、散歩をしたりしました。

セントラルパークで乗った馬車の御者は、膝を庇いながら辛そうに手綱を引いていたので、夫が見舞いを言うとは「手術したいが二万ドルかかる…」と言って肩をすくめました。

ニューヨークから帰った半年後の三月に、私は新橋の慈恵医大で（両膝関節置換手術）を受けました。摩耗した自らの膝関節をセラミックの其れに取り換える手術です。パソコンを病室に持ち込んで、この度のニューヨークの紀行文を書く事と日米の医療事情を調べたいと思いました。

全身麻酔による二時間の手術に痛みはありませんでしたが、三十日間のリハビリは辛かったです。

九階の病室の窓から、ライトアップされた開業六十年になる東京タワーを眺めては、エンパイア・ステートビルの上から見たニューヨークの夜景や、美術館で鑑賞した絵画の数々、出会ったアメリカ人などを想い出していました。

病室で「紀行文を書こう」と言う自分の了見を一笑し

ながら、飽きることなくネットサーフィンをして出会ったのが『OBペンクラブ』です。そこには

「よく読むことが、次を書くための動機づけにもなります。一般の方の見学や体験出席も歓迎です」とあります。私は次回の「何でも読もう会」に体験出席することを目標に定めて、辛いリハビリを頑張りました。

OBペンクラブに入会して半年になりますが、この間に十二冊の本を読みました。其々の読後感、生い立ち、背景等に思いを巡らすのは至福の時間です。

ニューヨーク巡りの短文を書いてみたいとの思いつきが、OBペンクラブとの出会いに繋がったのは幸運と言うほかはありません。



平成を振り返る

森田 晃司

平成最後の年の暮れがやってきました。昭和天皇の御崩御で幕を開けた三十年前の平成元年は、劇的な出来事が相次いだ年でした。今もかまびすしい議論が続く消費税が初めて導入され、六月には天下を騒がす天安門事件が発生、更にベルリンの壁が崩壊して東西冷戦が終わりを告げました。年末には日経平均株価が史上最高値の三万八千九百十五円を付けましたが、バブル崩壊とそれに続く「失われた三十年」が忍び寄っていました。

劇的に幕を開けた平成を振り返ってみると、

共産主義の終焉とグローバリズムの浸透、

I Tの驚異的な進化と社会の激変、

少子高齢化の急速な進展と個人主義の蔓延、

更に、日本に焦点を当てると、

日本型経営の危機とGDPシェアの急落、

中国、北朝鮮の急激な軍拡・覇権主義の脅威、

相次ぐ災害と原発事故、並びに原発行政の停滞、
メディアの信用失墜と影響力の低下、

などが目につく時代でした。

第一次世界大戦の結果、共産主義国家ソ連が誕生しました。第二次大戦の結果、中共、北朝鮮、ベトナム、更には東欧の共産主義国家群が誕生しました。七十年間の実験の末、平成三年にソ連と東欧を中心としたコメコンが解散し、平成五年にはその残滓を引き継ぐかのように、今度は西欧を中心にグローバリズムの見本のようなEUが誕生しました。国境の壁を取り払って、単一の思想・ルールで世界を支配する意図においては、グローバリズムは共産主義と何ら異なるものではありません。

日本は、終戦後は経済に特化した復興を図り、赫々たる成果を上げて、GDPでは世界第二位、一人当たりのそれは米国をも凌駕しました。

しかし、平成元年に始まる日米構造改革協議、それに引き続く年次改革要望書などの米国からの圧力により、日本型経営の変革を迫られ、GDPの世界シェアは平成

元年の十四%から二十九年には何と六%まで急落しています。まさに失われた三〇年でした。

役員報酬が大幅に増加する一方で、リストラと給与カットが横行し、一億総中流の社会は崩れ、伝統的な生活様式や価値観に対する誇りも、自信も失われました。米国発のグローバルイズムの大波に飲みこまれて、日本社会や暮らしの独自性は薄れつつあります。

訪日観光客が三千万人を超え、外国人労働者の受け入れが拡大する一方で、日本の伝統文化やアニメやクールジャパンと呼ばれる日本人の生活様式などに対する海外における評価の高まりが、鮮明になった時代でもありました。

平成二十八年の伊勢志摩サミットでは、G7の首脳が揃って伊勢神宮を訪問しました。神道を軍国主義の背骨と見なして、神道指令を発してその撲滅を図った終戦後のGHQの姿勢からは想像も及ばぬほどの変化です。

平成二十五年の和食の世界文化遺産登録に尽力され

た京都の老舗料亭の主人、村田吉弘氏は、登録の意義を、「外国人に和食を知ってもらい、もっと普及するきっかけになればよい」と説明し、続けて、「本当の狙いは、これを機会に日本人に和食の魅力を再認識してもらうことです」と述べておられます。

思えば、平成は、現代日本人が蔑にしてきた日本の魅力、外国人が教えてくれた時代でした。御代替わりで迎える時代に

は、日本人こそが、日本の素晴らしい文化、伝統、歴史を正しく認識し直して、日本のかけがえのない社会と暮らしを大切に守り育てて行きたいものです。



写真 野瀬隆平

平成元年の出来事とその波紋

児玉 寛嗣

平成の時代、この三十年間で世界も大きく変貌した。平成元年というと西暦で言えば一九八九年。この年にはビッグ・ニュースが二つあった。一つは六月に起きた「天安門事件」である。それは、民主化を積極的に支持していたと言われる胡耀邦元党書記の死去を引き金に中国で起きた。学生を中心とした民主化運動デモを軍隊が武力で弾圧したという事件である。もうひとつは十一月に起きた「ベルリンの壁の崩壊」である。東ドイツ市民の大量出国の事態に耐えきれなくなった東ドイツが国外移動を緩和したために歓喜のあまりベルリン市民が壁を壊したものである。

二つの出来事の波紋がその後の世界に大きな陰を落としていると言っても過言ではない。

まず一つ目の出来事、「天安門事件」である。この事

件を契機に中国の支配者は一党支配を続けていくには、国民の目を政治への関心から逸らせる必要があり、それには国民を経済的にいっそう豊かにすることが肝要だと考えるようになった。そして経済成長を加速し長期間持続させて、国民を豊かにすることに専念した。独裁を続けている国は選挙を行っている民主的な国よりも大衆の動きに敏感なものである。政治は共產主義だが経済は資本主義という奇妙な体制のもとで、驚異的な経済成長が長年継続した。平成二二年には日本を抜き世界第二の経済大国となった。最近はやや息切れながらも、まだ成長を持続している。この経済力を背景に軍備を拡大し、無人島に基地を作るなど東南アジア諸国や日本に脅威を与えている。経済では「一帯一路」政策により中国の影響の及ぶ経済圏の拡大に務めている。ヨーロッパのある政治家は「自由・民主・人権などの西側の価値観とは異なる制度を作り出すものであり、これまでの自由経済の秩序を崩壊させるものである」と警戒している。

中国は次世代情報技術、高性能NC工作機械、ロボット、航空宇宙、新材料、生物医薬、高性能医療機械など、

「ターゲット型産業政策」をとっており、「このままでは中国の一人勝ち」となる可能性もある。

アメリカと張り合う世界のビッグプレーヤーになった。ヨーロッパに原点をおく価値観をスタンダードとしてきた世界秩序を、伝統的な中華思想に裏打ちされた独自の中国スタンダードによる世界秩序に置き換えようとしている。一方で格差や言論の自由の封殺、チベット、ウイグルなどの少数民族の不満などがあり、三十年前の事件を惹起させるような動きも平成のあとに起こるかもしれない。新しい時代も予断を許さない。

次に「ベルリンの壁の崩壊」であるが、これは冷戦構造の終焉を象徴するものであった。崩壊は外庄ではなく自壊であった。ソ連のゴルバチョフとともに冷戦終焉の立役者であったアメリカのブッシュ大統領（先代）が平成の終わりの前年に亡くなったのもある時代の終焉を思わせる。

壁の崩壊後、東西ドイツは統一され、その存在はますます大きくなり、経済力でヨーロッパを牽引する国とな

った。今や、EUのリーダー的立場である。一方、ソ連の崩壊でその衛星国の頸木くびきからの解放が次々と起こった。抑圧されていたバルカン諸国（多民族国家）では開放の反動で民族同士の殺戮、民族浄化が相次いで引き起こされた。

ソ連の力が落ちたことでアメリカが誰にも邪魔をされない世界の警察官となった。まず、隣国クエートに侵攻したイラクのフセイン大統領を諫めるために始めた湾岸戦争。これに端を発し、アメリカは中東紛争に深く介入していった。ソ連に冷戦時の力があればフセインもソ連を味方につけて牽制し、アメリカの攻撃を防げたかもしれない。しかし、戦争は中東に混乱をもたらした。

狂信的なイスラム教徒から、アメリカは九・一一という逆襲を受けた。その報復のため首謀者を叩く目的のアフガン戦争、フセイン大統領抹殺と、中東の混乱は収拾のめどがたたない状態となった。ヨーロッパ文明の規範に真っ向から挑むイスラム過激派の破壊行為というやっかいな産物をもたらした。その余波である難民問題なども新しい時代に引き継がれる。

『企業OBペンクラブ』と私

清水 勝

『企業OBペンクラブ』創立三十周年！ 関係された諸先輩、会員の皆さん、その感慨はさぞかし深いことと存じます。

先輩の皆さんに本クラブを設立して頂いたお陰で、自分を少しばかり変えることができたように思い、感謝の気持ちを伝えし、当クラブとの関りを記します。

入会のきっかけは、別の会でご指導頂いていた大野さんから

「定年後どうするの？」と問われたことに依ります。

平成十七年七月に定年を迎え、即入会しました。

その時に某先輩から

「過去話と自慢話を避けるのが暗黙のルールだよ」

「定年後も未来志向で行こうということだな」

とのアドバイスを貰いました。

確かに錚々たるメンバーで構成されており、過去に留

まっているような暇人はいない感じでした。セカンドライフをどう過ごそうかと考えていただけに、大いに刺激になりました。

「これを機会に俺の新しい人生を切り開くのだ！」と自分に言い聞かせ、何事にもポジティブに意欲的に向かうとの思いが湧き出たのです。

そんな時に、平尾事務局長と松谷運営委員長から

「来年度から新しい体制になるので、金融機関の経験を生かして会計をやって欲しい」と、依頼というよりも強要に近い感じのお話がありました。金融機関といっても保険会社であり、会計のことは何も解らなかったのですが、ポジティブに意欲的に生きると決めていただけに断るわけにはいかないと、引き受けました。

幸いにも大泉さん、大平さんの財務担当理事のご指導と、山縣監事の厳しい眼により、何とか平成二十七年までの十年間を会計として務めることができました。

分科会は入会当初「何でも書こう会」と「ペン川柳」で勉強させていただき、平成十九年に西川さん、濱田優さんの呼び掛けでスタートした「掌編小説勉強会」に加

えてもらいました。その後、「ベン川柳」からは失礼して、美味しい店が探訪できるのに魅せられて「フォト句」に加わり、中村宗匠のご指導を受けています。

最近では会員有志が「何でも書こう会」があるなら「何でも読もう会」があってもいいじゃないかと始められた読書勉強会にも参加させて頂いています。

開催曜日の関係で参加はできないものの、政治・経済・社会問題を議論されている「サロン21」には、プロマネ、森田さんのレポートをHPで読み、関心をもって勉強しています。

お陰様で今までに「何でも書こう会」、「掌編小説」、「フォト句」の作品が駄作ながらも数だけは増えてきました。気を付けているのは、過去の自慢話を書かない、会社を舞台にした小説は採り上げないということです。

従って、書く材料がなくなると嘆きたくなるのを抑え、こはポジティブにと取材旅行と称して出かけたり、時代小説に目を向けようと図書館で調べ物をしたりして、楽しみながら書き上げています。

また、カメラにはそれほど関心がなかったのですが、

「フォト句」での句を付けるという思いで写真を撮る面白さに気づきました。

こうした『企業OBペンクラブ』での勉強の場や発表の機会を活用するうちに、何となく自分のフィールドが広がっていくような感じがしています。また、メンバーからの指摘や感想、ご叱責により、文章力や表現力が徐々にではありますが、身に付いてきているように感じ、大いに感謝しています。

このように「月例会」を含め、月に四回はオリンピック青少年センターに来ており、その後の懇親会を楽しんでいます。家内から喜ばれているのは言うまでもありません。

なお、書いたり、読んだり、パソコンを開けたりと座る作業が多いので、これでは身体がダメになると、会社仲間の「山歩の会」や地域の「ウォーキング会」、そしてスポーツクラブでのヨガやストレッチをしています。引き続き、ポジティブに意欲的に未来志向に心がけ、創立五十周年を迎えられれば最高の人生になります。

サラリーマンの「三き」

塚田 實

昭和天皇が崩御され「平成」が始まったとき、私はニューヨークに駐在していた。この時期日本にいなかったことは幸運だった。日本はバブル経済の頂点に達する頃だったが、海外にいたので投資活動など何もできなかった。おかげで損をこうむることもなかった。国際的にもベルリンの壁が崩壊するなど、激動の年だった。

平成元年（一九八九年）会社生活では、思い出に残る貴重な経験をした。半導体に関するモトローラ社との特許訴訟と、日立の当時最大のM & A案件である情報機器販売会社の買収である。訴訟では、相手側弁護士から英語で証言録取（Deposition）を受けたが、三日間耐えぬいた。アメリカの司法制度を学ぶ良い機会だった。買収案件では、時差のある日米五か所を二十四時間電話でつなぎ、やはり三日間ほぼ寝ずに交渉した。交渉で決まったことは次々に書面に落として、弁護士と一緒に確認し

てゆく。体力と知力の勝負だった。どちらの案件も成功裏に終えることができたのは幸せだった。

家族四人が助け合って、ニューヨーク生活を無事終えることができ、皆の一体感が増したことも収穫だった。

平成二年に帰任し、日立の国際部門でアジア事業を担当した。私は若い頃からアジア関係の仕事が多かった。ベテランは格好良く見える欧米の仕事を最優先し、成果をあげるのに時間がかかるアジア関係の仕事は若いものに回された。この時期成長するアジアを担当できたのは幸運だった。ところが上司は欧米派だった。現場を大切にし、現場の意見を取り入れるべく頑張ったが、上司は現場を理解せず、机上で大所高所から指示だけを出す人だった。私の評価もどんどん下がった。会社を辞めようかと何回も思った。

その後、先のM & A案件のリーダーだった人が上司となった。現場への目配りもしながら、大きな方向性も指示し、人とのつながりも大切にしている人間性豊かな方だった。この方から会社人生の貴重なアドバイスをいただいた。「三き」である。

先ず「やる気」である。基本的な業務知識を幅広く身に付け、そして自分の強みと言える得意分野を必ず一つ以上持つこと、いわゆるT定規論である。また社内外の顧客と幅広い人間関係を築くためには、文化的素養を備え、教養ある人間としての魅力を身に付けることが基本である。自分の国のことを理解する良き日本人でなければ、良き国際人にはなれない。

本人の「やる気」がなければ何事も始まらない。新しいことに取り組む意欲も「やる気」の一つである。日立では、これを「開拓者精神」と呼んでいた。

次は「引き」である。長い会社生活では、次々と上司が変わる。必ずしも自分を大事にしてくれる上司に恵まれるとは限らない。寧ろ、そうでない上司の下で働くことが多い。そんなとき腐ってしまつては、どうしようもない。じつと我慢し次の機会を窺う。それをよそから見ている人が上司に来ることもある。その上司の「引き」にしっかりと実績で応える。「引き」に感謝して決して恩を忘れない。偶々旨くゆくと自分の実力と誤解することがある。そうなると引いてくれた上司の信頼も失うこ

とになる。慢心に陥ることなく「引き」に真摯に応える謙虚さが求められる。

三番目は「ツキ」である。いくら自分が頑張つて、上司に恵まれても、周りの事業環境は刻々と変化し、自分で対応できないことも多い。いかなる変化にも最善の対策で対応することが要求されるが、どうにもならないときもある。「リーマンショック」のような大波に洗われることだつてある。これで影響を被らなかつた人は少ない。運に恵まれないときは「これも人生」と達観し、次の選択肢を真剣に探るしかない。

会社生活で「三き」は励みになった。しかし「三き」に恵まれる人は寧ろ少ない。競争社会ではやむを得ない。偶々「三き」に恵まれた人は運が良かったのだ。

人生百年時代、会社生活はその半分以下でしかない。会社を卒業すると、「競争社会」から解放される。解放された時間をどう有意義に過ごすのか。次は「協創」だと思つている。新しい友人と励まし合いながら、楽しくクリエイティブなものに向かって挑戦する。ここで必要なのは「三き」の中の「やる気」だ。頑張ろう。

快拳！ 平成期における母校の再興

上原 利夫

私が昭和二十二年に入学した大阪の私立浪速中学は、戦前は神道の男子校であったが、戦後はGHQの指令により、神道による教育が禁止された。阪和線杉本町駅に近い旧制大阪商大（現大阪市立大学）が進駐軍に接収されていたので、進駐軍がアメリカンフットボール、ボクシングを生徒に教え、運動部として活動していた。私は陸上競技部で練習した。学校は家から至近距離にあったので、予鈴がなってから走って行くことも屢々だった。家ではラジオを組み立て、英会話教室にも通い、中学時代は楽しく充実していた。

私は浪中に三年通っただけで、高校は大阪府立住吉高校を選んだ。国立大学へ進学し易いからだった。兄は高津高校から東京大学理科へ進学した。私も同じコースを試みたが、近代経済学に転向し、一橋大学へ入った。

ところが、十数年前から浪中浪高の東京同窓会に出席するようになり、母校の近況を知った。大正十二年創立の国学院系統のこの学校は、あと四年で創立百周年を迎える。私が入学した時は創立二十四年（旧制中学）だった。私は新制中学一年生として入学し、転校した公立高校で初めて男女共学を経験したが、母校も今では男女共学で、神道に基礎を置く「浄明正直」「文武両立」を理念とする教育改革を十年かけて行なった。想像を絶することだ。正門横に新しい鳥居と神殿を持つ学院神社が造営され、八階建の校舎が聳え、屋上から伊勢神宮が遙拝できる。生徒数は二千五百名を超えている。特色は、部活として神楽部と雅楽部があることだ。大学進学率も改善された。昨年初めて東京大学、京都大学、大阪大学、北海道大学への合格者が出た。平成の快拳である。

昨年、平成三十年秋の中高東京同窓会は、宮司が会長を務める湯島天満宮の社務所で行われた。同窓生には有名な落語家がいる。売れっ子は、大学出の笑福亭鶴瓶。NHKの『鶴瓶の家族に乾杯』は二十年も続いている。

この日出席したのは、林家ペーだった。妻のパー子は来ないが、大相撲のテレビでは、升席で観覧しているリンクの衣装の夫婦を見かける。もう亡くなったが、直木賞作家になった藤本義一が私の二年上にいた。浪速高校から浪速大学（大阪府立大学）を卒業した。

公立の新制中学が整備されていなかった頃、昔からあった私立は急激に生徒数が増え、この傾向は六年ほど続いたが、それ以降応募者はがたと落ち、遂に中学は廃止になり、高校一本になった。しかし、新制度になって、中高一貫校として進学校を目指した兵庫県の灘や甲陽学院（東京では麻布、開成）など資金力のあったところは、公立を凌駕し私立時代を築いた。学校の盛衰は企業同様、戦略次第である。公立中学が軌道に乗ってからの私立高校は、新しい教育理念を掲げた新設高校が伸びている。浪中浪高でも、住友金属工業の鹿島製鉄所副所長から大阪府立高津高校校長へ転身した木村彦彦氏が招かれ、中興の祖となった。彼は現在、学校法人浪速学院理事長、学院長、高校校長をされている。広島大学の出身である。

私が入社した住友商事は、住友金属工業の鋼管を扱っていた。住金はその後和歌山と鹿島に製鉄所を建設し、建設用鋼材、自動車用薄板を製造した。住商はその恩恵を受けた。この大事業を体験した木村氏の苦労を私は想像できる。私の学友が多く住金にいたからである。

母校の活動は、YouTubeで見ることができる。高校数学科の教員に「企業OBペンクラブ」の八木信男さんがおられる。一昨年二月の熱海合宿で私が出した八百字の「神宿る母校の再興」を通して、清水現会長が八木さんと私の仲をつないでくださった。八木さんとは昨年八月有楽町で初めて食事をした。八木さんは雅楽部の顧問で、実技もされる。アメフト部の顧問でもあった。大阪市大山岳部の先輩に、私が高校時代に広島国体で伯耆大山へ一緒に登った高津高校の藤本勇さんが八木さんと懇意であることが分かった。そして藤本さんがわが一橋山岳部先輩の不世出のクライマー小谷部全助さんの信奉者だと分かった。不思議な縁の繋がる話である。

私にとって平成とは

上田 信隆

平成は今年の春で終わろうとしている。私にとって平成とは何であつたのだろうか。答えは間違いなく平成とは私の晩年だと言える。たまたま五十歳をしてサラリーマンを辞めて企業家の端くれになつた私は、それが偶然平成元年であつたのだが、平成が終わる今、七十七歳を迎えやつと会社勤めを終わろうとしている。サラリーマンの卒業見込みの生徒が長い時間をかけて卒業した気分だ。

長くやればよいというものではないが、長く働けたことは健康な体に生まれたことに感謝すると同時に、周りの人達のご協力あつての賜物とつくづく思うところである。

しかし人間はこれでも十分に生きてきたかと自問すればまだまだ不十分と思わざるを得ない。おそらく多くの人達は、十分に生きたなどとは言えないのではないか。

レスリングの金メダリストの吉田沙保里が引退会見をしたが、充分やりきつたというのは本人だけしかわからないものだと思う。

サラリーマンにせよスポーツマンにせよ引退を決めるのはあくまで個人の意思次第だと思う。若くともさつさと引退して自分の好きなことに人生を送る人はよく欧米にはいると聞く。こんなにも仕事にしがみつくのは日本の、特に我々の世代の特質なのかもしれない。戦後の高度成長期に育つた我々はいつの間にか仕事人間になつてしまつた。別に悪いことだとは思わないが所詮は環境や時代には勝てないということだ。同時に時代に合せた生き方が一番楽な選択だと言える。

仕事にせよ結婚にせよ多くの人は無難、安定といったものを選ぶことがスタンダードと言える。自分のこととはかく、他人や子供達には多くの先輩は無難な道を薦めている。リスクをあえてとることなど普通に考えればお薦めとは言えない。経験をつめば積むほどリスクの恐ろしさを知るからである。若者が保守的と言おうが頑固と言おうが、多くの人は自分の意見を通そうとし

ている。だんだん経験を積みば仕方ない結論と言えると思う。

少なくとも私は、日本の今後についてあまり心配はないが、最近の世界の動向については心配することが多い。特に極東アジアについては顕著といえる。我々の常識も、民主主義に慣れた日本の見解も近隣の諸国の見解には戸惑うことが多すぎる。

近ければ近いほど悪い噂が耳に入ってくるものだ。相手にせずでは済まされない。見過ごせば事態が更に悪くなるばかりだと思う。このようになったのも我々の対応に責任の一端があったのかもしれない。敗戦によるトラウマがいつのまにか日本人の自信のなさにつながったと言える。逃げて、後回しにしてあまりいいことはない。

ゆっくり余生を送ることも選択肢の一つであるが、自分たちの出来る範囲で後世の人達に出来ることをするのも大事な選択の一つだと思う。他人事のように解脱を決め込むには我々は、まだまだ修行が足りてはいない。出来ることを責任を持って実行するしかない。手はじめに、身近なところから言えば、新聞やその他のメディアの論

調をよくみて選挙に一票を投じることだ。幸い今年は参議院選挙もある。民意を正式に反映するのは選挙を置いて他にはない。かつて郵政民営化とか、少なくとも沖縄の基地は県外と言いわざわざ外国に行って謝罪をするトップを多くの日本人は選択した歴史を持っている。歴史の良否は後世が判断するものだが、生きている間でも思慮ある判断を出来るだけしたいものである。私も含め歴史的な判断は大変重く、難しいものではあるが、意見はどうしても言わなければならぬ。

私たちは後何年生き続けることが出来るだろうか。明日突然倒れるかもしれない。言い残すべきことを言わずしてこの世を去るのも心残りというものだ。どうすればよいかと聞かれれば、今の今を一生懸命生きていくしかないと思う。これしかないのだ。自分自身に問いかけて本当にこれでよいかを考えてみたいと思う。その時に最も注意することは、出来るだけ人に迷惑を掛けないことだと思う。迷惑を掛けないためには、出来るだけ人の意見をよく聞き、よく勉強する以外に方法を私は見つけることが出来ない。自分には謙虚であるべきだと思う。

私の脳トレ・ジム

稲宮 健一

高校の同窓会で鶴飼君が企業OBベンクラブの肩書が入った名刺を示し、クラブの活動を紹介されたのを覚えている。その後、大学の講師が定年になり、さて次に何か面白いことはないか、若しかしたら、あのクラブは狙い目かもしれない、訪ねてみよう。当時は入会に会員との面接があり、田谷さんと一緒に居酒屋で平尾さんによる入門審査を受けた。変な奴とは思われなかったようで一員に加えて頂いた。

私の選んだ参加部門は「何でも書こう会」と「川柳」だ。自由なエッセイを書く「何でも書こう会」は会の十日程前に天井を眺めながら、漠然の中からヒントを探り出すことから始める。社会問題や、旅日記などが多い。頭に浮かんだ題目と粗筋を考えて、まず書き出してみる。構わず書く。このことを言いたいと思うことを文字で

綴ってみる。文章の長さは規定の八百字より長めになる。文字で書かれた内容は他人の流儀でも読める。誰にでも伝えられる状態だが、書かれた主旨と読者の理解は同じとは限らない。この筋で誰かがにつこりしてくれるかな、ちよつと恥ずかしいかな、など考えることが楽しみの第一歩だ。さらに推敲に取り掛かる。黙読してこの文が読み手に容易に受入れてもらえるか心配だ。読んでは直し、直しては読み、頭にすつきり入るように少しでも洗練された文章になるように手をいれる。そして八百字にまとめるのである。

会の当日は原稿のコピーを配布して、二十名前後の会員の前で読み上げる。記述のあいまいだったところや、異なる意味に受け取られた異論や、てにをはの感覚の差の指摘など、成るほどと思う助言があったり、大幅な文の構成の提案などの意外な意見や、色々な面からのつつこみなど議論に花が咲く。

川柳を考える時、幕末の落書と言われている「泰平の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も眠られず」がい

つも頭にある。五七五ではないが、黒船来航の驚きと不安を的確に表している。こんな風な短い五七五で人に訴える句ができないか。月例会があり、月毎のお題に従って機知に富んだ句を捻りだそう。じっ—としていても妙案は浮かんでこない。不思議なことに、週に数回近くの公園を速足でウォーキングをしているとき、歩いている間に頭の中でお題を上句や下の句に入れ、体をなす句が浮かぶ。また、次の日はもう少し良い言い回しはないかと思ひ巡らす。この案を月例会に持つていつて、川柳子にこれはいいねと言われると嬉しい。しかし、良い句だと丸印を得られる回数はそれほど多くはない。月例会では出席者が持ち寄る句の秀句、駄句の品評をしたのち、酒宴を持つ。え！酒宴の方が目的ではないかと？両方で月例会を盛り上げている。

ペンクラブは他にも広く活動しているが、ここでは筆者が参加している分野からのみクラブを見た。いずれの活動でもしつかり纏まった文章を仕上げるのが基本である。世間ではツイッターでのメッセージ交換が流行っ

ている。何しろ米国の大統領が単語の羅列で国の意向を表す時代だ。これは嘆かわしいことだ。影響力の大きい政治家は多くの人の意見を吟味して、総合的な判断を下した政策文を立案しなければならないのに、その傾向は最近の新聞も広告の割合が増し、論調や解説記事が少なくなっていることと軌を一にしている。文章を練ると脳の血流を盛んにできる。一方、巷にはスポーツジムが至る所にある。しかし、筋肉の運動を盛んにすること以上に大切なことは脳の活動を盛んにし文化レベルの向上と脳疾患の防止に役立てることだ。スポーツジムの数に比べて、企業OBペンクラブのような脳への適切な刺激を与える活動の場は少ない。

確かに俳句、川柳の会は至る所にあり、かつ新聞の文芸欄には必ず載っている。しかし、出版されるような本格的な文章は別にして、エッセイの同人誌的活動は少ない。わがペンクラブと同じような活動が、主要都市で企画され、関西部門、九州部門とか、多くでき、時々交流会を持てたら面白さが倍増する。

私と俳句と父

志村 良知

企業OBペンクラブに入会した目的の一つに俳句を詠んでみたいというのがあった。

それには決定的に父の影響がある。私の生まれ育った土地は俳句が盛んで、その辺の農家のおじさんが俳号を持っていて、何かの集まりがあれば一句捻って披露しあっていた。父も田舎ではいっぱしの俳人だったらしい。

父の死後、遺品から『楓陰』と題した黒いノートが見つかり、中に約四百句が手書きでしたためてあった。

このノートを形見として私が貰い受け、読んでみることにした。読み始めると父の悪筆による崩し字で出展不明の難解な言葉に満ちていてなかなか手強い。定年退職後のつれづれに図書館に通い、崩し字辞典、民俗学辞典、地方人名辞典、日本古典文学辞典、といったものにあたり、四百句全てに解釈をつける作業をした。

半年余りも費やしてそれも終わった頃、家内が新聞で

企業OBペンクラブの紹介記事を見つけ、あなたも入ったら、と勧めてくれた。会と連絡をとり、月例会といろいろな勉強会を見学し、句会も見学した。そのとき見学者歓迎で私の姓から席題『志』が出され、私も一句投じた。

新緑や談志還るの報せ聞く

良知

この句はちよつと誉められ、嬉しくなつてすぐ入会した。平成二十二年の夏だった。会員になって最初の句会で投じた一句。

なべて同じ葉色となりし梅雨盛ん

良知

これがなんと四票を得、その年の『悠遊』の俳句欄に知世先生が「なべて同じ、の句で華々しくデビュー……」と書いて下さり、ビギナーズ・ラックの美酒を味わった。

昭和九年、二十歳で師範学校を卒業した父は山梨県東八代郡の境川尋常小学校に赴任した。そこには東京から家を守るために戻った飯田蛇笏がいて、自宅を境川山蘆と名付け、雑誌「雲母」を主宰し句会を開いていた。先輩教師に連れられて山蘆への出入りを許された父はここ

で本名榮助にちなんで黙榮という俳号を授かった。

子供等を狩りだす声や秋の山

黙榮

初めて蛇笏に抜いてもらった句であるという。遠足の風景であるそうだ。

昭和十一年。初めて「雲母」巻頭に選ばれた句。びつくりした、と前書きがある。

賤機や寒禽翔ける山の径

黙榮

時が経ち、尋常小学校が国民学校になり、昭和二十年には小学校教員の徴兵免除が廃止、二人の子持ちの父も戦場へ。帰還して数日後に病氣だった次男を失う

奥津城にしたたる星座秋隣る

黙榮

露万斛之夢敵の使負いゆかむ

黙榮

そして、昭和二十三年、良知誕生。

大火焚き産声を待つ五月の爐

黙榮

この句は蛇笏の記憶にも残り、二、三歳の頃、父に抱かれて蛇笏に会い「これが大火焚きの子か」と頭を撫でて貰ったというが残念ながら全く覚えていない。

この後、二十六年には地元「雲母」支社を結成し、

古典の言葉を華麗に操って句作に励むが、二十八年半ばにびつたり止めてしまう。止めた理由について、父は黙し、母は「蛇笏先生と喧嘩した」と言っていたが、畏れ多くも蛇笏と路線論争したことらしい。

山国の虚空日亘る冬至かな

蛇笏

国原は満天の星節分会

黙榮

と句を真似るほど心酔した蛇笏なのに、である。

晩年、黙榮は「弟子」龍太を絶賛していた。黙榮は龍太に自分の俳句の完成形を見ていたのかもしれない。

二十代の頃、父に師事しようとしたが、古典を読んでいる、言葉を知らない、と罵倒の連続で嫌気がさして止めてしまった。

それから三十有余の星霜を経て企業OBベンクラブに出会った。句会では厳しくも楽しい批評と指導を受けている。何年経っても高得点は得られず、鳴かず飛ばずではあるが、楽しい哉俳句人生である。

窓際族の愉しみ

首藤 静夫

「日本株式会社は課長で持つ」。誰が言い始めたか、至言と思う。

四十代後半で部長になったあとは気が抜けたように暇になった。大概の事は課長が取り仕切るの、僕はよほどのことがなければ追認するだけだ。見た目のステイタスはよいが、窓際族と変わりがない。定例の会合や仕事先との会食、休日の付き合いゴルフなどに時間が流れていく。

これは堪らないと仕事一筋から身を引きはじめた。

先ず絵画教室へ。出張で行ったブラジルの原色風景に感動したことがきっかけだ。教室は女性がほとんどで、「これはいい」

スケッチにいく湘南、鎌倉や近くの多摩川。珍しい鳥や花、樹木が目飛び込む。これまで何故気づかなかったのか。

「日本野鳥の会」にも入会した。少し高価な植物図鑑も買い求めた。いまや休日出勤することもない。仕事が安定して回っている限り部長は暇なのだ。絵も野鳥も植物も新鮮だった。学び始めの成長曲線はぐんぐん伸びる。こうして無趣味だった僕に別の世界ができた。

六十二歳であっさり退社した。ますます時間ができた。メダカ、クマノミなどの飼育を始めた。近くのスポーツジムでエアロビクスに通い始めた。

一年近くあれこれやったが、今一つ充足感がない。忙しくしているだけではないかと反省し、俳句と短歌を始めた。図書館に通い、一日一句・一首を目標に励んだ。しかし、上達具合がさっぱり分からない。

そんな折、会社のＯ先輩に「企業ＯＢペンクラブ」を紹介された。エッセイや掌編小説を書けるし、俳句や川柳、フォート句などの五七五もあるという。

心が動いたが、ためらいもあった。ペンクラブということからは文章の達人揃いなのだろう、レベルが合わずに恥をかくのではないか。日本のサラリーマンは恥に弱い

から。

試験的にエッセイの会を覗いた。英国ウイリアム王子にジョージ君が誕生した時期で、それを出だしに使って英国王室の歴史を書いて持参した。テーマと内容はタイムリーだし、面白いと高評価だった。だが文章が長すぎるから分かりにくい、パンチ力もそがれると言われた。それでは書き直して持つてくると言い、何となく入会した。

入会の歓迎会を駅前蕎麦屋でやつてもらったが（割り勘）、その時の雰囲気良かった。出身が異なり年齢性別もバラバラなのに、何故こんなに和気あいあいとやるのか不思議だった。

エッセイの会に慣れると俳句の会をノックした。俳句は奥が深い。バラを詠むとしてバラの何を詠むか、美しいといってバラのどこがどう美しいのか、考えるとキリがない。

思い切り心を入れて詠めばいいかというと、さにあらず。それでは重苦しくなり、独りよがりの句になる。逆

に見ただけを詠むのはちょっとつまらない。そのあたりの塩梅なのだろう、俳句に限らないが……。

たった十七音なのだと思うが、それだけに一音一音に気が抜けない。

日常生活の中で周囲に気を配ることが多くなった。

街に今年も燕がやってきた、エッセイか句の材料にならないか。夏祭の子の鉢巻姿は可愛い、一句できないか。夾竹桃が咲いた、暑くるしい花だが句の取り合わせに使えないか。赤提灯からいい匂い、これはどうか。剥がれかけた迷い猫の貼り紙、何かに使えそうだ。

今まで縁のなかった気づきの世界が転がっている。

二年前からは「文芸作品の会」にも顔をだしている。

みんなでわいわいと読む本を決めて、毎月感想を述べあう。こんな会でもない限り読まないであろう本を義務的に読むことがある。却ってそれが面白い。

昨年、岡倉天心の『茶の本』を読んだ。茶道もいいなあ、やって見たいなあ。

追悼の辞

濱田 優ゆたか

大先輩の玉山和夫さんが六月二十六日に大腸がんでは
界された。享年九十九。安らかなご最期という。

掌編小説勉強会の原稿に亡くなる直前まで手を入れて
おられたとのこと、まさに生涯現役の物書きだ。

激動の時代を生き抜いてきた彼の作品は多岐にわたる
が、余人には書けない貴重な作品群が光る。

その一つ——。日英協会事務局長のとき、第二次世界
大戦中の日本兵による英国の捕虜虐待が両国の友好の障
害となっていると痛感する。毎年戦争終結の八月十五日
が近づくと英国では大衆紙などの大げさな記事が躍る。

なのに日本側は沈黙するばかりだ。そこで、玉山さんは
自分で日本兵の名誉を挽回しようと決意された。まずビ
ルマ戦線で戦った日本兵の話を集めて、彼らのあり
のままを英文で書き、校閲者の英国人と共に英国で出版
する。この本は好評で日本兵の汚名をそそぐのにいささ

か貢献した。企業OBペンクラブの有志が翻訳したこの
本の日本語版『日本兵のはなし ビルマ戦線——戦場の
真実』は、2002年マネジメント社から出版された。

続いて『証言・戦場にかける橋』（2015年）を出版。
彼は、日英両国の友好に尽くしたことで1998年大
英帝国勲章MBEを授与された。

もう一つ——。玉山さんは、平和慣れした現在の日本
の安全保障に強い危機感をもっておられた。それで北の
某国から掠奪やミサイル発射など様々な攻撃を受けた場
合を想定したシミュレーション小説を多数書かれ、それ
をまとめた『小説・201X年有事列島』（2015年
TEM出版書店）を出版した。その作品群は『安全保障
と危機管理』誌にも連載される。

（これらの本はAmazonでお求めになれます。）

玉山さんの、いつまでも変わらない盛んな創作意欲は
別格で、誰も真似をすることはできません。が、掌編小
説勉強会は新しいメンバーも加わって活発に作品を書き、
批評し合う活動を続けていますので、見守ってください。
謹んでご冥福をお祈りします。

自由テーマ



油彩 福本 多佳子

研究考察——「浪速と博多」

浜口 須美子

息子は大学卒業後東京に就職した。「方言つて可愛いなあ」と言うので、東京で東北の人と出会ったのかと思つていたら博多弁に射抜かれたようだ。あれから五年。福岡に居を構え、二人の子供にも恵まれて、イケメンと呼ばれる時期がないままイクメンに突入し、出産以外のことは何でもできるパパになった。

昨春私の職場に女性が一人加わった。彼女の最初の言葉が「私は博多生まれで、関西人の主人のもとに嫁ぎ二十年。博多女と浪速男は相性が悪いと思います。いまだに関西の言葉に馴染めないで色々教えてください」であつた。息子夫婦と同じ組み合わせで、しかも相性が悪いと、なんだか結論めいた説得力のある言葉に驚いた。

その上、住む場所がアウェイの人が精神的に苦痛、つまり大阪に住む自分と福岡に住む息子さんは四面楚歌の立場だろうと言う。あらあら履歴書の特技欄に「大阪弁の

ボケと突っ込み」と書きたいだろう息子はアウェイの地で、もしかして、滑りっぱなしの漫才師の気分を味わっているのかしらと、私は芸人の母の気持ちで心配が募る。職場の女性にこの母心を伝え、浪速と博多の意識のずれについての研究に協力してもらうことにした。

研究考察①……私はよく「まあええか」と言う。百点を目指してみるが八十点あれば許す、自分にも他人にも許容の言葉として使う。職場の彼女も「まあいいかつ」と言う。しかもそのあとに「どうでも」が付き、突き放す拒絶の言葉に聞こえる。彼女は「まあいいか」に「どうでも」は付き物と言う。

研究考察②……私は仕事を引き継ぐときに「あとはエエようにしてね」と言う。これは「私はここまでしたので、続きはあなたの考えで進めてください」という相手を認めた言葉として使っていた。彼女は、勝手にしろと言われたようで、見捨てられたと思うと言う。

研究考察③……「これなんぼやったと思う？」大阪人は金額がなんぼ？（価格がいくら？）を会話の中で多用するようだ。博多では金額を言うことは失礼で品性が悪

いと感じるらしい。「なんぼするのん?」これは関西人の意味のないツナギ言葉で、なんぼ?と聞かれたら私なら「百万円!」と答える。関西人はつねに「なんでやねん?」の方程式が頭に浮かんでいる。相手に「ナンデヤネン」と突っ込んでほしいがための言葉遊びが日常になっているのだ。夫におねだりしたら、「なんぼするのん?」と言う浪花男と、その言葉におねだりを拒絶されたと怒る博多の女。「買うな!」と言われたら怒るのは当然だが、なんぼ?と言って、急に不機嫌になる博多女の心理を理解できない浪速男の様子が目に浮かぶ。

浪速男は曖昧で適当な言葉で遊び、博多女は真面目にきつちりとした言葉で理解する。

さて、一九二〇年生まれ我が母の生き様から学んでみると、母の電話の声を聞くと相手がどの誰かがわかる。東京の人には東京の言葉で、広島の人には広島という言葉で、テンポもトーンも自由自在である。相手と向き合うのではなく寄り添うことが母の教えであると理解する。そういえば、お正月に息子家族が帰阪したときに、息子が「リュックをからう」と言いながら、「いつのまに

か僕が博多弁しゃべってるねん」と言う。ええやん、「知つとぅと?」と言われて撃沈したんやから本望やんと私は思う。我が母の教えがわが息子に自然に受け継がれているかと思うと息子の博多弁も微笑ましい。

研究の考察の結果、お互いにどの言葉に傷つき、どの言葉に怒ったかを伝え合うことがいかに大切であるかを知っておくべきだという結論に達した。

今日も職場で、浪速女の私と博多女の彼女はお互いの理解を深めるための話し合いをしながら、誤解のない人間関係を作っている。と努力している。

浪速男と博多女の息子と嫁も、まだまだ人生先が長い。

二人の共通語を見つけ、二人の気持ちの折り合いをつけて、幸せな家庭を作り上げていくってほしい。



母 白寿の年賀状

薬師寺の三尊像

大月 和彦

奈良薬師寺に日本画家小倉遊亀が描いた持統天皇、大津皇子、天武天皇の三人の肖像画（三尊像）が所蔵されている。

天武天皇が持統妃の病氣平癒を祈り創建した薬師寺では、その遺徳を偲んで忌日の十月八日を天武忌とし、法要や柴燈大護摩などの行事が行われ、門外不出の三尊像がこの日だけ公開される。

三十数年前、都内で開かれた画伯の個展でこの作品を見て、三人の複雑な表情が印象に残り、妙に気になっていた。その後、七世紀後半当時の政治情勢―天皇と皇子をめぐる複雑な力関係や争いなどを知るにつれて、三人がどう描かれていたのか、本物に再び接したいと思っていた。

昨年の天武忌に久しぶりに薬師寺を訪ねた。

三尊像は、再建されたばかりの食堂（じきどう）に設けられた檀に

安置されていた。

中央に、壬申の乱で近江朝を倒し、強力な皇権力で国の体制を整えた天武天皇。眼光が鋭く、精悍な顔立ち、自信に溢れた風貌。

右には持統天皇。天智天皇の皇女で天武天皇妃。壬申の乱では夫と共に行動する。天武天皇が病死した直後に、第二皇子の草壁太子の皇位継承のライバルとされた大津皇子を謀反の罪に問い、自害に追い込んだ。少女のようなふつくらした顔、眉間にしわを寄せ、暗い雰囲気がある。数珠を手をしている。

左には大津皇子。母は持統天皇の姉の大田皇女。祖父天智天皇に可愛がられたが壬申の乱では父側に加わる。乱後には朝政に参加し太政大臣となる。文武に優れ信望もあり、草壁太子のライバル視されていた。死に臨んで詠んだ歌「百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」が万葉集に載っている。唇が紅く若々しい顔。うつむき加減、憂いを秘めた表情。

この肖像画は、薬師寺の高田好胤管長に懇願されて描き、それぞれ昭和五六、五七、五八年の院展に出展した

作品。画伯はこれより三年前の昭和五三年に、故郷大津の石座神社の神像から想を得て、天智天皇、大友皇子と皇子の母の伊賀宅子媛を描いた「或る御神像」を完成している。近江に都を遷し律令制度の整備を進めながら壮図半ばで倒れた天智天皇、壬申の乱で敗れ悲劇的な生涯を送った大友皇子、皇子の生母の三人が描かれている。

滅亡した近江朝への画伯の思いが込められているようだ。

この肖像画を描き上げてまもなく、近江朝を倒した天武・持統天皇と大津皇子の像を依頼された画伯は、どんな思いで筆をとったのだろうか。その心境を画伯は不思議な御縁として次のように述べている。

薬師寺から天武忌を再興するに当たり、その本尊とあるべき天武天皇像を最初に依頼された。当時病を得ていたこともあり、あまりに荷が重いのでお断りした。

では、持統天皇像をと再度依頼された。大津皇子の壮絶な最期が脳裏を離れず筆が進まなかった。苦悩すること数か月、夢に持統帝が現れ「早く私を描いてくれ」と迫られ、持統帝と一人で対峙した。幾度か筆を置こうと

したが、その度不思議な力が沸き、描き上げ、「おもいのたま」と題して院展に発表し、薬師寺に奉納した。

ひきつづき、悲運の大津皇子については、その像を描くことによりいくらかでも供養になれば、と申し出て筆を早く進めることができた。

最後に天武天皇像をと発願した時には体調がすっかりよくなり、悟りに達した気持ちになり、翌年の院展に発表することができた。

画伯の戸惑いと葛藤、悟りと決意が伝わってくる。依頼された三人についてのさまざまな思いが浮かんて筆が進まず苦悶する。持統天皇が突然夢に現れ自分を描いてくれという。この瞬間、近江大津の人小倉遊亀が抱いていたわだかまりが吹っ切れ、三人を描き上げることができたのだ。後日、昭和天皇が薬師寺金堂の薬師三尊像の前に安置されたこの三尊像に礼拝されたと聞き、感極まったと述懐している。

傘の秋

池田 隆

「平成」最後の晩秋、傘寿記念と称し十数名の大学同期生とマイクロバスで南近江を巡る旅へ出掛けた。

まず大津の膳所にある義仲寺へ。翁堂脇のあざやかな紅葉が目にとび込む。案内の方が吾々を迎え、「今朝がこの秋一番の紅葉の見頃」と語り出す。今までにも何度かここへ来ているが、その時の風情とは全く違う華やきを感じる。

芭蕉翁の墓前では沓岐島北端にある曾良の墓に昨年参ったこと、「奥の細道」を辿る歩き旅をしており、尿前の関を過ぎ尾花沢に着いたことなどを黙して報告する。「三百年後の吾々も芭蕉翁にならつて俳句や旅を楽しんでいます」と礼を述べ、資料館に入る。

木箱に収められた芭蕉愛用の実物の杖が那須で詠んだ句とともに展示されている。実は私も「奥の細道」の道中、那須野の雑木林で藪漕ぎ用に枝一本を拾い、杖とし

て大事に使っている。芭蕉の杖は椿で細く華奢、私の方は桜で武骨。様相は相当に違うが、歩き旅での杖の大切さはよく分る。文字通りの「相棒」である。添えられた句から察すると彼も那須で拾ったのだろうか、

枯枝を相棒にして野路の秋 隆

なにかの奇縁を感じつつ寺を出て、次の百済寺へ向う。湖東三山の一つと称される百済寺では、自然の風趣を漂わす紅葉と歴史豊かな近江平野の眺望を交互に見やりながら、本堂までの長い石段をゆつくりと往復する。

つづいて織山オリヤマ東麓の「老蘇おいその杜」にある教林坊へ。樹々の中にひっそりと佇む小さな寺で、春秋の一時期しか公開していない。知る人ぞ知る紅葉の名所である。

白洲正子の随筆「かくれ里」を読み、かねてより一度は訪れてみたいと思っていた。境内で竹林と紅葉に囲まれ、小ぢんまりとした石の庭と書院を眺めていると、このような所で老後を静かに暮らす人が羨ましく覚える。

秋深し老蘇の杜の石の寺 隆

車は近江水郷へと畿山北麓の五個荘を抜けて行く。西国三十三札所巡礼をしていた十年ほど前のこと、ここから山頂にある三十二番札所「観音正寺」を目指して登山中、激しい胸痛に突然襲われた。痛みは直ぐに治まったが、これが最初の狭心症発作だった。

帰宅後の心電図検査では症状をはっきり再現できなかったが、最終的にカテーテル検査やステント治療などを行い大事に至らずに済んでいる。その時の発作は観音様の啓示だったのかも知れない。バスの中で山頂に向いそつと手を合わせる。

船着場近くの食堂で近江牛のすき焼きを食べ、一行は二艘の舟に分乗し水路を巡り始める。小舟は「西の湖」を覆う背丈の高い枯れた葦の狭間を縫うように進む。東に畿山、西に長明寺山が見え隠れる。横では水鳥が心地良さそうに泳いでいる。

櫓を漕ぐ船頭さんが威勢のよい声で話す。鴨、雁、鶺鴒の見分け方、「あし」と「よし」は同じ植物の別名との説明、等々。一時間あまりのコースがすぐに終わる。

舟に揺られながら傘寿を迎えた人生をふり返っていた。

万事が「悪し」「良し」の区別つけ難く、塞翁が馬だった。八十年の歲月も長いようで短かった。其れはどこか水郷巡りの小舟に通じる。

あしよしの狭間を漕ぎて傘の秋 隆

最後は坂本の日吉神社へ。通常の鳥居に山型の垂木をのせたような、独特の形をした赤い大きな鳥居が参道正面に構えている。その先につづく真つ赤に色づいた楓の並木が圧巻である。鳥居から楼門、本殿、灯籠までが紅葉に染まったように朱色に塗られている。「筆舌に尽くし難い」とはこのような美しい光景を指すのだろう。必死にカメラで撮りまくる。

しかし気がつくのと、どれも絵葉書やパンフレットの写真のような陳腐な構図になっている。これでは企業OBペンクラブでのフォト句には入選しそうもない。撮る位置や角度を色々と工夫してみる。ようやく撮った一枚が楓の紅葉を背景にした赤いベンチの写真である。句をつける。(フォト句頁に掲載しています)

ベンチをも紅に染めにし楓かな 隆

九州北部豪雨の地 朝倉を見つめて

木村 敏美

二〇一七年七月五日、九州北部は数百年に一度という豪雨に見舞われ甚大な被害を受けた。中でも酷かったのが福岡県の朝倉市と東峰村及び大分県の日田で、雨量は観測史上最大と記録された。朝倉市では、犠牲者三十三人、行方不明者二人、仮設住宅や、みなし仮設住宅となっている人達は三四〇世帯を超えているという。朝倉市は十年程前に農家と都会の人達との交流をはかるグリーンツーリズム協議会を立ち上げ、主人は福岡市からそれに参加していた。私も果物狩りや餅つきの際は行って、知人もできていた。その中の一人の家が全壊と聞き、豪雨後訪ねた時は、その惨状に言葉を失った。

豪雨の一年三ヵ月後、二〇一八年十月、朝倉市の主催で九州北部豪雨体験教訓バスツアーが企画され、黒川地区ツアーに主人と参加した。集合場所の道の駅の広場は

当時山のように積み上げられていた流木がきれいに片付けられていた。以前は街のいたる所に山積みみの流木や泥土があり、泥の中に埋もれたままの車や全壊又は半壊した家々の中に泥まみれになったピアノがあったりしたが、そういった光景もなくなり、一見復興しているかのように見えた。市街地を抜け、作物もかなり作られるようになった田園地帯を暫く走ると、山あいの黒川地区に向かって上り坂になり、寺内ダムの横を通りぬけながら行く。水面が見えない程ダムに浮かんでいた夥しい流木は、多少残っているだけになっていた。

しかし黒川地区に入ると以前とあまり変わらなかった。山の頂上から崩れ落ちた山肌、根こそぎもぎとられた木々が倒れたまま斜面にひっつかかっている。道路も壊れたままで、低い川底に作られた簡易道路を、がたがたと揺られながら進んだ。周りは洪水で流され、砂と石ころで広くなったままで。この周辺は九州でも屈指の蛍の群生する場所だった。数年前家族と見に来た時は、清流を挟んだ二つの山全体がクリスマスツリーのように蛍が点滅し、その幻想的な美しさは一キロメートル程続いていた。

た。あれ程いた蜚はもう帰って来ないだろう。そこを過ぎると小高い丘の上に梨園が広がっていたのだが、今も僅かに残って営業している所がありそこで梨狩りをした。試食の梨は美味しかった。崩れ落ちた山肌や、川の中に埋もれたまま残っている梨園の曲がりくねったビニールハウスの鉄骨を見ると、復興の地域差を感じ、故郷へ帰れる人達はどれ位いるのか、山を下りながら胸が痛んだ。

九州一の大河筑後川中流には「山田堰」がある。江戸時代前期、新田開発のため朝倉に水を引くのに作られた日本で唯一の「傾斜堰床式石張堰」である。これと同様の堰が、干ばつで苦しんでいるアフガニスタンの農村を救っている。「ペシャワール会」の中村医師は、十五年前前から現地の人達と堰を作り農業に貢献している。

また、堰から引かれた川は堀川用水と名がつき、田んぼに大量の水が行くように工夫されて作られたのが揚水車群で、「三連水車」と呼ばれるようになった(下図)。二〇〇年以上前から動いている日本最古の水車だ。用水路と水車は国指定史跡である。この先人達の知恵と努力

で朝倉は有数の米と柿や梨等の果物の産地となった。今回の豪雨の中で三連水車は奇跡的に残った。

黒川地区の、ある米農家の方は「水田の半分も流されたが、ここでの仕事が自分をリフレッシュし、生きがいがあるのでここに骨を埋めたい」と言われた。豪雨後も試行錯誤して作られたこの方の新米を昼食に頂いたが、一粒ひとつぶに味があり本当に美味しかった。しかしこの米が全国の人に知られる日はくるのか。当時沢山来ていたボランティアの人達も少なくなりこれから本当の復興への厳しい道程が始まる。

江戸の昔から受け継がれた土地を愛し、農業を愛し知恵と努力を惜しまない精神は生きていく。

この精神が復興の力となる事を信じて、これからも忘れる事なく見つめていきたい。



南アルプス南部縦走

阿部 典文

身辺を整理していたら、若き日の「山行」を綴った日記帳に出会った。その記載の中に平家物語の一節、「宇津の山辺の鳶の道、心細くも打ち超えて、毛越を過ぎて行けば北に遠さかりて雪白き山あり。問えば甲斐の白峰」と言う、その時三位中将落つる涙を抑えて「惜しからぬ命なれども今日までにつれなき甲斐の白峰をも見つ」と詠じた事を知り、南アルプスへの関心が一気に高まった。当時（昭和二四年）高等学校山岳部に所属していた私は逆に、山頂より太平洋の海岸線を望見することを夢に描いていた。

南アルプスの山々への登山は意外に早く訪れた。それは昭和二六年の夏休みであり、南アルプス南部の縦走が計画された。コースは伊那谷側の遠山川より、日本・最南端の三千メートル級高山・聖岳を経由して赤石岳や塩見岳を訪問し、白峰（根）三山の「間ノ岳」までの赤石

山脈主脈を縦走する十日間の山行だ。その概要を以下に紹介しよう。

縦走の出発点は遠山川（天竜川支流）の木澤。月遅れのお盆で村落は賑わっていた。不運なことに森林鉄道は運休、登山・第一日から重い荷物に翻弄される始末であったが、救いは美しい溪谷の眺めであり、且つ終点の大沢渡では、飯場の人々の好意で夕食に岩魚を添えることが出来た。

本格的な登山は入山三日目から開始された。登山客の少ない南アルプスの森林帯は登山道が整備されておらず、杣道に迷い込むなどで予定より一日の遅れとなってしまう。この遅れを取り戻すために、四日目は真夜中の出立となったが、遅れは解消されず体力の消耗も見立ち、大沢岳の肩の小屋に沈没する始末で、縦走の先の見通しは樂觀でなくなつた。ここで登山計画を一部修正、聖岳へはサブザック一つの軽装で往復し、歩行時間を切り詰めて赤石岳を目指した。なお、赤石山頂付近のカールの中に、墜落した軍用機の残骸が残されていたのはショ

ツクであつた。

赤石岳を過ぎて、盲腸の様に張り出した荒川三山を輕装で往復、再び主脈に戻り鉱泉で知られている塩見岳を通過後、縦走路より外れて、北俣岳を経て一気に雪投沢へと下降。沢の上部はカール状の開けたガレ場で非常に感じの良いところであつた。暴れ川で知られる大井川も、この源流付近では乙女の如く穏やかで、何の苦も無く徒渉。やがて河原がグリーンと広がり大井川左股のせせらぎが聞こえてくると道は沢より離れて、ケルンに従つて少々戻り気味に進むと東股に到着する。ここから白根三山の農鳥岳に突き上げている原始林の様相を留める小さな沢を上りつめた。右岸沿いにはつきりと切開きが付いていて苦も無く高度を稼ぐ。両岸は迫りあい、振り返ると稍越しに塩見岳が聳え立っていた。時々途絶える切開きに戸惑いながら、左右に小さな沢を幾つか見送ると右手に本流かと見間違ふほど水量の豊かな沢が姿を現した。これが白河内岳北面の水を集めた沢である。ここより山稜に向かい直登する。眺望のきく山稜で、縦走してきた赤石山脈の山々を遠望し、大門沢のルートを望み

ながらゆつくりと西農鳥岳(標高三〇五一^{メートル})へ向かつた。午後一時終に農鳥の頂上に歩を進めた。感無量！ 目を転ずると眼前に北岳の金字塔がオイデオイデをしていた。縦走の最終日は、早朝二時五五分、暗い中に小屋を抜け出て農鳥岳でご来光を拝む。今日中に東京に帰ろうと早立ちし、昨日望見した大門沢への下降線を通り、ガラガラした急斜面のガレ場を一気に下る。振り返ると稜線はあつという間に遠ざかり、大門沢の右岸沿いに高度をぐんぐん下げる。単調な道と暑さ、いいかげん飽きた頃大門沢小屋跡に出た。径もここからはぐつと良くなり、幾重にも重なり合つた山裾を巻き、トロツコの軌道を挟んだ細長く鄙びた奈良田の部落を過ぎて、西山温泉(新湯)に着いた。今までとは違った人間臭さにうんざりする。ここでバスの時刻を確かめた後、ゆつくりと新倉まで左右の景観を眺めながら降り、バスで早川橋を経由、甲府へと盆地の中を疾走した。高校生としては背伸びした縦走であつたが、無事成し遂げたことに満足して東京に帰着した次第。

母の教え

新井 良侑

結婚して間もない頃、何について話し合っていたか覚えてないが、突然、家人が語気を強め、「あんたは、なんでお母さんに何でも相談するの」と言いだした。まったく身に覚えのない私は、「何も相談してないよ。しばらく連絡もしてないよ」と言い返した。しかし、家人はそんなはずはないという顔つきで、きつと自分の知らないところで、母にいろいろ相談しているに違いないと思っっているようだった。

わたしは姉と兄二人の下に生まれた。次兄とは五つ違いで、年の離れた末っ子だったので、家庭内で人一倍あまやかされて育った。とりわけ母からは、もう生まれないうちから授かった子だったので、余計にかわいがられた。物心ついたところから小学校にあがるまで、一日たりとも母から離れたことがなかった。大学進学で家を離れるまで、母と毎日同じ空気を吸って生きていた

から、母の分身のようになっていた。

父は揉め事が大嫌いで、何があっても穏やかで、周りから「仏の金ちゃん」と言われていた。反対に母は、来る日も来る日もさまざまな揉め事に関わり合っていた。目をつり上げ怒鳴っている人、泣き喚いている人や酔っぱらって目が据わっている人、子供の目には恐ろしい人たちに平然と応対している母を、ただはらはししながら見守っていた。

このような母の後姿を見ながら育ったので、家人が、私は何ごとでも相談していると誤解したのもやむを得なかったことである。この家人の言葉で、初めてこのような自分であることに気づかされ、意識するようになった。母は、社交家であり、知恵者で、かつ器量人であった。親族はもとより、親戚や近隣のいろいろな揉め事を知恵と度胸で、ものの見事に捌いていた。周りから一目も二目もおかれていたから、多くの人が母に揉め事を持ち込んだ。こんな母であつたから、数え切れないほどの格言や人生訓を聞かされた。

良侑、「隣に蔵が立つと、腹が立つ」というのが、人

だからな、世の中にでたら、氣をつけろよ。「人の口には戸が立てられない」というだよ。だから、人様の前に出たら、口を慎むんだよ。「箆に乗る人、担ぐ人、その草鞋を作る人」というだよ。人には、それぞれがあるんだから、自分の分を超えちゃダメだよ。

一事が万事こんな調子で、母の流儀が知らず知らずのうちに浸透し、成人した。信心深い母の口癖は、「私の中に神様が生きているんだよ」と「私の目は千里眼なんだから、何でもお見通しだよ」であった。

多くの教えの中で、最も益を受けた言葉が、「人を見て、法を説け」である。母はこの言葉通りにまさに実践している人で、多くの人が母の言うことを素直に聞いていた。母が多くの採め事を解決できたのも、このような人付き合いの結果であったと理解している。父親似の私は、母と全く違うと思っていた。しかし、社会に出てから蛙の子は蛙で、自分が全く母と同じであると知った。

人生は出会いである。これまでに数知れない人と出会ってきたが、どんな人からも人生の糧となることを学べたのは、母から教えられたこの言葉ゆえである。

大学院時代、学会に参加するため、恩師と二人で二時間ほど電車に乗り、車中とりとめもない話をしながら過ごした。電車を降りるとき、恩師が驚いたように「新井君と話していると、世の中に悪い人は一人もいないね」と言った。わたしは思ったことをありのままに、人のことについても喋っていたので、ひやりとした。しかし、先生の一言にほっとし、他の人から見える自分も知ることができた。

社会に出てから半世紀あまり、実に数え切れない人々との出会いがあったが、出会ったすべての人が恩人であり、人生の師であった。今でも、あの時が、あの状況が心に思い浮かぶと、関わった一人一人がよみがえってきて、感謝と敬愛の念が心の深いところから湧いてくる。

後年、クリスチャンになり、聖書を読むようになって、母の言葉の多くを聖書の中に見いだした。不思議な経緯で、母は最晩年にクリスチャンになった。ある時、「母さんの中に生きている神様の名前は、イエスと言うんだよ」と言ったら、てらいなく「そうだよ」という母に、信仰生活の真髄を教えられた。

B A J連邦

市川 忠夫

我が家のテレビを数十年ぶりに買い換えました。

「B A J連邦の発足式」と「浮上式リニア空道の開通式」が同時に行われることになったので、その実況放送を見たいと思ったからです。

放送の始まる時刻になると、A Iロボちゃんが「始めますよ」と声をかけてくれました。ロボちゃんに目配せすると、天井からスクリーンがスルスルと下りてきて、鮮やかな六四K解像度の立体映像が映し出されます。音もスクリーンから出ているようです。番組によつては、匂いも出てきます。四K八K放送が始まった頃のテレビをずっと使い続けていたので、この新しいテレビの迫力に改めて驚いています。

B A J連邦の発足式は、五月一日に行われました。連邦歌の演奏に始まり、連邦元首の連邦発足宣言、さらに二人の副元首の挨拶が続きます。

連邦元首は、旧日本の天皇陛下です。八九歳のご高齢ですが、医学・生化学の驚異的な進歩により、還暦と見紛う若々しさです。力強く「世界平和実現と地球環境維持」のために「B A J連邦」を創った旨が宣せられました。副元首は旧英国の国王と旧米国の前大統領です。

さらに、浮上式リニア空道の開通式が放映されました。旧英国のロンドン・エディンバラ間、旧米国のマイアミ・ボストン間とサンディエゴ・ポートランド間、そして旧日本の鹿児島・稚内間の浮上式リニアモーター駆動の空道が、ほぼ同時に全線開通したのです。その速さと静かさは、買ったばかりのテレビが故障したのかと思うほどでした。人々がいつの間にか、鉄道を空道と呼び変えた訳を納得できました。驚くことにこの空道に使われている電力は全て、海から供給されているのです。海底地熱発電、潮流発電、海上風力発電など、地球を全く汚さない技術で作られているのです。

発足式と開通式を祝い、我が家でもささやかなダイナミを頂きました。料理の食材は、七〇%以上が海の幸です。連邦創設の大義「世界平和実現と地球環境維持」を

舌でもしっかり味わえたのです。

（八百字）

この八百字は「二〇四九年五月の企業OBペンクラブ・何でも書こう会」に発表するつもりで書いたものです。しかし三〇年後なので、出席の可能性が極めて低くなります。そこで「OBペンの三〇年」の場を拝借しました。

「BAJ連邦」発足の経緯を想像してみます。

二〇一九年当時は、英国はメイ首相、米国はトランプ大統領、日本国は安倍首相です。三人には共通の悩みがあります。一つは、成り行き上の強硬な姿勢と善良な内心の葛藤です。もう一つは、先々に不安があるため、任期中に何か歴史に残るドラマチックなことをしておきたいという強い欲求です。二つとも、極めて人間らしい自然な気持ちだと思います。

二〇一九年一月、三人は極秘に某所に集まり、本音の話し合いをしました。一致したのは、世界的な重要課題は「世界平和実現と地球環境維持」だとの認識です。

「世界平和実現」のために、これまでも国際連盟や国際連合を設立してきましたが、あまりうまくいきません。

一つに纏まれば二つはどうかと思いますが、米ソ冷戦や最近の新冷戦を思うと、平和どころか核戦争の危うささえ感じます。それならば、三つはどうかと三人は思ったのです。これからの三〇年を推測すると、世界は中国グループと欧露グループ（EUとロシアの連携）が台頭して来そうです。

中国と欧露のグループに共通しているのは、陸をベースにした国家グループです。地球面積の七〇％は海です。海をベースにした国家グループがなければ、「地球環境維持」は難しいとの結論になりました。

その結果、ソ連邦の苦い経験やEUの脆弱さを克服した新しい連邦を、太平洋と大西洋を抛海にして、英国、米国、日本国で創ることになったのです。

三人の密約から早三〇年、やっと新たな国家グループ「BAJ連邦」が日の目を見ました。

Bはブリテン、Aはアメリカ、Jはジャパンから来ています。連邦の元首には、地球が長く続くよう願って、二六〇〇年以上の歴史を持つ日本国の天皇陛下がなられたのです。

箱根を駆けた老「いだてん」

内田 満夫

十年前の九月七日のこと、箱根を駆ける老「いだてん」がいた。

朝一に過去の記録をあらためるのが習慣になっている。昔の自分に出会い回想する楽しみがあるからだ。毎日起床するとすぐ、三年前、十年前、三十年前の三点チェックをする。その日のハイライトは、十年前の私の晴れ姿である。

箱根湯本で大学の同級会があったのだ。それを機に、長距離ランナー垂涎の箱根駅伝コースへの挑戦を思い立つ。遠方に旅した時に、宿の周辺をひと走りする楽しみが、私にはある。学生時代は長距離の選手だった。その後ほぼ半世紀のあいだ走る習慣を維持しているの、こんな芸当ができるのだ。特に箱根駅伝は、東西の学生長距離界の実力差が歴然とするなか、関西から見ると昔も今も変わらぬ雲の上のレースである。

仲間とドンチャン騒ぎをした翌日の早朝、一人コースを駆け上がった、朝食の時刻に間に合うように戻ってこようというのである。沿道を睥睨し、ドヤ顔いっぱい走った自らの勇姿を追想する至福。同時に、この十年のあいだにわが身に起こったパラダイムシフトを噛みしめることとなった。

舞台は、そんじょそこらの一般道ではない。国内で知らぬ者としてない伝統の駅伝コースだ。しかも山に挑む花の五区・六区の一部。表通りの、いわば良いところ取りをしようというのである。沿道や温泉街の人たちも一流の走りを間近で見えて目が肥えているはずだ。彼らに軽んじられるような、みつともない走りをしてはならないと身を引き締める。

まだ薄暗いなか宿を発する。ほどなく幹線道路に出て走り出す。まだ人影はまばらだ。まさにここが箱根駅伝の山登りの五区だ、と思うと鳥肌が立ってくる。初秋の抜けるような快晴。早朝のさわやかな空気を吸いながら、抑え気味に歩を進める。

テレビ中継でおなじみの函嶺洞門を過ぎると、そろそ

る登りにかかる。塔の沢、大平台と、一定のピッチを刻んでひたすら駆け上がる。難所のヘヤピンカーブ回りから、さすがに息があがつてくる。宮ノ下の温泉街を何とかクリアして、登山鉄道の踏切を越え、やっと小湧園に着く。出発してちょうど六十分。

少憩して、今来たコースをとって返す。帰りは山下りの六区だ。温泉街にも人の姿がチラホラした。ストライド（歩幅）を思い切り伸ばして空中を駆けくぐる。元競技者の他愛ない見栄だが、滞空時間の長いところが見せどころである。沿道から、箱根駅伝OBとも思い違いされたら本望だ。

大平台あたりで喘ぎながら上ってくる十数人のランナーたちと出会う。こちらは下りだから余裕綽綽だ。ストライドをことさらに大きく伸ばして、すれ違う一人一人に手を振り、ドヤ顔のエールを送る。睥睨感、得意感、最高潮に達し、自分の走りに酔いしれる。湯本まで四十分で下った。

当時六十四歳。ほんの十年前にはこんなパフォーマンスができたのだ。四肢にまだ何のわだかまりもなく、存

分に駆けることができた。しかし今は違う。想定外の腰の不調に悩まされ、爽快な走りとは縁遠くなっているのである。

走りは私にとって、単なる趣味ではない。短躯に加え、幼少期からの気弱、虚弱体質、運動弱者の劣等感から自分を解放してくれた大恩人である。長距離走と出会って、世界が一変した。手に入れた頑健な体力と気力と健康、それにどれだけ助けられたかわからない。走りが生活の主軸から遠のくことは私にとって、伴侶を失ったも同然の大事件なのである。

腰痛に加え、物忘れ、遠・近視力の低下、その他にも身体の不調が進行中だ。思えば、体力に対する自信が崩れゆくこの十年だった。劣化しゆく自分を受け入れるのはつらいことだが、人生の最終盤を迎える覚悟を、そろそろ固めなければならぬようだ。

そうでなくても、元気でしっかりしていた頃の自分と比較して、愕然とすることが最近多くなっている。その意味では、記憶をたぐって過去の自分と出会うのは良し悪しかもしれない。

歴史を繙く

大泉 潤

知識の源泉は歴史にある。世界情勢、政治、経済の基礎となる。今年記憶に残る文献、感想は次の通り。

1. 陳舜臣『中国の歴史』中公文庫全7巻

(1) 十九世紀半ば、英国の悪徳商人は贅沢な中国茶を欲し、中国の禁ずるインド栽培阿片を中国に持ち込み巨利を博した。密輸の阿片を没収された英国議會は開戦を決議し、圧倒的な軍事力で港を制圧し、五千年の歴史を誇る中国を骨抜きにした。

(2) 大きな屈辱を蒙った中国は、将来時宜を得て実力を示そうと誓った。

・感想 最近の中国は、領海、周辺国、開發途上国に手を打っている。国民の勤勉、努力と指導層の旗振りの深層に百八十年前の痛みが流れている。

2. 久米邦武編『米欧回覧実記』角川ソフィア文庫

(1) アメリカ合衆国 総勢一〇七名の一行は、最初の

訪問地サンフランシスコのホテルに旅装を解いた。建物、食堂の広さ、客室の数に驚く。アメリカの全土は欧州の文化に従いながらも、その自主のエネルギーと企業のための資本があふれるように流れ込んでいる。

(2) ロンドンの街には地下鉄、車道、高架鉄道がある。パリは、公園の中で暮らしている。空気は澄んでいる。

(3) ロシア サンクトペテルブルクは繁栄を誇っているが、贅沢が上流階級に独占され、庶民は専制政治によって奴隷のように抑圧されている。

・感想 久米邦武の緻密な観察、考証と豊かな文章表現に頭が下がる。

3. 『世界の歴史第15巻 第二次大戦』中公文庫

(1) 一九二九年九月三日 ニューヨークは華氏九四度の太陽が照り付け「永遠の繁栄」の頂点に立っていた。

(2) 一方、植民地、後進国では農業恐慌が荒れ狂い、工業生産の下落、株式取引所恐慌となった。工業生産、世界貿易、国民所得の激減、失業者の激増をもたらした。

(3) そこにヒットラーが登場。反ユダヤ、反マルクス、ドイツ民族至上主義者が世界戦争を始めた。

(4) 西欧における人民戦線の成立は、独伊の全体主義国が結束する必要を感じさせた。日本も誘い、昭和十一年防共協定が結ばれた。日本陸軍の主流は独伊の驚異的發展を見て日独伊の三国軍事同盟の締結を強く推進した。

(5) 一九四〇年松岡外相は、大掛かりな外務省員の首切り、人事刷新を行い、不和、摩擦、暗闘を招いた。

(6) 松岡は訪欧の帰途、スターリンに歓待され、日ソ中立条約を締結した。独ソ戦が勃発し、天皇から叱責を受けた。米の了解案に回答せず、謎となっている。直後の御前会議で、シナ事変処理、南方諸施策実施、対ソ武力準備が決ったが、提案者松岡は除かれた。

(7) 一九四一年六月二二日 独は不可侵条約を破って、ソ連を攻撃した。松岡は「日本は独と協力してソ連を討つべきだ。日本はいずれソ英米を同時に敵として戦う」と上奏した。

4. W・チャーチル『第2次世界大戦』河出文庫全4巻
(1) 真珠湾

一九四一年一二月七日 日曜の夜だった。ハワイで日本軍がアメリカの艦船を襲ったとラジオで放送があった。

一ヶ月前私は、もし日本がアメリカを攻撃したら、一時間以内にイギリスは宣戦すると言った。

大勢の人々は、合衆国の力を見くびっていた。私は最後まで死に物狂いで戦った南北戦争を研究していた。私は直ちにルーズベルト大統領に会いに行く決心をした。

(2) 原子爆弾

一九四五年七月一七日 ニューメキシコ砂漠で実験が成功し、原子爆弾が現実となった。第二次世界大戦に終止符を打った。

・感想 全4巻の自伝は、臨場感と表現力に惹きこまれる。このような指導者が世界をリードする。

5. 中村隆英『昭和史』東洋経済

・近衛は内政面で政党政治を破壊して大政翼賛会を作ったが竜頭蛇尾に終り、軍部の内政支配への道を開いた。

・感想 個人に責任を負わせられないが、松岡、東条、近衛の三人の言動、対米交渉は理解に苦しむことが多い。

6. 芦田均『第二次世界大戦外交史』岩波文庫

・戦中、戦後の実体験を事実に即し、流麗な文章で生々しく記述している。

縄文思想は奥深い

大越 浩平

昨年、東京国立博物館で開かれた特別展「縄文・1万年の美の鼓動」を鑑賞した。一万年以上続いた縄文時代の造形の美と日常生活に心を奪われた。

縄文時代は、一万四千年前に氷河期が終焉し、地球温暖化で海面が一〇〇mほど上昇し、大陸と地続きだった日本が、島国になった時から始まった（縄文海進）。

島国になり海流の出口が出来、親潮と黒潮が日本海に流れ込み、冬には水蒸気が大量の雪をもたらす。季節の変化が明確になり、動植物も変化する。四季の誕生だ。

温暖化が進み、落葉広葉樹や照葉樹が茂り、ドングリ類や栗などの堅果類が豊富に実をつけ、動物が繁栄した。

縄文人は「狩猟、漁労、採集、植物栽培」を生業としていた。当時は火山活動も活発で山火事が頻繁に起こっていた。縄文人は火事が収まると森林に入り、逃げ遅れ

てローストされた小動物や、茹で上がった、焼けた木の実を採集し、腹いっぱいにはおぼった。そして煮たり焼いたりすると木の実のアクが取れて美味になることを学び、余った食物を貯蔵することを考え、貯蔵場所を探し、定住する場所も必要になってきた。

縄文人は四季を意識していた。春には山菜、海藻、夏には貝類や、産卵の為に岸边に来る魚類、秋には果実や、栗、ドングリ、クルミ、遡上する鮭、冬には雪原に残る足跡により仕留めやすい動物など、地域の動植物の生態系を熟知していた。縄文人は定住する居住区を、川に近く、日当たりも良く、ある程度の広さがあり、洪水の恐れのない河岸段丘の上の方や、内湾で引き潮には潮だまりが出来、砂浜のある海岸の高台を選んだ。

住居は竪穴住居だ。それらの屋根は、茅葺き屋根で復元されていた。復元に際して、考古学者は建築学の知識が浅いので、建築史の学者にアドバイスを求めた。学者は茅葺き屋根を提案して採用され、それが教科書にも記述されて我々に刷り込まれた。

ところが最近、次々に発掘された、火災に遭った竪穴住居のすべてが土屋根であることが判明した。当時の人類学者に「民族事例を見る限り竪穴住居はみんな土屋根だ」と指摘されていたが、考古学会は耳を傾けず根拠の乏しい仮説に倣った。しかし若手の考古学者は狭量な視点を反省し、各学問の横断的研究に取り組み、真実が広がり、考古学は急速に発展する。

古事記や日本書紀、風土記では、支配者が地方で穴居に住んでいる人々を「土蜘蛛」と呼び蔑視していたが、彼らは竪穴住居に住んでいた縄文人だったのだろう。

竪穴住居は八畳前後で、住居のほぼ中央に「炉」があり、暖房、照明、料理など一家団らの中心の役目を担っていた。調理には土器を使い、食材は貯蔵品と採集した四季折々の様々な旬の動植物のごった煮だったろう。

炭水化物の摂取は粟が圧倒的に多く、次がクルミで、三番目がトチの実だった。西日本ではあく抜きしないで食べられるイチイガシのドングリもよく食べられていた。

粟を多食していた東日本の縄文人は虫歯で歯痛に悩んだが、北海道縄文人は肉食が多く、虫歯が少ない。

食べれば排せつ。教科書にも載っていた人糞の化石は、その後の研究で犬の糞とわかった。人糞化石とかわれていたものは全て犬のものであった。

植物考古学でも花粉の研究が進み、自然界にはあり得ない量の、栗やクルミなど様々な植物の花粉が何か所も見つかる。野や林を整備し、栗やクルミ、ナラ類、シイ類、ウルシ、エゴマ等の耕作地や里山を造った証拠だ。

高度な建築技術が必要で、弥生時代から建てられたと言われていた高床式倉庫も、三内丸山遺跡をはじめ全国で発見された。食物の貯蔵が可能となれば、豊かな集落と貧しい集落が出来るだろう。とすれば、格差が発生する。争いを好まない縄文人と言われているが、どう解決したのだろうか。研究課題は山積みだ。

縄文人は自然を畏怖し、自然と共生していた。縄文人は、「山川草木悉皆成神」の心を持っていたのだろう。

地球資源を食い尽くし、地球を危うくしている現在、共生する縄文の思想に、その解が有るように思える。縄文時代を全面的に見直す時代がきたのだろう。

縄文思想はまだ奥が深い。

シルクロードの旅　～七つの印象～

大津　隆文

昨年九月、長年の夢であったシルクロードへ出かけた。蘭州～河西回廊～敦煌～トルファン～ウルムチと2000キロの旅であった。少々疲れたが、歴史的な遺産、雄大な自然景観等内容的には大いに満足した。印象に残ったことを思いつくまま紹介させていただく。

一、セキュリティチェックの厳しさ

今回の旅行でまず驚いたのはセキュリティチェックが極めて厳しかったことだ。新疆ウイグル自治区には独立運動があり過去にテロ事件も起こっている。そのため空港や駅はもちろん街頭にも監視の目が光る。

旅行者も当然その対象になる。バスで高速道路を走行中も所々で検問があり、パスポートの提示を求められ顔写真を撮られたりする。「ああこれで自分も有名な中国の顔認証システム「天網」に登録され、どこへ行っても監視カメラで動向が把握されるのだ」と観念した。

現地ガイド（ウイグル人）が、「皆さん、いま世界で一番安全な場所はウイグルですよ」と言っていたが、そこに若干の皮肉と自嘲を感じないわけではなかった。

二、快適な高速鉄道

移動に際して高速鉄道（新幹線）を三回利用したが、乗車に際しては飛行場と同じく厳格なパスポート検査、荷物検査、身体検査を受けなければならなかった。

その点を別にすれば、列車は日本の新幹線とほぼ同じ仕様で快適であった。新幹線と違っていたのは洗面所に給湯器があつてお湯を自由に使えることだ。中国人はたいてい自分用のポットにお湯を注ぎ、持参のお茶の葉を入れて喫茶を楽しんでいた。紙コップも備わっているもので、私たちは添乗員さんが用意してくれたインスタントみそ汁を溶いて駅弁と一緒にいただいた。

この中国版新幹線はウルムチから北京、上海まで繋がっているという。コピーであろうとなかろうと短期間に全国的に高速鉄道を整備した中国の力は恐るべき、との感を抱いた。

三、素晴らしい歴史文化遺産

私にとって今回の旅行のお目当ては敦煌の莫高窟であった。よくこんなに素晴らしい仏教芸術の花が開いたものと感心に堪えなかった。しかし、仏教がこれだけ尊ばれたのは現実の世界が厳しかったためかもしれない。

砂漠に残る古城の遺跡に私たちは大いなるロマンを感じるが、その背景には過酷な民族間の生存競争があり、人々の生は極めて不安定であつたことだろう。あらためて島国日本の幸せを思った。

なお、シルクロードといえは陸路と思つていたが、十四世紀頃から交易ルートとしては海路にウエイトが移つたようだ。海のシルクロードの存在、これが現代の一路の主張の歴史的背景かと感じた。

四、壮麗な丹霞^{たんか}の自然景観

今回の旅で初めて丹霞地質公園の存在を知った。古代の海底が盛り上がり、白、茶、赤等の地層が幾重にも重なっている。中国のグランドキャニオン、モニュメントバレーとの評にたがわぬ奇観だ。この地形が発見されたのが2002年というのも驚きだ。

五、カレーズの水は枯れず

砂漠の住民に命の水を供給する地下水路のカレーズ、これを築いた営々たる努力には敬服した。詳しくは「800字文学館」に掲載したので省略する。

六、楽でなかつたラクダ

シルクロードといえはその交通手段の主役はラクダだ。今回鳴沙山という砂漠で体験したが、その乗り心地は？ ロマンチックな「月の砂漠」とは程遠く大きく揺れて振り落とされないように必死だった。

七、食べ過ぎに要注意

食事は基本的には中国料理、丸テーブルに十種類以上の料理が出てくる。中華は口に合うのでつい食い食べ過ぎてお腹を壊してしまつたのは恥ずかしいことだった。料理の素材は野菜、肉が中心で魚は黄河の鯉の丸煮くらいであった。地元の料理としては各地それぞれの麺があつて、日本の手打ちうどんに似た美味しい麺もあつた。蘭州ではラーメンの元祖ともいう牛肉麺を味わった。

果物では甘くてジューシーなハミウリを楽しみにしていたが、残念ながら時期が終わつていた。代わりに干したハミウリを買ったが砂糖で煮たように甘かった。

UNという名の少年

大平 忠

昭和二十三年二月、僕は小学校四年の終わりに四国の善通寺から東京の世田谷に引越した。転校先は世田谷区立奥沢小学校である。転校の初日は緊張したが、じろじろ見られることもなくほっとした。きよろきよろ周りを見ていたのは、僕の方だった。同級生がみんなスマートに見えた。女の子が可愛くて眩しかった。

その中で、ひときわ目立つ少年がいた。頭が大きく目も大きい。隣の席の子に聞くと、彼はUNといい、あだ名は「仮分数」だという。「算数がすごくできるんだぜ」とのこと。東京の子はあだ名のつけ方もうまいと思った。

あの頃は、みんな道路でよく野球の三角ベースをして遊んだ。遊べば仲良くなり友達の家にも行くようになる。特に、UNの家は学校のそばで、しかも自分の部屋があったから行きやすかった。当時自分の部屋を持っているなんて珍しかった。理科の宿題で、モーターを作ること

になった時は、おい頼むと、大勢で家に押しかけて作ってもらった。部屋には、『初歩のラジオ』なんていう難しい雑誌が置いてあり、僕らが鉱石ラジオも作れない時に真空管のラジオを組み立てようとしていた。とんでもない奴がいるものだと思った。別の部屋では、可愛い妹さんが三人いていつも賑やかだった。僕は、男兄弟三人の末っ子である。何かちょっと羨ましかった。

UNの家から歩いて十五分くらいのところに東工大があり、学園祭に誘われて一緒に見に行ったことがあった。僕には、展示品はちんぷんかんぷんなものばかりだったが、彼は面白そうに見ていた。一つだけ大学生がやってくれた実験を覚えている。どんぶり状の容器の中に鉄の玉が入っていて、なぜか回っているのだ。原理を彼が説明してくれたが忘れてしまった。未だに僕には謎である。その時だった。UNは、この大学に僕は行きたいのだと言う。小学生がもうそんな先のことまで考えているのか、びっくり仰天して絶句した。

中学以後の進路は別だったが、その間も時々会った。しかし、彼の語的内容が僕には理解不能になってきた。

大学は初志貫徹、東工大へ進学した。その頃聞く話はさらに難しくなった。二進法がどうだとかロシア語も必要になってきたとか。なんでも電気計算機のはるかに進化したものを作るのだと熱っぽく話していた。

卒業後どうするのか聞くと、富士通へ行くという。なぜ日立、東芝でないのか不審な顔を見ると、いずれ分かるさとの話だった。

UNが結婚のとき、仲人は池田敏雄さんという人で彼の上司、そしてこの人は、富士通、いや今や日本のコンピュータのリーダーであるという。このとき分かった。池田さんを慕って富士通へ入社したことを。

その後の富士通コンピュータ池田チームの血のにじむような苦闘と結末は、NHKのプロジェクトXや、本漫画にもなって人口に膾炙された。途中、アメリカ・アムダール社との共同開発は決裂の危機を何度か迎えた。現地での責任者UNは神経をすり減らしたに違いない。

一九七四年十二月、富士通の四七〇V―六は完成、世界一のコンピュータが誕生した。しかし、池田さんはその日を見ることなく、十一月に脳出血で倒れて亡くな

られた。五十一才の若さだった。四七〇V―六は、IBMに勝利し、翌年六月、NASAへ送り込まれた。

UNは、子供の頃から脇目も振らず一直線の道を歩いてきた男である。そしてコンピュータという最先端の分野で世界一のものを作り上げ、ついに夢を実現させた。

そんな男から、あるとき「企業OBペンクラブ」という面白いクラブがあるから入れと言われた。二〇〇五年の一月に入った。ところがこのクラブは新人に容赦がない。「ペン随想」「なんでも書くこう会」「悠遊」と三本立て続けに原稿を書かされ、新人講演会もすぐやらされた。二年目には『悠遊』の編集も他にいないからと半ば押し付けられた。その都度UNにはやくと、いいじゃないかとニヤニヤするだけで力にならない。ただ一つ、『悠遊』の原稿を書くのに役立つぞと、テンプレートという聞きなれない代物を作ってくれた。これは確かに優れものだった。今もメンバー全員が使い助かっている。

奥沢小学校から始まり、「企業OBペンクラブ」の今に至るまで、七十年経った。こんな友達は何にいない。

言葉あれこれ

大森 海太

日本語には擬音語や畳語が多い。高齢者にはお馴染の「血液さらさら、どろどろ」など、学術用語では何と違うのか知らないが、実にぴったりである。はらはら、どきどき、まあまあ、ほどほど、数え上げればキリがない。その他ゆっくり、はつきり、さっぱり、やつぱりなど、語源不詳の副詞も数々ある。インドネシア語のジャラン（道）、ジャランジャラン（歩く）と同様、こういう言語は幼稚かつ曖昧で論理的思考に適さないという人がいるけれど、私はそうは思わない。反対に優しくて情緒豊かな「やまと言葉」として上手に使っていききたい。

何でも書こう会に入れていただいて一年半になる。自分の言いたいことを如何に分かりやすく的確に書くか、文章の贅肉を落として形を整え八百字に纏めあげるのは、苦勞も多いが楽しみでもある。いっぽうで俳句の会の話

を伺っていると、季語をベースとしてひとつの情感を表現するのに、十七文字の言葉の選択を極限まで追求していく厳しさを痛感する。それにくらべればエッセイは文字通り何でも書こうで、題材は自由だし、言葉の制限もほとんどない。ただ、時には主義主張が表面に出過ぎるあまり、本来の文章を磨くという点がおロソカになっていはしないかと気になることがある。

某新聞のコラムによると、かつて物理学者の木下先生という人が書かれた「理科系の作文技術」という本はロングセラーで累計百万部を超えているとのこと、そのエッセンスは「論理の流れをハッキリさせ、ぼかした表現を避け、出来るだけ日常用語を使い、なるべく短い文で」ということのようなのだ。

このコラムでは悪い例として次のような最近の日銀の報告書の一節をあげている。「物価のマクロ的な需給ギャップへの感応度が高まりにくく、適格的な期待形成の力が強い予想物価上昇率も上がりにくい……」なるほど、何のことだかよく分からない。

それはともかく、木下先生のお説は学術論文や公文書の作成指針としてはその通りだとしても、エッセイなど柔らかな文章には当てはまらないのではないかと。論理明快、日常語使用は結構だが、ほかした表現は断定的な言い方を避けるためワザと用いることがある。短い文もいけれど、私は日常会話で人と話すときに近いリズムで文章にしたいと思っていますので、自然に長めのセンテンスになる。そのうえ漢語の使用は少なめにして、できるだけ柔かいやまと言葉を用いることを心掛けています。

古来日本では男の公式文章は漢文、話し言葉と女の文はやまと言葉という一種のバイリンガルであり、明治になって口語体の文章が形成されたのは、森鷗外や夏目漱石の功績によるところが大きいと言われる。因みにイングラッドも、古来のアングロサクソン語とノルマン征服^{ノルマン}によるフランス語が入りまじり、今の英語が形づくられたのはシェイクスピアの時代になってからである。

言葉は生き物ゆえ移ろいやすく、とくに日本語は柔軟

性に富むためか、この百年で死語になったものや使われなくなった表現も多いかわりに、外来語も含めて新しい語彙が日々入り込んでくる。サーバーだのインストールだの、果てはスマホなど、ついこの間までなかったものが出てきたり、女子高生が「やべー」「だせー」など聞くに堪えない言葉を発したり、「うざい」にいたってはその意味すらも定かでない。テレビを見ていると、最近の女子アナのボキャブラリーの乏しいこと、「キャーキャー」「かわいー」「すごい」の連発で、ほかに言葉を知らないのかと言いたくなる。

「いつれの御時にか女御更衣あまたさぶらひ給ひける
なかにいとやむことなききはにはあらぬがすぐれて時め
き給ふありけり」

かの源氏物語（桐壺）の書き出しで、木下先生の趣旨には添いにくいですが、昔からの美しいやまと言葉やその言いまわしを、今の我々なりに咀嚼して八百字のなかに取り入れ、さらに要所は漢語でピタリと締める、そんな心構えで今年も駄文、拙文にチャレンジしよう。

新国立劇場の新芸術監督

川口 ひろ子

新国立劇場（初台）のオペラ公演は毎年十月から新シーズンが始まる。今年の最大の話題は、長年ヨーロッパのオペラハウスで活躍した指揮者大野和士が新しい芸術監督に就任したことで、開幕記念公演はモーツァルトの「魔笛」。大野さんの日本デビューは三十年程前、渋谷オーチャードホールでの日中共同制作による「魔笛」であった。時代を古代エジプトから中国の昔に読み替えた斬新な演出と大野さんの若々しい指揮が評判を呼び、高い評価を受けた。この時から大野さんの熱烈ファンになった私は今回の「魔笛」に大変期待を寄せていた。本場ヨーロッパでの三十年間に及ぶ彼の修業の成果が披露され「立派になったね」と拍手喝采の中での凱旋公演、私はこれに酔いたかった。しかし予想は見事に外れた。今回指揮台に立ったのは大野さんではなくローランド・ベア、演出はウィリアム・ケントリッジで十三年前にベルギー

のモネ劇場で初演されたプロダクションの再演だ。いささか慥然とした思いで十月八日公演を鑑賞した。しかしこれが非常に密度の濃い上質の舞台で私の不機嫌は完全に消えた。そして、芸術監督として大野さんの目指している方向が私の次元よりずっと高い所に向いていることに気付いた。彼は多くの制作現場の体験を通して、「良いものはよい」と言い切れる判断力と深い見識を持つ音楽家になっていたのだ。私はなんとお粗末な勘違いをしていたのだろう。

「魔笛」はモーツァルト最晩年の年一八九一年ウィーンで初演された。王子タミーノは捕らわれの身のパミーナを救い出すために神殿に向かう。多くの試練を克服して救出に成功、一同めでたし目出度しで幕、という冒険ファンタジーだ。まずは序曲。弦楽器の奏でる古楽風のキビキビとしたテンポと軽い響きが心地よく、そこに管楽器と打楽器が賑やかに加わる。「さあこれからお伽噺の世界にご案内します」とばかり、私たち聴衆は魔術不思議な魔笛の世界に引き込まれぐつと身を乗り出す。

今回のもう一つの話題は現代アートの巨匠W・ケントリッジのプロジェクト「コンピュタで作成した3D映像を舞台上に映す照明技術の総称」を多用した演出だ。時代は第一次大戦後、場所はアフリカ大陸のどこか。主役のタミーノは猛獣狩りを楽しむヨーロッパの青年貴族、パパゲーノはその従者に読み替えられていた。

ヨーロッパ人による理不尽な植民地主義と人種差別に対する怒りなど、南アフリカ出身の白人演出家ケントリッジの主張が全編に語られていた。しかもそれらは決して声高ではなく、モーツァルトの甘美で哀しいメロディの中にすなりと納まっている。例えば当時の白黒映画が上映される場面だ。タミーノが奏でる甘い笛の音に乗って地面に身体をこすりつけ無邪気に遊んでいた一匹の犀が次のシーンでは紐で縛られて吊り上げられてゆく。高価な犀の角欲しさにアフリカ大陸の自然を荒らして行くヨーロッパ人への抗議のように思えた。

演出家のアイデア満載のスケッチ画がプロジェクトによって拡大され舞台上に映し出される。眩い光の交差は

「光と闇は表裏一体、光は善は一瞬にして闇は悪になり、逆も又然り」と叫んでいるのだろうか。私はただ呆然と舞台に見入っていた。次々と展開する斬新で難解なメッセージは充分に理解できない点も多く、近い将来是非再演してほしいと思った。

さて、大野さんのお目見え公演は今春上演の総て日本人によるオペラ「紫苑物語」だ。彼はここでようやく指揮台に立つてくれる。純国産オペラを上演し初台より世界に情報発信して最終的にはヨーロッパへの進出を目指す。これが海外の現場で多くの体験をして帰国した大野さんの結論なのだろう。私のような臆病な人間から見ればかなり危うい構想だと思う。しかし時代はすさまじい勢いに変化している。オペラ界も同様で、今日の古楽演奏家と若手前衛演出家の参加によって流れは急速に変わるうとしている。ルーティンワークを繰り返しているだけでは時代の流れについて行けない。何事もリスクをとって挑戦しなければ良い結果を獲得することはできない。純国産オペラの海外進出が実現されん事を祈っている。

幼馴染

下山 健夫

年末に親しくしていただいていた会社の先輩が急逝されたとの連絡があり、茫然としている。幼馴染の時にはどうなるのかとの思いがある。

私の幼馴染は小、中学校九年間の同級生F君とN君になるのだろう。我ら三人は同じ電車線での通学だった。

特に三人の母親達は仲が良かった。この学校は女子は高校まで行かれるのだが、男子は高校受験をしなければならず、何人かの男子は中学で移っていった。我々は小学校の担任の先生が、中学からは優秀な女子生徒が多く入学するのでと、六年になると問題集を与え、クラスを仕切っていた女子児童が呼びかけて問題集を早く終える競争をした。このおかげで男子は倍の人数の女子にも、マアなんかなくなったと、今でも彼女達にいなされている。彼女はその後教師になり、同窓会等でも仕切り続けているが、私は彼女がいなければ今の人生は無かったと思える

るので、彼女には足を向けては寝られない。小学校高学年になり私はN君と彼のお姉さんと一緒に水泳を習った。これが私の唯一の得意運動になっている。このお姉さんはこの後、誰もが知る方の奥様になった。

中学生になりクラブ活動が始まり、N、F君は秀才揃いの吹奏楽に、その上N君は男子花形の都内強豪校軟式野球部のエースだった。私は水泳部に。ただプールで山中選手の泳ぎを見たのが思い出で、専ら観客側に徹していた。

高校受験は受験の無い気楽な女子に頑張つてと言われてN君と私はT高、秀才のF君はH高と別れた。高校に入るとすぐ家族は私を祖母に押し付けてパリへ赴任した。一、二年の春休みの間に家族に会いに行つたが、その間にN君は野球への思いやみがたく転校していた。彼は選手として甲子園県予選の決勝まで進み、彼の母親からTVを見てくれと連絡があった。

大学では又N君と再会、F君は理系でT大へ。卒業後N君は広告会社、F君は電話会社の研究所、私は洋酒会社へと別れ、夫々忙しくなり、結婚式、同窓会で会う程

度になってしまった。

私は三十代直前、社内留學生試験を全く用意なしに受けて受かり、半年間大慌てし、ロスの学校へ行つた。

乏しい英語力だったが英語をそのまま理解する事にして乗り切り何とか卒業までこぎつけた。ただ考えていることの半分も表現できぬイライラから海外勤務はご免こうむり新規事業だった食品事業へ。

商品開発を担当し、事業化を判断する調査をN君の会社へ依頼、恣意性を排除して統計学を駆使した調査を企画、実施した。

残念ながら結果は良くなく直属上司には怒られながら事業化中止を提案した。但し研究陣からは良く中止を決めてくれたと感謝された。当時この様な調査はN君の会社以外には出来なかつたろうと思う。今マスメディアがアンケート調査を多用しているが恣意性の排除、統計手法の使用等体裁を整えるだけで、全く子供だましで怒りを覚える。

五〇代になり又幼馴染との交際が復活してきた。T工大に転出し、音声認識の研究を続けていたF君の研究室

へ案内されたことがある。壁面がガラス張りでファイルがきちんと並ぶ彼の部屋をみて、自分とは違う彼の整理された頭を想像し反省した。当時音声認識は実用化にはまだ不十分だと言っていたが、今は彼の研究成果で格段に良く進み、この功績で文化功労者になった。

彼の悩みは留学して研究する学生が少ないとのこと。教え子を海外留学させたパンフを見せて貰ったら、私が留学した学校も含まれており縁を感じた。ただ彼と会うアポイントの時間が学生とのテニス後だと言われ、運動ぐらいはと思っていた私にはもう勝てるものが無いもの思い知らされた。

幼馴染の良さを考えると何でも話し合えるところだと思ふのだが、N君からは此の頃 直球の本音の話を聞かされて答えられずに困っている。F君からは今取り組むAIについて、ルールのある簡単な将棋等以外は何でもAIで置き換えることはまだ不可能で、問題が山積みと聞き、孫の将来への助言等で助かつている。今迄幼馴染とものと話をすべきだったとくやんでいるが、もう遅い年齢になってしまった。

順番と職人不足

杉浦 右藏

地球の歴史の一コマかも知れないが此処近年、地震・気象等の異常さが目立ち人間の生存を脅かす現象が多くなった。災害は国力減衰の要因になる。受難の苦痛を受けた方々は増える一方で「お気の毒」と言える。私個人が受けた今回の被害は小さい。しかし頼んだ何処の業者も順番だ、手がないよ、の言い訳に悩まされた。この「順番」と「手がない」について記録を残したい。

平成三十年九月二十九日深夜、千葉県南部通過の台風二十四号旋風で我家の二階屋根の一部が吹き飛ばされる被害を受けた。二階の屋根はスレート板を重ねたもので稜線が五辺ある。西側三辺のトップカバーが本座ごと飛ばされて雨漏り状態になった。

台風通過の翌日は快晴だった。私の家の後隣の主人が、この破片はお宅の屋根の一部でないかと物体を持ってき

てくれた。道路向かいのアパートに上って我家の屋根を見て驚いた。二階に寝ていた私共は自分の家の屋根が飛ばされたとは全く思わなかった。二階の屋根に直ぐ登れないので近所の高所から詳細に見たら、破片が五個の物体として飛ばされていることが分かった。近所の家五軒を回って全部回収できた。落下した家の住人に被害はなさそうなのでホッとした。一番幸運だったのは、右隣家の二台駐車場に車一台しかなくて空いたスペースに落下していた。駐車中の車には何の被害も無かったことだ。結論として加害がなくホッとした。

台風通過後三日間は天気が良かった。この間に、雨漏りの仮復旧と本修理とに分けたが雨漏り止めが先決。仮復旧依頼に対し各業者はどれも「手がない」理由で依頼は不可能だと判った。

仮復旧は好天気に実施するべく、結局は娘夫妻に依頼することにした。幸いにも1km以内に業者も仕入れに来る大型材料店もあり、シートと糊の選定を相談した。

シートは何種類もある。破損屋根の幅に切つてスレート瓦に糊付けする方法にした。糊も色々あり選定が難しかった。風雨に耐えるようアドバイスを受けながら貼った。結果は上々で数か月は持つだろうと予測した。二階屋根の上り下りが大変だった。私は高齢で危ないので近くのアパートから作業を見るだけとなった。総作業時間は六時間半、一日で完成した。本工事までの途中、二回ほどチェックに二階屋根に上がつてもらったが特に異常は見られず娘夫婦に感謝したい。

次に本工事の契約と工事について簡単にメモする。

人手不足で各業者との見積もり比較も出来そうにないので建て主の大和ハウスを信頼して任せるしかないと思った。大和ハウスは雨漏りの修復旧には耳もかさなかった。本工事の順番待ちの一点張りだ。第一回見積もりは、想像の四倍も高価だった。内訳精査で面積に一階の屋根も含まれていることが分かり、色が変わっても気にしないからと削除を依頼した。二回目の見積もりは四割減った。更に足場費用が高いので更に深く質問した。なるべ

く簡素化した足場を依頼した。三回目の見積もりは当初の五十四パーセントになったので契約することにした。工事開始は順番で二か月後を予定された。この見積もり期間に三週間かかった。支払金の送金は都合三回で第一回は三割、第二回は五割で第一回の一か月後、全体の二割が完工時という条件だ。簡単に表現すると工事に関係なく前金八割の仕組みである。

工事は三日間で終了である。足場の組み立ても一日で、足場解体撤去に時間を要した。

ちなみに工食用足場の撤去が遅々としたので記録をメモすると、十二月三日足場の網を外す、十二月四日金属パイプ解体、十二月十八日東京電力の電柱から引き込み線の保護カバー外し、十二月二十六日東京電力がカバー引き取り。この工程だけで網屋・パイプ屋・東電と三業者が絡んでいる。

被害を受けてから三か月で悲しかった記憶も薄らいで新年を迎えることが出来たのでホッとした。

私の交遊録

田原 敬

人はこの世に生きている限り、何らかの仲間達の中で生きている。

その関わりは様々であり、学校、同業、勤務に関係して地域、出身地、スポーツなどに関連して神経の網のようには繋がっている。

人は誰でも孤独では暮らせない。集団の中で異なった人々の考えや知識などの交流の中で生きている。

「アジア・アフリカ国際理解センター」の仲間であった杉浦石藏さんの勧めで、「企業OBペンクラブ」へ入会し十数年になった。このアジア・アフリカの会長大野正雄さんが亡くなると、会は終わってしまった。

大野さんは、永年中近東で勤務し、現地を旅し、その土地の品物を沢山買い集め、自宅をミニ中東博物館として多くの人に公開していた。

此処で毎月勉強会を開き、雰囲気を実に良かった。

全会員が海外の体験談、時には外部講師を招いて、外国の知識を得る会であった。

以前から、私は毎月、学習院大学へ講演を聴きに行き、一昨年十一月は、富山大学芸術文化学部 of 三船温尚教授による講演で、「古代中国のスタンプ文様の鑄造方法」という演題であった。

私はだいたい以前から、考古学に興味があつて、東京大学名誉教授江上波夫先生の主宰する「東アジアの古代文化を考える会」会員で、先生とエジプト、モロッコ、イスラエル、イタリア、インド、ネパールなどへ行き、中国は成都、敦煌、西寧、北京、天津、済南、長春、大連などへ五回行った。

江上先生の書物に、山上憶良に関する記述がある。

七世紀頃、朝鮮では百済が滅亡し、憶良は父親の憶仁に日本へ連れてこられ、柿本人麻呂らと短歌に親しむ。

万葉の時代に心豊かに、まことに自由な時を過ごしたのだろう、そんな気がしてならないとある。

話は変わる。

慶応大学名誉教授であった江坂輝弥先生と韓国を旅行したのも忘れ得ぬ思い出となっている。

帰りの飛行機の中で、「先生は韓国へ何回行きました」と聞くと、今回で一三〇回になる、と言われた。

高校時代の同級生に今井正明さんがいる。

彼は大変優秀で、東京大学を卒業すると、日本生産性本部に入り、アメリカで五年間勤務している。

彼の著書『現場カイゼン』は世界各国で翻訳され、大きな反響があったようだ。

経営コンサルタント会社を立ち上げて、日本内外の会社の交流に貢献しておられる。

パリ、ローマに支社を設け、大変多忙な日々を送っておられ、最近はスウェーデン、ノルウェー、フィンランドへ行かれ、世界規模で活躍している。

同じく同級生で東京大学教授をされた臼田誠人さんは、残念なことに四年ほど前に病気で亡くなってしまった。

彼が大学を退任した年、自宅へ電話をすると、「駒込

で会いましょう」ということになり、喫茶店で一時間余も語り合ったことは、忘れ得ぬ思い出となっている。この時のことを記録として残してある。

現在、私は満八十八歳であり、残り少なくなった友が一人、二人と世を去ってしまう。

少々、気が減入ってしまう思いで過ごしている。



日本民族を滅亡させないために―焦眉の急は戦後教育の建て直し―

鳥海 博

アイ・ハヌムから出土した、デルポイの格言が刻まれた碑文

Pais on kosmios ginou (子供のころは、よく学び)
hebon enkates. (若いころは、感情の制御を学び)
mesos dikaios (中年のころは、正しくあり)
presbutes eubouios (老いては、よき助言を与え)
teleuton alupos. (死に際して、後悔はない)
私も老いた。良き助言者であることを願いつつ、一文を認める。

▲1945年の敗戦時、占領軍の施策の一つが日本の過去の否定であった。見掛けは日本の軍国主義の否定であるが、その根本は過去の「権威」の否定であった。やや具体的に言うなら、近くは父や母、祖父母その他ご先祖様を敬うことの否定であり、遠くは神話や宗教の否定

であり、日本の文化・伝統の否定であった。斯くして日本国民は民族の誇りを失ってしまった。

そういう環境下で育てられた「新しい日本」の子供たちは不幸であった。子供にとって最大の拠り所は自分の父であり母である。これは生きている社会が何処であれ、変わらない万古不易の真理である。神話は子供の権威のふるさつである。そこに出て来る人物が現在の人とう繋がついていようと、繋がついてまいと、それは無関係である。概していえば、そこで展開されるのは勧善懲悪の世界であり、一種の夢物語であり、理想である。これらを否定されたら、子供は何を頼りに人生を歩めばいいのだろうか。基準が出来ないまま大人になるのであるから、目標の無いフラフラした人生を生きることになる。

▲子供にとって第二の不幸は「教育勅語」の否定である。明治23年に出来たこの教育綱領は、占領軍により問答無用で一刀両断にされた。確かに、この勅語には【我カ國體ノ精華ニシテ】【以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ】などの文言があり、皇国史観の侍女的役割を担わさ

れていた。すなわち、日本における道徳は、すべて天皇制の発展に寄与してこそ、はじめて意味を持つということになっていた。然し、具さに見ると、その内容の99%が人倫の元を説いており、拳拳服膺、今に至るも遵守すべき徳目・道徳に満ち満ちている。父母に孝養を尽くし、兄弟は仲良くし、夫婦は相和して暮らし、朋友相信じて生きる……、これが全否定されたから、子供はこういう基本倫理を教えられずに育ってしまった。

▲更には公德心・公共心の否定である。明治維新により、日本も近代国家の仲間入りを果たし、曲がりなりにも「公」の思想が育っていたが、その「公」が天皇の為の「公」であるという占領軍の見立てにより、これが否定され、人は「公」を忘れて自分の為に、自分の好きなように生きればいいという「自己本位主義」になってしまった。つまり、自分の都合が最優先であり、権利ばかり主張して、他人の事や国家の事を考えない人が出来上がってしまった。斯くして「隣人愛」や「愛国心」が子供に欠如してしまった。新憲法前文や第9条の規定がこ

れに輪を掛けてしまった。国民は自分の国を自分で守るという気概を何処かに置き忘れてしまった。新憲法12条（13条には、「私権は公共の福祉に従う」、「権利の濫用は許さず」という規定があるが、これをもう少し強調したいものである。

▲最後に世界平和との関連で一神教と多神教について考察しよう。現下の強国は概していえば一神教国である。一神教は、ヒト・モノ・カネを一極に集中する効率最重視の資本主義の原理と通底するものがある。競争相手を叩き潰す論理である。勝利は相手を全滅させる事にある。今の様なモノ余りの世界で平和が来ないのは、この所為である。幸い、日本のDNAは多神教である。多神教は、自分も生き相手も生かす「生き生き」の社会である。上述した色々な事を復権させ、多神教である【日本教】と併せ、子供たちに教え込もうではないか。戦後の日本国民は何故か、日本の文化はダメであるという自虐史観に取り憑かれてしまった。過去に思いを致し、自虐史観から脱却し、世界に平和を齎^{もたら}そうではないか。

戻った財布

長尾 進一郎

五年前の夏、家族でスペインのバルセロナへ観光旅行に出かけた。夜遅く現地に到着し、翌日の午前中、予め申し込んでおいた市内一周バスツアーに参加した。最初の見物スポットは街を一望する丘上の公園。サグラダファミリアを含めて街全体を俯瞰するには格好の場所だ。しかも申し分のない晴天。夢中になって写真を撮りまくり、バスに戻ってふと我に返ると、ショルダーバッグに入れておいた財布が無い！ 歩いた公園の道やバスの座席下を探しても見当たらない。

血の気が引いた。観光気分も吹っ飛んだが、公園にいた三〇分間の行動を必死に思い出す。まず見晴らしスポットでバッグからカメラを取り出し風景を撮った。その後は売店を見て、そう……、アジア人らしき男女に「シヤッターを押して下さい」と頼まれ、引き受けたのだった。その際、カメラを取り出した後の自分のバッグはフ

アスナーが開いたままだったようだ。恐らくはこの時に、私の背後に居たと思われる彼らの仲間に抜き盗られた可能性が高いというのが、後で考えた末の結論だ。

財布に入れていた現金は用心のため一〇〇ユーロ程度に抑えていたが、たまたまクレジットカード、日本の運転免許証、ホテルのカードキーと一緒に入っていた。免許証等はホテルの金庫に入れて来るべきだった。家族からは「バッグのファスナーは閉めておくようにガイドさんも注意していたのに」と言われるが、起きてしまったことは戻らない。とにかく手続きをしよう、ということでは家族も協力してくれて、バスが街に戻ると直ちに旅行社の現地事務所へタクシーを飛ばす。そこで事情を説明し電話を借りて、先ずクレジットカード会社にカード停止を依頼。次に日本領事館に電話したところ、日本での免許証再発行には盗難証明が必要と分り、証明書を発行してくれる警察の出張所を教えてもらい、さらに旅行保険会社にも事情を連絡した。

急ぎの手続きはとりあえず終了したので、落ち着きを取り戻し、申し込んであった午後のモンセラット観光に予定通り参加する。奇岩が目を奪う岩山、その中腹に建てられた荘厳な教会、展望台からの広大な風景などを楽しんだ。観光を終えて街に戻るとすでに夕方六時だが、夏のスペインは昼間のように明るい。カタルーニャ広場の警察出張所を訪ねていきさつを話し、盗難届に記入して提出する。財布の特徴や中身などを聞かれ、結構待たされたが盗難証明を貰うことができた。

必要と思われる手続きがようやく全部済んだので、やれやれという安堵感を胸に、土産店で買い物をして、石畳の通りを散歩しながらホテルに戻る。ホテルのカードキーを盗られたから、その旨をフロントに説明に行くと、何と「先ほど警察署から電話が入り、あなたのものと思われる財布が警察署に届けられている」という。カードキーを手掛かりにホテルに連絡が来たのだという。

予想外の展開に驚くと共に小躍りしつつ、連絡をくれた警察署の場所を聞き、すぐにタクシーで向かう。窓口

で幾つか質問を受けた後、手渡されたのはまぎれもなく今朝行方不明となった財布。しかも予想に反してクレジットカード、免許証、カードキーは全てそのまま残されていた。さすがに現金は無くなっていたが。担当の警察官も「無くした財布が出て来るというのは当地では極めて珍しい」と驚きを隠さなかった。

財布が届けられた状況を尋ねてもはっきりは答えず、今もって不明だ。推定通り盗られたのだとすれば、犯人が現金を抜き取って捨てたものを、たまたま拾った人が届けてくれたのかもしれないが、一部始終を知っているのは財布のみである。それはともかく、「捨てる神あれば拾う神あり」を地で行ったような出来事に、まだ現実と思えない不思議な感慨を覚えながら警察署を後にした。思えば長い一日だった。そして多くの方にお世話になった。旅行社の現地事務所には、翌朝に電話して顛末を報告した。財布を届けてくれた見ず知らずの人のおかげで、失った一〇〇ユーロと引き換えに、それ以上の忘れ難い思い出を貰った旅行であった。

戻った財布は今でも記念として保存してある。

高野山から熊野へ

新田 由紀子

退職したばかりのWさんが高野山に行きたいと言う。
いいでしょう、お互い時間はたっぷりある。Wさんは山仲間だしマラソンも走る。歩く旅の道連れには願ってもない。熊野古道と那智滝にも足をのぼそう。

「いよいよ今晚の夜行バスですね」と、Wさんからのメールでは、台風被害で高野山ケーブルと接続電車が運休しているという。第一日目朝からの強行軍、歴史の参詣道を歩くプランがまず吹っ飛んだ。

さて当日。下から登ってくるはずだった「高野山女人堂」で代替バスを降りると、けっこうな山の中だ。地図を広げて歩けるルートはないかと探せば、車道の向こうで山道が誘っているではないか。

「えっ、これ行くんですか。倒木で通行止めって書いてありますよ」。わかってます。女人堂の堂守さんに聞いたら、あんさん危のう言うても行かはるんやろねえ、

ってニッと笑ってくれたから行きます。ここを登れば高野山の玄関口「大門」に降りられる。私はダブルストックをリュックからはずすと、Wさんはおとなしくスニーカーを脱いで登山靴に履き替えた。

杉の倒木またいではくぐり、荒れまくる山道を登ると壇上伽藍の屋根が見えた。やってきました高野山。

午後の予定「高野三山」一周も台風被害で通行禁止。ならば寺巡りとグルメでしょう。私たちは名所を回り、餅菓子やごま豆腐を食べて名水コーヒーを飲んだ。

お待ちかねの夕食。目当ての精進料理は早々の店じまい。裏通りの中華料理店に入ると、宿坊から脱走してきたのか外人客ばかり。二皿目が来たところで「ダメです。出ましよう」とWさんが首をふる。腹三分で私たちは町はずれに居酒屋を見つけた。新宿あたりと変わりないメニューで般若湯にありつく。

翌日は奈良の五条から熊野方面へ、長距離特急「日本一長い路線バス」で紀伊山地を縦断する。終点新宮まで乗ると五時間かかるので、「日本一大きい村」十津川村の観光スポットで途中休憩がある。十津川上空54メートル、

長さ297^{メートル}の「谷瀬の吊り橋」。足腰自慢のWさんは
ゆらゆら揺れる橋を渡ってはしゃぐが、私はそんな危な
いことはしない。

バスは山を縫い川を越えて走り続ける。とつぷり暮れ
た十津川温泉で、お尻をさすりながらバスを降りた私た
ちを温泉民宿と露天風呂が待っていた。

一夜明けて、いよいよ熊野古道「小辺路」のハイライ
トを歩くのだ。石畳みの山道は天空の里「果無集落」^{はてなし}か
ら「果無峠」(1100^{メートル})を越えて、熊野川沿いのバ
ス道まで10^{キロ}の長丁場。連泊の荷物とWさんの叱咤激励
を背に、柿の葉ずしで元気をつけて頑張る。無事国道に
降り、日に三本のバスをつかまえると、熊野本宮を素通
りして山一つ越えた古湯「湯の峰温泉」へと向かう。

快適なゲストハウスも食事時はカオスとなる。電気釜
に無料の御飯があっても、外人バックパッカーには人気
がない。彼らはわらわらとパスタを茹でては缶詰やレト
ルトソースをかけてモソツと食べる。私たちはそうはい
かない。マグロの刺身も総菜も梅干しも道の駅で仕入れ
たし、みそ汁なんかこだわりの生しじみだ。しゃきつと

盛り付けて地酒で乾杯といきます。

翌日の「赤木越え」ルートは登山道の崩落で通行止め。
それならばと、逆方向に「大日越え」で熊野本宮に出る。
観光メツカの「中辺路」も歩いてから、名物めはりずし
を買って午後の新宮行バスに乗った。

トンネルをくぐると新宮の町だ。ホテルに荷物を置いて
神倉神社と速玉大社^{はやたま}を見に行く。ここでも裏山を登る
予定が、何度も蜘蛛の巣に遮られて諦めた。私たちは境
内の売店でミカンを買って河原に降りると、河口いつば
いに広がった熊野川を眺めながら、甘酸っぱい旅情を味
わうのだった。

小雨模様の翌日は那智滝見物。Wさんは雨と滝のしぶ
きをものともせず、那智黒ソフトクリームにご満悦だが、
ここからはタイムキーパーの正念場。分刻みでバスを乗
り継いで新宮に戻り、想定外で^{delay}もうつつちゃって生姜
焼きランチを食べ終え、名古屋行き高速バスに乗った。

バスは雨に煙る熊野灘を右に見て一路名古屋へと走る。
缶ビールの酔いに目をつぶると、高野山から熊野まで波
打つ山々が見送っていた。

戦後日本経済の分岐点

野上 浩三

【日本経済の復興と頓挫】

第二次大戦で灰燼に帰したわが国経済は戦後一〇年ほどで奇跡的な復興を遂げた。その過程では朝鮮動乱の特殊などの助けもあったが、一九五五年から七三年にかけては自力で高度経済成長を達成した。安定成長期に入っても、為替レートが有利に働き、日本経済は好調を続け、わが国は豊かな国作りが可能な地位を築いていた。

ところが、プラザ合意を転機に、日本経済は逆に苦難の道程を辿ることを余儀なくされる。

一九八五年九月、アメリカはベーカー財務長官が、強いドルの信奉者レーガン大統領を説得してドル安を実現する為のプラザ合意を開催した。日本は、強い円を志向する中曽根首相の指示により、「一定の円高を辞さない」と積極的に呼应した。一国の宰相が自国通貨の切り上げを積極的に受け入れたことが世界規模の円買い投機を招

いた。過度の円高は二〇一二年の「ドル＝七五円」に至るまで続いた。その結果、日本経済を支えるべき輸出企業の経営基盤が崩れ日本経済の土台骨が揺るぎ出した。プラザ合意こそ戦後日本経済の分岐点であった。

【平成バブルの発生と崩壊】

窮状に陥った輸出企業を救済し、不況の長期化を阻止するために、政府は膨大な財政支出と低金利政策を実施した。国内の金融市場は超緩和状態に陥った。

一方、わが国では一九六八年に上場企業が新株を時価で発行して資本を調達する制度（時価発行制度）が実施されたが、法制度が未整備であったために極めて恣意的な新株の発行が蔓延した。自社の株式の時価を人為的に大幅に引き上げておき、それに基づいて新株を発行したのである。しかも、企業の財務部が、証券会社「今、新株を発行すればタダ同然の資本が大量に調達できますよ」と持ちかけられ、大量の資本を調達した。

ところが、資本を調達したものの使い道が無かった。そこで、これも財務部主導で、株式や不動産への投機に走った。最初はすべて上手く行った。「財務の時代」と

という言葉が生まれたのはこの頃である。

プラザ合意と時価発行制度における誤った行為が災いして、一九八六年から八九年にかけて、未曾有のバブルが発生した。

平成バブルは通常のバブルと違い企業の自己資本によるバブルだったので、収束させるために極めて厳しい政策が実施された。その結果、今度は深刻な不況に襲われ、第二次安倍政権によって円高是正が実現された二〇一二年まで三〇年間の長期にわたって続いた。

ゼロ金利は今もお国民を苦しめ、国民年金を脆弱化させている。個人投資家を株式市場から離脱させ、株式市場の本来の機能を發揮させなくしている。

【平成時代の忘れ物】

平成時代に起きた経済関係の事件としては、平成バブルの他に、オリンパス事件、東芝事件、日産のゴーン事件があった。これらの事件の背後には、代表取締役制度、時価発行制度、適正な円レートを維持するための法体制に関わる問題が潜んでいる。しかし、これらの問題が解決されないまま平成時代は終わる。

将来の為に、これ等の問題の原因である制度の欠陥とそれらが是正されないで放置されている理由を明らかにしておきたい。

代表取締役制度はわが国だけの矛盾した制度である。人を得ないと簡単に独裁者を生じ、取締役会を形骸化させて企業統治機能を發揮させなくする制度である。

企業統治機能の欠如が大きな問題になっているのに商法学者は黙っている。法制局が改善しようとしても経団連に反対されて実現しないと言われている。

時価発行制度は資本市場で覇権を握りたい証券業界と自己資本を充実したい財界の思惑が一致して導入されたが、然るべき法規定を設けなくままに実施された。責任は証券業界と財界、監督官庁の旧大蔵省にある。

適正な円レートを維持するための法体制は中曽根元首相によって乱された。

船橋洋一著『通貨烈烈』にその間の事情が正確かつ詳細に記録されている。『通貨烈烈』は日本では余り読まれなかったが、最近中国で出版された。従って、中国は日本の愚を繰り返さないであろう。

はばかりながら？

浜田 道雄

とはいっても、別に、はばかりな話ではない。

私たちが毎日必ず閉じこもる場所、トイレの話である。私にとっては哲学する場でもある。いまは洋式の便座になったから、長時間座り込んでいても疲れない。

そんなある日、「いつごろからトイレは家のなかに作られるようになったのか？」と考えた。

どうも家のなかにトイレがあるようになったのは、そんなに昔のことではないらしい。

西欧でいえば一八世紀より後のようだ。フランスの国王が住まいとしたヴェルサイユ宮殿にトイレがないことは有名である。そこで宴会やダンスにうつつをぬかした紳士淑女は、いざとなるとあの見事な庭の木陰や花壇の隅で用をたしたといわれている。

もちろん、ヴェルサイユはフランスの誇る世界遺産だ

から、いまは観光客のためのトイレが作られている。

だが、ルイ一四世のころにトイレがあつたら、その後のフランスのレディーズ・ファッションなどはだいぶ違つたものになつただろう。あの鯨の髭でフワリと広げた長い優雅なスカートやハイヒールは、貴婦人がヴェルサイユの花園でいかにも「花を愛でています」という格好で用を済ませられるように工夫されたのだというから。

王侯貴族ならぬ庶民が住むパリの背の高いアパートにも一九世紀まではトイレはなかった。人々は寝室の隅で洗面器に用をたし、夜になると窓から街路に捨てた。

イギリスでも事情は似たようなものだったらしい。ヴィクトリア時代の小説 *My Secret Life* などには、部屋で洗面器様のものを使って用をたす場面がよく出てくる。そのころのパリやロンドンでは、人々は夜歩くときには軒の近くは歩かぬよう気をつけたという。いまはおしゃれな紳士が履くブーツは、上から街路に投げ捨てられたものを踏んで、着ているものを汚さぬためだった。

日本については近世までのことはよくわからない。が、平安時代は日本も西欧と似たようなものだったらしい。貴族の住まいだった「寝殿造」にはトイレらしきものは見当たらない。ここでもおまるが使われたようだ。

今昔物語には、芥川龍之介の「好色」の主人公公色好みで名を馳せた平中こと平貞文が、肘鉄を食わされた女房への思いを断ち切るために、その女房が用をたした漆塗りのおまるを奪って舐めてみたが、中身は丁子の煮汁と甘カズラなどの炊き合わせだったという話が載っている。

ところで、日本語には別に「厠（かわや）」という言葉がある。古事記にも出てくる古い言葉だ。すると、古代には庶民の家にはトイレがあったのか？

この答えは遠く東南アジアで見つかった。七〇年代のはじめバンコクにいたころ、国会議員一行などを案内して、よくバンコク郊外の運河の船旅をした。

あたりの家々はみな川に面しているが、どの家も脇に長い栈橋をもっていて、その先の川の上に小屋様のものが掛かっている。船旅でそんなところを通るたびに、「あ

れはなんだろう？」と不審に思っていた。

だが、あるときその脇を通り抜けたところ、突然その小屋から何かがドボンと川に落ち、魚たちが群がった。

それが、神の答だった。「そうか！これは厠だ！」

川の上の小屋だから「かわや」なのだ。古代日本の「厠」も、バンコクのものと同じように家の外に作られたものだったに違いない。

近世になると、城や個人の住宅には「雪隠」と呼ばれる便所が作られた。しかし、「雪隠」は今日の家のなかのトイレと違って別棟で、渡り廊下を通って行くか、建物の角に外に張り出すように作られたものだった。

将棋に「雪隠詰め」という手があるが、玉を盤の隅に追い込んで勝つ手だ。盤の「隅」だから「雪隠」なのだ。また、農家の便所も家から離れた別棟だった。

トイレについては、まだまだ書きたい話がたくさんある。だがそのウン蓄を傾けるのはまた別の機会にしよう。もうすこし下剤を飲んでからだ。

お家がだんだん遠くなる

濱田 優ゆたか

傘寿の声を聞いても、自分では特に老いを感じること
はなかった（自覚が足りないかもしれないが）。

それより居宅介護をしている連れの、機能や体力の低
下が気になる。三年前、長年のプールの通いが困難にな
り、送迎付きの通所介護デイサービスに切り換えた。

そこはシェフのランチが売りで人気があるが、機能訓
練はお座なり。リハビリ施設のデイケアを勧めても本人
が乗り気でないので、やむなく様子見していた。

ところが、昨年初め事態は急変し、連れを介護老人保
険施設（老健）に預けざるを得なくなった。本人に問題
が生じたのではない。私が腰椎の圧迫骨折で重傷を負い
介護ができなくなったのだ。

巣立って家を出た三人の子供たちは、それぞれ家庭や
仕事を抱えていて身動きが取れない。それで連れのケア
マネジャーSさんのお世話になった。彼女は情報通で気

が利き、頼りになる。テキパキと近隣の老健を探して入
所の手配をしてくれた。

数ある介護施設の中で、老健は病院と自宅の中間施設。
要介護の高齢者にリハビリなどのケアサービスを施して、
在宅復帰を目指す施設と謳う。入所期間は原則三ヶ月と
短期だが、延長も可能である。

私の腰の痛みは三ヶ月もすれば和らぐとの見立て。そ
れ迄連れの看護やケアは施設のプロに任せて、自分の再
起に専念すれば、遠からずまた自宅での二人暮らしに戻
れよう。そんな甘い期待は、その後間もなく厳しい現実
を目の当たりにして打ち砕かれた。

半月後、先生から軽い散歩が許されるや、杖を頼りに
亀の歩みで施設の連れを訪ねた。

びっくり顔の連れ。

「もう歩けるの」「まだ痛いけど心配だから」

二人の話を周りの人が耳をそば立てて聞いている。で、
ロビーのソファーに移ることにした。

そこで足元が覚束なく、十歩も歩くと立ち止まる連れ
の姿を見てショックを受けた。施設に入る前はシルバー

カーを押して坂上の商店街まで平気で歩けたのに。ここは黙っていると、ほぼ完全介護でほとんど歩かないという。はじめに歩行訓練を強く要望すべきだった。

早速、頼りのSさんに相談し、週二回歩行訓練の個人レッスンを受けることにした。彼女は即座に対応してくれたが、何かいつもと違う。不審顔の私に、

「施設ではケアマネが施設ケアマネに変わるの」

それで彼女は連れのケアマネを外れたというのだ。

「ケアマネが施設職員ではプランの策定は出来ても、それを実行させる権限はないんじゃないの」

この私の懸念に直接の答はなかったが、紹介者として今後でもできるだけフォローすると言ってくれた。

その後、連れの急激な機能低下は治まったものの、一度弱まった機能の回復は難しい。入所期間を三ヶ月延長することにし、今後の方策を考えることにした。

ここで実際に、老健の入居者が自宅に戻れる割合はどれくらいか。ある調査では従来型老健は二割弱で目標には程遠い。そこで数年前から在宅強化型老健などを新たに設定して帰宅復帰率のアップを図っている。その成果

を加えても、帰宅できる人は三割強で所期の役割を果たせていない。

最近では、老健を特別養護老人ホーム（特養）に入居する迄の待機所にする人も結構いる。一案だが、待機期間が判らないのが期間制限のある老健では難点だ。

また、老健は中間点の特性から個室が少ない。連れの施設は多床室だけだ。多床室に長く居るとストレスが溜まる。神経質な連れは延長期間中に悲鳴を上げ、川越の長女の家に近い介護付き有料老人ホームに移った。

一人娘が高校に入り、少し手の空いた長女が、持病を抱える私を心配して薦めてくれたのだ。

その三階にある連れの部屋からまだ畑や緑地の残る広々とした風景がよく見える。夕日に映えるその景色を眺めていると、なぜか自然に涙が浮かぶ。

わずか半年余りの間に、世田谷の自宅から老健施設、そして川越の老人ホームまで、ハプニングに翻弄されながらはるか遠くに来たものだ。

往生際の悪い私は、連れのリハビリを支援しつつ、今きたこの道を一緒に帰ることをまだ諦めていない。

亡き友の夏（続・父と子）

原 田 信

数年前、中学・高校のときの友人について「父と子」と題して『悠遊』二一号に書いた。友人と私の父との間に思いがけない交渉があったことや、彼の尊父について考えさせられたことを綴った。それを書いたあと、彼の父親についてかなり調べてみた。

高校二年のある日、発刊されたばかりの高校の雑誌を開いたら、目次に「息子の部屋」という題があり、なんとその筆者は私の父であった。雑誌部の編集長だった彼が何を思って父に原稿を依頼したのか。それから一年後に彼は山で遭難したから、聞かずじまいになった。

彼の葬儀から帰宅したとき、父から彼の父親が陸軍の報道部長（大佐）だったことを知らされた。それから二〇年として、旧日本軍のことを調べる機会があった。そ

れで、彼の父親が敗戦時にインドネシアに駐在した陸軍第二五軍の参謀長（少将）で、数年後の夏、戦犯としてスマトラ北部のメダンで刑死したことを知った。そのとき、中学二年の夏のある記憶に思い当たった。学校帰りにいつものように街で遊んでいたら、彼は急に深刻な顔になり、「きょうは帰らない」と言って立ち去った。

ここまでのことは前にも書いた。その後、「彼の父親が戦犯に問われた真相」は一体どういうことだったのか、しきりに考えるようになった。時間も余裕もなかったので、ネットの情報を調べてみた。

インドネシアにおける戦犯裁判は、主にオランダ軍無法廷が担当した。メダンの裁判もオランダの担当であった。そのときはかなり断片的な情報しか見つけることができなかったが、彼の父親に対する検察側の求刑は「無期懲役」であったことがわかった。しかし、判決は「死刑」であった。この違いはどういうことなのか、疑問を抱きながら数年、今回思い直して再調査した。

その結果、インドネシア各地の裁判の概要をまとめたより詳しい資料が見つかった。それによると、メダンにおける軍事法廷は主として二人の裁判長が担当した。しかし、二人の判決は極端な違いを見せている。T裁判長は、二二のケースで七〇人の被告を裁いているが、死刑は四人、懲役の求刑も大幅に減刑している。これに対しB裁判長は、一六のケースで、五五人の被告のうち一九人に死刑を宣告。無期懲役の求刑をひっくり返して死刑にした例も多いし、懲役刑の多くも求刑を大幅に上回っている。この情報発信者は、前者を「温情裁判」、後者を「復讐裁判」と注記している。

友人の父親は、B裁判長の法廷で裁かれた。これは、「第二五軍司令官責任事件」と言われ、「六千人の俘虜に対する虐待で五七〇人を死亡させた罪に加え、管轄下の抑留所の虐待について司令部としての責任も問われた。それで求刑も重く、司令官には「死刑」、参謀長以下三人の将官には「無期懲役」が求刑された。検察側としては、三人の被告には「死刑を科すまでの必要はない」

という意思表示をしたのである。

しかし、B裁判長は四人の被告全員に死刑を宣告した。検察側が認めた重大な責任の差を、裁判長は認めなかったのだ。

これに対し、同じような規模の虐待事件で、訴追されたのは現場責任者の尉官クラスであったが、T裁判長は、死刑を求刑された被告を懲役一五年とし、ほかの被告の有期刑も減刑、一人は無罪にしている。

当時、友人は八、九才になっていたはずだ。彼や家族が求刑と判決のこのような落差をどのような思いで受けとめたのだろう。もし、T裁判長の法廷であったなら、こういう判決になっていたのだろう。

彼との付き合いは六年に満たなかった。高校三年の夏、突然終わった。読経の声が流れる庭で青空に咲く百日紅を見上げていた。夏が来ると思い出すあの光景。

（今度のネット情報は、ブログ「近現代史・腹備忘録」で、ハンドル名「腹さん」が発信している。）

ジャズに浸った青春時代

平尾 富男

高校生の時から、既に大学生になっていた従兄の影響でジャズを聴くようになった。比較的我が家に近かったその従兄のアパートにはレコードがたくさんあって、時折私を呼んでは色々と解説をしながらレコードを聴かせてくれた。

従兄は主にクラシック音楽に深い造詣を持っていたが、当時流行りだしていたジャズのレコードも集めていたのだ。隣人に遠慮しながらも、メインスピーカーとは別に重低音専用的大型スピーカー付ステレオ装置からのジャズも楽しんでた。このオーディオ機器は家庭教師のアルバイトでお金を貯めて購入したものだ。

地方出身の従兄はアパートでの独身生活を大いに堪能していたから、大学生になっても親と一緒に住んでいた私にはこの上なく羨ましかった。次第に私はジャズに強く惹かれるようになっていった。

大学生活二年目に入ってすぐ仲間と小編成のジャズバンドを結成し、自らベースを担当した。クラシックの世界ではコントラバスとかアップライトバスと呼ばれている大きな弦楽器だ。日本のジャズ界ではウッドベースという呼び名が定着しているが、ジャズの仲間内では単にベースと言っていた。

演奏方法はクラシックのように弓を使わず、専ら指によるピッチカート奏法で、コード進行に従ってリズムを刻むのがジャズのベースだ。当初はクラシックのオーケストラ部が使っていた学校所有のコントラバスを使わせてもらう。貧乏学生の集まりだから個人ではなかなか購入することが出来なかったのだ。

そもそもその大きさ故に演奏会場への移動には苦勞した。小遣い稼ぎにあちこちの大学や小さな企業のダンスパーティーに出演することが多くなったのだ。タクシーにも乗車拒否されることがある。お金があれば自家用車に積んで自由に移動できたが、当時の貧乏学生にはそれは叶わなかった。ある日、電車で移動中にコントラバスのネック部分を折ってしまう。慌てて強力な瞬間接着剤を

購入してくっつけて直した。素人の学生バンドでは音色に全く問題はなかった。折れた箇所は傷になったので、オーケストラ部の責任者に謝りを入れた。

単独でも演奏され主にメロディを担当するピアノやヴァイオリンのように日の当たる楽器ではなく、とても地味な存在であるけれど、ジャズベースは重要な役目を果たす楽器。スタープレイヤーである弦楽器のヴァイオリンや管楽器のトランペット、或いはその他のメロディ楽器の陰で、ドラムと同様にほとんど休む間もなく最後まで的確にリズムを刻み続けなければならない。

だからプロのジャズベーシストには自己主張が少なく哲学的な風貌を持ったプレイヤーが多いというのも頷ける。例えば私の大好きなMJQ（モダン・ジャズ・カルテット）のレイ・ブラウンだ。基本的には「縁の下の力持ち」的存在ではあるが、音楽のスタイルが変化する中でベースも自己主張するようになりはじめた。曲の合間にアクセントを付けるべくソロを取ったり、ジャズには不可欠な即興演奏としてのアドリブの掛け合いをするよ

うな展開が醍醐味なのだ。

私の学生時代にはジャズ喫茶なるものが町のあちこちに出現して、多くのジャズファンに優れたジャズのレコードを聴かせてくれた。ジャズに魅せられた学生たちは、たばこの煙を燻らせ、足でリズムを取りながら長時間目を閉じ無言でその音楽に聞き入っていたものだ。

今では余りジャズ喫茶なるものは流行らないようだが、古い書籍といっしょに自室の片隅に積み上げられた昔のレコードを取り出しては、懐かしいジャケットに見入っているファンは少なくないのだ。

モダンジャズの巨人と言われるベーシストのチャールズ・ミンガス、前述したMJQのレイ・ブラウン他、ジャズ・トリオの神髄と言われたオスカー・ピーターソン・トリオのベース奏者、孤高のロン・カーター、更にはトランペット奏者のマイルス・デイヴィスは、私にとつては神様のような存在だった。

断捨離

廣澤 重穂

男性アナウンサーが樹木希林に話し掛けた。

「これ、映画祭で貰ったトロフィーでしょう。カッコいいですよ。でもいいんですか？ 思いの品でしょ」
「いいのよ。どうせ持っていたって仕方ないじゃない。私が死んでも、これなら実用的だし、ちょっと素敵ねって貰ってくださる方、いるかもしれないでしょ」

テレビカメラが樹木希林の自宅を訪れた際のワン・シーンだ。アナウンサーがピアノの上に置かれた風変わりな電気スタンドを見て訊ねたのだ。賞で貰った人形型トロフィーに傘と電球を付け、照明器具に加工してある。

その部屋には、ピアノとそれ以外は何もない。

彼女のそんなシンプルな部屋を見て、断捨離という言葉が浮んだ。モノを捨て、煩惱を捨て去って身軽になることだ。

昨年初め、友人が亡くなった。二年前に妻を亡くし、

子供のいなかった彼は遠くの親戚に頼まず、近くの隣人だった私に、すべての「後始末」を託した。

彼が亡くなり、彼の住まいも処分せねばならない。その住まいは都内の小さな賃貸マンションだった。

彼がそこに暮らすまでには、幾度か引越している。長く暮らした東京を離れて田舎暮らしをしていたが、末期ガンの妻の終末医療のため、再び都内近郊の病院近くに戻ってきた。妻が亡くなると多くのものを処分し、その小さなマンションに移った。大きな箆笥やテーブル、台所用品など、それまでの生活にけりをつけるかのように。とはいえ、それでも十分な荷物である。

処分するために私が最初にやったことは、知人に来てもらって「モノ」を持ってもらうことだった。書籍、懐かしいCD、服。そして趣味にしていた数十本のワイン（別に高級なものではない）。パソコンや時計や高級オーディオもある。

しかしやって来た彼らは、部屋を見回しながら思い出話に耽るものの、何も持って帰ろうとしない。

業を煮やした私は催促した。

「何か、持って行ってやれよ」

「いや、いい。すでにあるから」

「そのオーディオ、彼が大事にしていたやつだぜ」

「いいよ、荷物になるから」

結局、彼らが手にしたのは、未使用の郵便セットだったり、高級そうなボールペンだったり、洒落たワイン・オープンナーだったり。僥ふためというより、実用的で簡便なものを、お義理に、とばかりに。思い出といっても他人にとっては、普通の品に過ぎないらしい。

結局、台所の棚に並んだワインを、数本ずつ強制的に渡して帰っていたのだ。

住まいは片付くことなく、モノは残ったままだ。冷たいようだが、最後は処理業者に託すしかない。

作業を始める前に、私は業者の人に言った。

「ここにある荷物、すっぱり持っていくて下さい。いちいちどうするか聞かなくていいですから」

彼の思い出の品々を処分するのは、薄情者^{〴〵}のようでも心苦しかったが、心を鬼にするしかない。

そんな気持ちを察したのか、業者の人もまた、彼の人

生の足跡を示す品々を前に気を遣う。

「これら、本当に処分していいんですか？」

彼が熱中していた浦和レッズのグッズ、幾度か訪れていたキューバ関係の資料、奥さんへの思い出の品々。そして彼のアルバムや日記類、手紙など。

彼の思いが詰まっではいるが、自分にはどうすることもできない。

「はい。すっぱりと！」

あれから一年。明日は我が身——そろそろ自分の身辺整理をせねばならない。捨てよう、モノを持たないようになしよう、シンプルに、シンプルに。事あるごとに、断捨離、断捨離^{〴〵}と口ずさんできた。

ところがどうだ。あれほど、あの世へは、何にも持っていない^{〴〵}と知らされたのに。自分にとって宝物でも他人にとってはゴミの山^{〴〵}と、あれほど痛感させられたのに……。

あらためて、樹木希林の覚悟と踏ん切りのよさにかかわない、と頭が下がった。

「ペチカ」で結ばれたご縁

藤原 道夫

私どもの時代にはインターン制度があり、医師国家試験の受験資格を得るには、学部卒業後一年間の臨床研修が必須だった。研修といっても一定のカリキュラムがある訳でなし、また身分もなく、制度改革の気運が高まっていた。一方、自由度の高い時間を持てる貴重な一年でもあった。研修以外に、研究所の実験室に深夜まで入りびたり、時季を選んで旅行にでかけ、さらに医師のように働くことも可能だった。この間に表題のご縁ができた。卒業後先ず大病院分院の外科で二か月間研修した。特に手技を習得した訳ではないが、その後医師のように振舞う度胸がついたように思う。夏に友人と共に穂高連峰への登山基地にある涸沢診療所にでかけ、怪我人や疲労で意識朦朧となった登山者の手当にあたった。冬には友人と二人して菅平スキー場の診療所に赴き、怪我人の対応に追われた。村人への往診も頼まれ、大変だった。

秋に大田区内の病院で当直を勤めた。仕事は夕と朝に入院患者を回診すること。ここで上品なお婆さんに出遭った。回診のたびに丁寧な挨拶され、正規の医師でない立場として恐縮した。がんの末期とかで、治療は特に受けていない様子だった。娘さん（以下Uさん）が泊まり込みで付き添っており、母親を看病する献身的な姿に心打たれた。穏やかそうなご主人を時折見かけた。ある日Uさんから、母親が唱歌「ペチカ」（雪の降る夜は楽しいペチカ）を聴きたがっているがうまい方法がない、との話を聞いた。私にも解らなかった。

しばらく経って、夕食をとりながら母に「ペチカ」のことを話してみた。母は当時市川市の私立高校で教諭をしており、社会か国語を教えていた。母が同じ高校の音楽の先生に相談してみたところ、先生自身が歌ってテープに録音してみましよう、と申し出てくれたという。数日後にテープが届いた。聴いてみるとなかなかよい出来栄ではないか。早速Uさんに届けると、お婆さんも大変喜んでくれる様子だった。お婆さんは朝昼晩と、時間をみつけては「ペチカ」を聴いていた、と後から聞いた。

がん末期のお婆さんに対して、私は医療行為は何もできなかった。ただ聴きたい歌を枕元で聴けるようにお手伝いしたに過ぎない。とはいえ、とても良いことをした気分になった。音楽好きの私は、音楽の力のある程度理解していた。戦時に離散した家族が再会を託した音楽、次の瞬間さえわからない戦地で生き延びる希望をつないだ音楽、そんな話を聞いていた。自身にも窮地に鼓舞された音楽がある。がん末期のお婆さんにとって「ペチカ」がどれほど生きる力になったか、想像に難くない。幸々な少女時代か子育ての時を思い出していただろうか。

次の年の二月、Uさんから母親の訃報が届いた。続いて万年筆が送られてきた。こちらからお悔やみを述べ、お焼香させて頂きたい旨の手紙を出し、住所を辿って川崎市のUさん宅を訪ねた。その時以来、時に応じて手紙のやりとりをする間柄となった。Uさんは決まって万年筆で端正な字を認めていた。私が結婚した時や娘が誕生した時には大変喜んで頂いた。Uさんが胆石症を患った時は、当時私が勤めていた研究所附属病院を紹介した。手術が成功してほっとした気分だった。その直後私は二

年間の留学のためにカナダへと発った。

帰国してから、家内と娘を連れて横浜市金沢区内に新築されたUさん宅を訪ねた。東京湾の向こうに房総半島が望める所だった。ご夫妻にはお子さんがなく、Uさんは亡くなった姉の三人娘を預かって育てたとか。三女で大学生になったお嬢さんが小学生の娘と遊んでくれた。物静かなご主人が私どもの話の聞き役だった。Uさんは甲府近郊の出身で、地元の美味しい干し柿を頂いた。

其の後もご縁は続いた。次第に老いのお話が出るようになった。Uさんから黄斑変性症に罹って視力が衰えてきた旨の便りを頂いたのは数年前だったか。平成二十八年の暮に頂いた手紙が最後になった。大きめのペン字で私の贈ったお茶を福茶としますとした後に、九十六歳になり黄斑の変性が進んで不自由を感じている、と書かれていた。「ペチカ」のテープは母親を思い出す貴重な品として保存してあるとのこと。出遭いから五十三年の歳月が経っていた。以前に頂いた万年筆で、インターン時代からこれまでに及ぶご縁は私にとって生涯の宝物に思われる旨の返事を書き、万感の思いを込めて投函した。

入院騒動記

松谷 隆

昨年六月十三日の夕食時、妻に「なぜか胃が重い。昼の鶏肉かな」と言いつつ、料理に箸をつけたところまでは覚えてる。

一昨年十月以降、胃腸クリニックと横浜市民病院で計三回胃の内視鏡検査で指摘・確認された腺腫の摘出手術を、七日に受け、経過も良好で十一日に退院したばかりだった。

何やら耳元での声で気がついた。救急車派遣を頼んでいる妻の声だ。さらに「父さんが倒れた。すぐ来て」と娘への電話だ。

「何を騒いでいるんだ」と言うのと、「食事中に、突然意識を失って、椅子からずり落ちたみたい」と妻。体を起こそうにも、力が入らない。目も開けられず、妻にあごを上げられたまま、救急車の到着を待つ。

意識朦朧で病院に逆送された。途中で「一〇一」が見えた。最高血圧という。到着後、脳と内臓の二度のMRI検査や触診、問診などで零時近くになった。その後「腺腫摘出部からの出血の可能性大。胃を洗浄する。再度内視鏡で検査し、必要なら止血や輸血するので、同意書に署名を」との宣告。

これには参った。鼻から洗浄用チューブを入れる。苦しい。洗浄液が入り、しばらくして、スイッチを抽出側にすると、赤濁色の液が出てくる。液に血が混ざっているのを自分で確認するなんて沢山だ。しかも洗浄液が三回も追加される。「終わり」の声がかすかに聞こえた。

目覚めると救急病棟のベッドの上。点滴液の大きな袋が見える。午前四時だった。その後もウトウトしていると、七時前に妻が着替えなどを持ってきた。そして「昨夜、一度『帰ってもらっていい』と言われた。が、その直後別の医師がきて、『止血する』と言われ、一緒に内視鏡室へ行った。モニターを見たら血がドクドク出ていた。クリップ七本で止血カバーを貼って血を止めた。帰

宅は午前二時。始めに言われたとおり帰っていたら、出血多量でどうなっていたやら」という。声が出なかった。その後の六日間は、出血による総蛋白とヘモグロビンの激減のせい、だるさや歩きにくさがあり、下痢の次は便秘とひどい目にあった。

担当医の回診時に「今回の出血は昼食の鶏肉をよく噛まなかったためなのか」というと、「それだけが原因とは思えません」と含みをもたせる返事。

ただ、最初の退院時に「食事の注意事項は」と聞いたら、「常食OK」との返事だった。どうも今回の原因はそれに関連していそうだと推定している。

大病院では規格・規則は統一されていると思っている。しかし、市民病院では病棟ごとの消灯時間や手動と電動操作のベッドの違い等があり、驚きだった。

しかし再入院時の救急病棟とその後的一般病棟の看護師たちの懸命の看護には頭が下がる思いである。

退院後、かかりつけ医に入院中の血液検査結果を示しながら経過を説明したら、驚きながら「七、八百cc出

血したと思う。頭痛はなかったか」と聞かれた。

「なかったです。あれば、何か問題でも」と答えた。

「よかった。よかった。脳が血液不足だと、脳梗塞になったかも」と言われ、ぞっとした。

退院して七ヶ月が過ぎる。術後、基準値以下だった総蛋白とヘモグロビンの数値は正常値に戻った。だが、中性脂肪の急増や血清鉄不足が判明。先月、胃の変調をかりつけ医は「初期の胃潰瘍」と診断、治療が始まった。昨年は前年比四十一日も多い休肝日二百日達成し、アルコールも控えたのに、回復の遅さでのストレスに完敗か。今月下旬の市民病院での内視鏡検査でどんな結果がでるか気になる。だが、再々入院だけはごめんだな。

いずれにせよ、二度目の入院時、妻の適切な行動で救われた。彼女には感謝、感謝である。

(平成三十一年一月十七日)

寿命

松田 昌康

一昨年の十二月三十日に、父が亡くなった。天寿百五歳、百四年五か月余りの長い一生だった（わが家の宗派では、百歳を超えると享年とは言わず天寿と言うと知った）。葬式は大晦日に家族だけで執り行った。葬儀社に、年を越すと三箇日は火葬場が閉まるので面倒ですよと言われたし、百四歳の父の友人知人は既に亡くなっている。

父が入所していた老人ホームから、物が食べられなくなったので入院させるとの連絡があつてから約一週間、病院の担当の先生から至急来院するように言われて、慌てて新幹線で岡山に向かった。その日の午後に病院で対面した時にはすでにほとんど意識はなく、呼びかけにかならずに目が動く程度だった。その日は私が病院に泊まったが、夜中は何事もなく過ぎ朝が来た。このままの状態が続くのかと思っていたが、七時過ぎに回診にきた看護師が脈拍の低下していることに気付き、家族を呼ぶよ

うにと言った。父の最期を看取ったのは私だけだった。

以前は、父の定期的な検診に、私が付き添って行き、帰りに和食レストランで昼食を共にした。父には久しぶりの外食になり、お酒を飲むのを楽しみにしていた。死の一月前に酒を酌み交わしたのが最後となった。

父が老人ホームに入るまでは、実家で父と我々夫婦で元旦を祝っていたが、老人ホームに入ってから、年末年始にはホテルに泊まっていた。一昨年も父の亡くなる前に、大晦日から二日までホテルを予約していた。葬式の後、ホテルで紅白歌合戦を観て年を越した。二日は、帰京する前に地元の老舗デパートに妻の希望で福袋を買いに出掛けた。

そのデパートで、思ってもみなかった中学同級生のM君とばったり会った。M君も奥様連れで、二人とも和服で決めていた。私がエスカレーターで上りかけたとき、誰かが私を呼んだように思っただけならM君だった。彼の最初のひと言が、「松田君じゃろう。なんでここにおるん」というものだった。私の方もびっくりして慌ててしまい、上りかけたエスカレーターを逆走して彼のと

ころに行く有様だった。そして、久しぶりに元気な彼の笑顔を見て、前の年に入院していると聞いたけど元氣そうで安心したと言うと共に、父の葬式の話をした。

それから一年も経たない昨年十月下旬に、いつも同窓会の幹事をしている友人から電話でM君が亡くなったと告げられた。青天の霹靂だった。正月二日に会った時の彼の元氣そうな笑顔が思い出されて、ひよっとしてドッキリではないかと思つた程である。葬式のある日曜日には東京で用事があり、前日のお通夜に列席した。お棺のM君の顔は穏やかな表情だったが、ひどく小さく見えた。M君は中学生の時はワル仲間の一員だったので、當時は付き合つてなかった。社会人になって同窓会に参加するようになってから、何時とはなしに懇意に付き合うようになった。彼は、卒業後は暴力団に近づいたがこのままでは駄目だと思つてかなりの手切れ金を積んで足を洗い、今の建築関係の仕事に就いたと話していた。それから大学出の人間と同等の知識と経験を積むため人一倍努力をしたとも。そして会社を作り人を使うようになっていた。話も面白いし、同窓会では盛り上げ役の一人だっ

た。二年ほど前に入院したのは、高所作業中に落下して大怪我をしたためと聞いた。その後退院して、小豆島での一泊二日の同窓会にも元氣に参加していたのに。ただM君は、最後は癌で入院したことを他には言わないでくれと幹事に頼んでいたと、通夜の席で聞いた。

一年足らずの間に親しい人を二人亡くした。一人は百歳を超えて生き、もう一人は叩かれても早々死なないほど元氣な肉体を持っていたのに平均寿命より十年も早く逝つてしまった。「本当に人の寿命とは分からないものだ」ということを実感させられた一年だった。

余談になるが、その日の内に帰京する私を車で来ていた同級生の友人が駄まで送ってくれた。車内でM君の話が途切れた時、突然「俳句を始めたんじや。ボケ防止にええよ。あんたもやった方がええよ。特に、句会で他の人の意見を聞くのが勉強になる」と言った。私は、写真に五七五を組み合わせるフォト句なるものをやっていると話し、ひととき話が盛り上がった。とにかく、ボケ防止に良いことで意見が一致した。現在頂いているお題写真は難しく、四苦八苦しながら脳トレに励んでいる。

Don't Disturb

三 春

旧い話だ。昔の知人の伝記が出版されていたことをつい最近知って、私なりの思いを書いてみたくなった。

「貴女もこのS商事の社員ですか？」

医務室で診察待ちの私に中年男性が話しかけてきた。

「はい、海外市場部ロシア室の新人です」

「ふうん、僕は鋼材貿易部。また会うかもしれないね」
それだけのことなのに、次の人事異動でまさにこの鈴木さん（通称ムツシュ）が同じフロアにやってきた。

それからの毎日は驚きの連続だ。ムツシュは必ず遅刻（昼時に出社）する。靴を履いたまま両脚をデスクに乗せてパイプをくゆらせる。自分の先祖はスペイン貴族だと信じていて（？）、いつも仕立ての良いスーツを身にまとい、冬ともなれば赤と黒のリバーシブルマントを翻して闊歩する。直属の部下でもない私に電話してきて、出

張の機内で読むための本を選ばせる。世界各国のホテルのドアノブDDカード（Don't Disturb）を蒐集しているから協力せよと言う。暇な夜には酒を飲みに行こうと誘う。出張の土産品をわざわざ目立つように机の上に置いていく。白鳥の群れに混ざる一羽のアヒルを見つけて面白がっただけに違うのだが、「僕との付き合いを誤解されるだろうから貴女はS商事の男とは結婚できませんよ。いいんですか？」と私をからかっていた。

そう言う四十男のムツシュは、一回り以上若い知的な女性と結婚したばかり。日本人離れした風貌には反逆児と気障な悪戯つ子が同居し、上司にへつらわない辛辣なジョークや諷刺は、飛びぬけて優秀な人に特有のきらめきを放ちながら、礼節を欠くことはない。仕事の顔は他を牽制するための演技だ。親しい者に見せる顔はジャン・コクトーに心酔する若者さながら。コクトー死去の報に黒いネクタイをキリッと締めて出社したという。日本的な慣行や非合理的な企業社会に徹底して反抗し、卑屈な妥協を許さず、国際人としての教養と外見を重んじ、滅私奉公の会社人間を社畜と呼んで軽蔑した。

若い頃のこんなエピソードを聞いたことがある。

就業規則にある「遅刻届」に、

「靴ひもをうまく結べなかったため」とか、

「深夜に会社の将来を考えていたら眠れなくなったため」などと、好き勝手な理由を書いては提出していた。

ある日、人事担当役員に連日の遅刻を咎められると、

「何か問題がありますか？」と平然と答えた。

「問題がありますかどころではない。君は就業規則に違反しているのだ」と人事担当役員が返すと、

「ちっとも知りませんでした。就業規則のどの条文に反しているのでしょうか。遅刻したら遅刻届を出すように書いてあるので、私は毎日きちんと提出しているのです。むしろ私は表彰されるのかと思っておりました」

ところが仕事は拔群にできたものだから、当時の上司（後の社長）伊藤さんはいつもその主張に耳を傾けた。「夜中まで仕事する部署では無理に朝早く出社しても良い仕事はできないから朝は九時半始まりにしよう」も伊藤さんに支持され、日本初のフレックス制度が誕生した。もともと当人は相変わらず昼出社だったのだが……。

「今の女子社員が求めるのは好条件の結婚退社。S商事が女性に仕事を任せる時代はまだ先でしょう。早く辞めてもつと自分らしく生きなさい」と忠告されていた私は、ムツシュのニューヨーク転勤を機に退社した。時々電話をくれたが、会う機会がないままに月日は流れた。

ある日、人伝てに「ムツシュ入院、面会謝絶」の報せ。

一九三二年に名古屋市で生まれ、東京大学経済学部を卒業し、胃癌のため五十六歳で亡くなった時は常務取締役、当時の六大商社の中で最年少役員だった。

伊藤さんはこんな弔辞を述べた。

「君は若い頃から異彩を放っていました。凡そサラリーマン的でない人間で、自分は会社に時間を売っているのではない、仕事を売っているのだと言って、出社時間も必ずしも正確でなく、いささか私をてこずらせたものですが、君の持つ企画力、折衝力、語学力は拔群で、S商事に鈴木ありとの名声を勝ち取られたのであります」

こうしてムツシュはとびきりのカードを手に入れた。もう誰にも **Disturb** されることはない。

散歩仲間と十七年

村谷 卓一

年の瀬も押し迫った十二月の最終土曜日、ＪＲ京浜東北線・高崎線・宇都宮線さいたま新都心駅の改札前にリュックを背負った六人が集合した。八十五回目となる平成三十年最終の散歩は、途中与野公園を経て二駅南にある北浦和駅を目指す五キロの街歩きだ。

そもそものきっかけは、二年間の名古屋での单身生活でたるみ切った身体を鍛えなおすため、気の合う会社仲間と週末ウォーキングを開始したことだった。第一回は平成十四年三月三十一日の大山登山であり、以来約十七年間、旅行日以外はほぼ毎週、日帰りで続けている。

最初の五年間は、土曜日にもっぱら近郊の里山歩きをしていたが、定年を機に火曜日の街中散歩を追加し、週二回に増やした。その後メンバーの加齢に伴い、山歩きは正月・桜・紅葉の年三回の高尾山をのぞき次第に減少

し、今や街歩きオンリーになってしまった。

午前十時半に指定された駅の待ち合わせ場所に集合、一時間歩き、公園で一時間の昼食休憩、さらに一時間歩き、最後はゴールの駅周辺の食堂で一時間の反省会というのが、近ごろの標準的な街歩きのパターンである。

散歩の行く先は、電鉄会社や地方公共団体のＨＰや同好の士のレポートなどを参考に選定し、毎月後半に翌月分を一括してメールで送信している。さらに散歩を行った翌日には、写真とレポートを必ず配信する。メール登録メンバーは約七十人、実際の参加者数は平均して七、八人と一割程度。参加はしないが写真とレポートは大変楽しみにしているという読者会員が大半である。

日帰りながらもこれまでの実績では、北は足利学校、南は湯河原梅林、西は大菩薩峠、東は船橋大神宮まで足を伸ばしている。

まだメンバーが若かった十数年前には、標高千メートルを超す御前山なども踏破している。

これまで長続きしている理由の一つは、事前の出欠を取らず、途中からの参加や中途での脱落も自由という手

軽さのためだろう。

また、平日でも集合時間がラッシュアワーにかからないので、リュック姿でも気兼ねなしに電車に乗れるという利点もある。

実際に足で歩くことで普段はあまり立ち寄る機会がない寺社や公園などを訪れて、歴史や文化、木々や草花に接することもできる。

週二回、亭主が必ず半日間留守にするため、愛妻から歓迎されていて、おつまみの差し入れがある家庭も少ない。

参加者の最大の楽しみは、昼休みと打ち上げの二回、公園と食堂で酒を酌み交わしながら森羅万象おしゃべりタイムだ。なかでも特に力を入れているのは、バーナーと材料を持参してその場で調理をして過ごす昼休み。夏場以外は、鍋・燗酒・焼き物と三台のバーナーが同時に活躍する。暑い時期にはクーラーボックスで持参する氷が不可欠だ。持ち寄った各種のつまみには到来物や旅の土産物なども度々登場し、広いシートに一度に並べきれないことも少なくない。

少し残念なことに当初の目的であったダイエットは、山歩きから街歩きに転向して以降は必ずしも効果があつたとはいえないようだ。ただ、行程の途中にある寺社には必ず参拝しているご利益なのか、常連参加者は全員、今日まで大病もせずに健康を維持できている。

午後一時半に北浦和駅に到着した。東口を出たすぐ先の「目利きの銀次」に入店、追加参加者二人を加えた八人で、盛大な忘年会を行ってから散会した。

年明けの四日には、六人で恒例の高尾山ハイキングを行った。稲荷山コースを経て富士見台園地で昼食、金沢の純米大吟醸で新春を寿ぐ。安房特産のクジラのたれ焼きや、寄せ鍋など正月にふさわしい豪華なつまみの数々を熱燗とともに味わった。

無事に下山し、定番の「たまの里」で巨大な海鮮かき揚げプラス芋焼酎で打ち上げた。

十八年目も順調にスタートした。

朝の顔

八木 信男

「おい止まれ」

「危ないやろ、死にたいんか」

後から中年の男が叫んでいる

私は赤信号を無視して渡っていた

この信号は住民のほとんどが無視している

夜の十時 質の悪い酔っぱらいにつかまったか

こういうときは無視に限る

青信号になり男は私に追いつき、横に並んだ

「危ないで兄ちゃん 信号無視したら死ぬで」

六十過ぎの私を兄ちゃんと呼ぶその男は

私と同世代だった

どうしてこんな目にあうのか

私は手についたゴミを振り払うように

「ほっといてくれますか」

「死んでもええねん」

私は吐き捨てるように男に言った

「死んでもええなんて可哀想な奴やなあ」

「死んだらあかんで」と男はいう

「あんたには関係ないやろ」

再び私は吐き捨てるように男に言った

男を無視して歩き続け次の信号に出くわした

赤信号だった

この信号も住民のほとんどが無視しているが

この状況なので立ち止まった

すると反対側から信号を無視して渡ろうとする

二人連れが見えた

男は二人連れに向かって

「危ないから信号を守れ」と叫んだ

そして、躊躇している二人連れの後にいた女が叫んだ

「かまへん！ かまへん！ いま渡ってしまい！」

やがて信号は青になり男はどこかへ消えていった

無事家に着いたのだが、あの男のことが気になった

愛する子供を交通事故で亡くしたのか

それとも誰かを車ではねた加害者か

そういう体験であの男はおかしくなってしまった？

「死んでもええなんて 可哀想な奴やなあ」

私は、いままでも誰からも言われたことがないセリフに新鮮さを感じた

無関心 無表情があふれる街中で、あいつは私に

「可哀想だ」と言った最初で最後の人物だ

それからしばらくの間

あの信号を通るとき

あいつが来ないかと不安だった

あいつのことをすっかり忘れていた頃

早朝の駅であいつを見つけた

グレーのスーツを着て、遠くを見つめながら

無表情で立っている

あいつの顔はホームに立っている他の客と同じ

朝の顔だ

「あのときはどうも……」

そう心の中でつぶやいたとたん

小豆色の電車がやってきて、ダダダダと乱暴な音を

たて、私の心を粉砕した

私はあいつをやり過ごし、さらに前の車両から電車に

乗り込み、朝の顔を纏ってつり革を握った

引越し騒動記

矢澤 正二

以前の家は、東京の郊外にあった。都心の会社まで一時間四十分かかり、かなりの距離がある。そこへ子供たちの進学により家族三人が都心に通うことになった。そこで郊外から都心に近い今の家に引越してきた。早二十一年が過ぎ子供たちは巣立っていった。私たちも当然のことながら年老いてきた。

実は私たち夫婦は、健康に問題を抱えた身である。

これから先、お互い一人になったときの生活には大きな不安がある。戸建の階段や雪かき等近年苦になってきている。

生活の質を落とさず快適な日常を送りたい。そして終の住み家は自分自身が選んだ場所にしたい。

私が二十年間住み続けた家を引越そうと思ひ立ったのは、これを第一に考えたからであった。つまり転ばぬ先の杖である。私たちは転勤を含め七回も引越しをしてき

た。これが最後の引越しになる。

そのような思いを巡らせていた矢先、新聞のチラシでサ高住（サービス付高齢者住宅）併設のマンションが目にとまった。これだ、正にこのような住まいを探していたのだ。そこは現在の生活圏内にあり環境の変化はなく、とても気に入っている街である。生活面での不安はない。

しかし資金面ではどうであろうか。兄弟、友人、知人、銀行等多くの人に相談した。我が家も度々の転居で、財布の中身は底をつきかけていた。引越し貧乏とはよくぞ言ったものである。

そのような中、やはり妻は再発してしまった。困った。何度も止めようとも考えた。そして決断した。希望をもって前に進もうと。

しかし、その道のりは想像以上に厳しいものであった。
困ったその一 家の売却

これは本当に大変だった。この家を買った二十年前、ITバブルの真ったただ中で、そのときの購入価格が頭に

こびりついており、不動産屋の算出した価格には嘔然とさせられた。しかしこの価格でもなかなか買手がつかない。思い切って価格をドーンと下げても買手なし。どんなにきれいに使っていても築二十年というのが嫌われたようだ。

我が街も老人ばかりで「老人ストリート」と呼ばれ、売り家が目立つ。人口減少時代における空き家問題、住宅過剰社会を身をもって体験した。

困ったその二 家財の処分

大半のものは処分した。特に処分に困ったのは二階にある大型家具で、入居時に窓から入れたものである。そこで老夫婦は金槌とバールで分解に成功した。後は、分解した部材を一階に降ろし粗大ゴミで出すだけである。

嫁入り道具も哀れ粗大ゴミと化し葬り去られた。

雛人形は老人ホームに寄贈。福祉施設への無償提供等なるべく有効活用を心がけたが、これも一苦勞であった。

困ったその三 思い出の品々

古い手紙、子供の作品、中でも古い写真には難儀した。分厚いアルバムが二十冊以上ある。思い出が募り、その

度に手が止まる。こうして写真の整理は延々と続き新居への持越しとなった。

そこで次の教訓であった。

教訓その一 健康であること

夫婦共に健康であること。二人が健康であったなら、こんなに苦勞して引越しする必要はなかった（しかしこれがなくとも、いずれ問題に突き当たる）。

教訓その二 物はなるべく少なく

身の丈に合わない高級品、し好品は将来使うだろうと思つて持ち続けても結局捨てるか、二束三文で手放すことになる。

教訓その三 決断は早い時期に

家、家財の処分、新居探し、いずれも老人には辛いものである。体力・気力の衰えないうちに決断することが肝要である。

さてさて、この決断が老人破たんとならないことを祈るばかりである。

落研 嘸し

山縣 正靖

落語研究会 通称「落研」はこの大学にもある、おそらくはこの地区にもある国民的な文芸組織です。

当クラブでは上智大落研OG三春さんのお陰で新年会に立川ぜん馬さんはじめ一流の嘸家をお招きして教えて頂いた結果、耳年増の落研が非公式ながら出来上がりつつあります。

ペン川柳は昨年十月に明迷さんこと八木さんのお世話で大阪の奥座敷・箕面で合宿を行いました。

ここからは大阪、万博跡、神戸、おそらくは鴨越の坂落としから屋島まで一望できる景勝の地です。平家物語の時代を偲びつつ川柳の一夜を過ごした翌日、明迷さんのお誘いで上方落語の絵本山天満天神の繁昌亭に行く事になり、急遽ペン落研が結成されて上方落語を聞くことになりました。

天満天神は学問の神様をお祀りする門前町もある立派

なお社です。門前町の名物の一つが「すべらんうどん」のうどん屋さんで、これを食べると試験にすべらない、落ちないとか。

(駄句) 落研がすべらんうどんはこりや如何に

お腹が落ち着いたところではいよいよ繁昌亭に乗込む段となりましたが、まず眼をひくのは寄席の前面の無数の提灯です。寄席の天井も提灯で埋め尽くされている。聞くところによるとこの繁昌亭を建てたとき地元満の方々から無数のご寄進があり、その御名を描いた提灯を下げる事にしたのだそうです。洒落れた落ちで場内が盛上ると提灯も揺れるというご趣向か。

緞帳もこれまた豪華

な天満船乗り込みの図で、水の都難波の心意気が表れています。

寄席ではご老体から壮年ばりばりまでの嘸家の落語を堪能しました。なんでも上方落語



天満 繁昌亭 船乗り



は二四〇人の大所帯で、
 ここ繁昌亭に出られる
 のは中でも名人、上手
 といわれる噺家さんだ
 そうです。

上方落語と江戸落語
 は何か違うのか。これ
 は落研の課題でしょう
 が、小生には、上方は

商いの都らしくこつてりした味が特徴。江戸は宵越しの
 銭は持たない気つぶからか「芝浜」や新年会のせん馬師
 匠の「井戸の茶碗」のような爽やかな題目が目立ちます。
 とこで落語は文学か、演劇か。そんな野暮な詮索は
 ご無用で、とにかく落語では一人の噺家が熊さん、八っ
 さん、ご隠居など四、五人の人物を話し分ける。

噺のねたも時節の話をしている間にいつの間にか本筋
 に乗せられている、笑い転げているうちにストンと落と
 されて落ちになる、機知に富んだ、世界でも例のない芸
 ではないでしょうか。

もうひとつ、噺家さんは高座の上で座布団に正座で話
 すのですが、あれはお客さんと同じ目線で心を通わせる
 秘法であつて、またお酒を飲む、そばをすする、おどろ
 いて伸びあがる、などの所作も正座だからこそできるの
 だそうです。いや違うよ。あれは足をしびらせない奥の
 手なの。(下手な落ち?)

挿絵はいずれも作者



ローマの壁巡り

松浦 俊博

ローマの中央駅であるテルミニ駅前に古い壁の一部があり、周りは高い鉄柵で囲まれている。その場所は日本でいえば東京駅丸の内口に当たる。壁はいかにも強固だが、最初に見た時は「何？」としか感じなかった。だが、これは紀元前六世紀の国王、セルウィウスの名に由来する壁の一部なのである。建築は王政末期から始まったが、現存する壁の多くは共和政になってからのものである。この時期のローマはイタリア半島の異民族と戦いながら領土を広げ、さらにはアッピア街道などの軍道を建設していた。壁は七つの丘を囲むように北東から南西にのびており、紀元前三世紀にカルタゴの名将ハンニバルに攻められた危機においてもローマを守ったのである。

現在のローマ市を取り巻くようにそびえているのがアウレリアヌスの壁である。アウレリアヌスは三世紀後半の軍人皇帝の一人である。その時代は五十年間に二六人

もの皇帝が交代するくらい政情が不安定で、しかも、ゲルマン民族の侵入が激しくなりローマを守る壁の建設が急がれた。アウレリアヌスは暗殺されるまでの四年間に、全長19 kmの強固な壁を完成させた。

昨年の正月にこれを一周してみた。トラムやバスにも乗ったが、できるだけ徒歩で回った。壁の三分の一以上は以前に見ていたが、改めて注目すると違ったことも見えてきた。

壁の高さは8 m以上、厚さは約4 mで、30 mごとに四角い見張り用の塔がある。壁にはローマから放射状に広がる街道に通じる十八個の門があり、そのうち南側の二つが博物館になっている。アッピア街道への出口にあるサンセバステイアーノ門と壁博物館、オステイエンセ街道への出口にあるサンパオロ門と街道博物館である。管理人がいて訪れる人を出迎えてくれる。サンパオロ門は、共和政時代にコンスルを務めたガイウス・ケステイウスの墓のピラミッドと隣接してつながっている。壁の建設を急いだことと財政難のために、いくつかの場所では既

存の建築物を壁の一部に利用したのだ。また、西側のテベレ川に面する部分のうち橋がかかっていない北側の部分には壁は無い。

その他の門で印象深いものとしては、東側にありサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂に向かう道に続いているマッジョーレ門がある。トラムの乗換駅があるので何度もち寄ったが、ここは水道橋を利用したものだ。北東側にあり、ミケランジェロ制作のピア門は、十九世紀のイタリア統一の際に、ローマを占領していたフランス軍を追い出すためにイタリア兵が門の隣の壁を壊して突入したことも有名である。門の外には彼らを讀えてムッソリーニの命令で建てられた記念碑がある。

北側にあるポポロ門は、アドリア海に面したりミニに向かうフラミニア街道に続いている。北からローマにやって来た商人や旅行者がこの門で通行税を払っていた様子が想像できる。テベレ川を挟んで対岸にあるトラステヴェレ地区のジャンニコの丘にあるガリバルディの騎馬像も壁の内側にある。丘のふもとにあるポルテーゼ門では安物の市場が開かれていた。

四世紀にコンスタンティヌス帝が公認するまでは、キリスト教はローマ帝国にとって守るものではなかった。現在ローマにある四大聖堂のうち二つはアウレリアヌスの壁の外にある。聖パウロ聖堂は「フォーリレムーラ」(壁の外)の名称が付されている。また、聖ペテロ聖堂(ヴァチカン)はそれを一周する壁が独自に建設されている。ヴァチカン美術館に向う人の行列を左に見て、小雨の中を壁沿いに歩きはじめた。壁に沿った道の反対側には普通の民家が並ぶ。何と御利益の多いところに住んでいるのだろう。イタリア戦争時にクレメンス七世がサンタンジェロ城に避難するのに使った壁バセット・デイ・ボルゴもいつもより念入りに眺めた。

国に勢いがあり拡大している時には外敵が迫ることがないので壁は不要である。それが必要になるのは国が弱ってきたときである。米国が貿易で壁を作り、メキシコとの国境に実際の壁を建設するのは、その国力が弱ってきた証拠のように思える。

七十五歳のつれづれ

斉藤 征雄

今年まもなく七十五歳を迎える。いよいよ後期高齢者、真正正銘の老人のお墨付きをいただくことになる。

七十五歳の平均余命は十二年ほど、健康寿命となればいいと二十年であろうか。いや、それはちよつと甘いかもしれない。その前にいつ地雷を踏むかわからないから不測の事態も念頭に置く必要があるそうだ。

そのように考えると、自らの死が遠い未来のことではないのが実感として迫ってくる。

人間いずれば死ぬ。この単純な事実には人々懊悩して、だれしも心が波立ち乱れるのである。

* * *

仏教では、人間の存在は五つの構成要素（五蘊^{ごうん}）から成るとする。肉体を「色^{しき}」といい、心は、外界からの刺激に対する反応から「受^{じゆ}（外界の刺激を受感する感覚）」、「想^{そう}（感受したものを心に描く表象）」、「行^{ぎやう}（それによつ

て心が動機づけられる意志）」、「識^{しき}（それらをつかさどる意識の総称）」の四つに分類する。

般若心経では「色即是空」すなわち肉体は空であり、「受想行識 亦復如是^{やくふにょぜ}」つまり心も同じく空だという。

そして「五蘊皆空（人間存在はすべて空）」を観じたときに、人は死を含めた一切の苦厄を克服できると説く。これが「般若波羅蜜多^{はんにやはらみだ}（智慧の完成）」すなわち悟りの境地である。

空とは何か。

空は無とは異なる概念である。無は存在しないことであり存在そのものを否定する意味だが、空は存在を否定するのではなく、存在するものが不変の実体を持たないということを意味する。

人間存在も空であり、永久に存続し続ける絶対的なものではなく、いずれは消滅する仮の姿でしかないという（諸行無常、諸法無我）。

そのことを観ずれば、心を煩惱の拘束から解き放ち、悟りの世界にはいることが可能になるというのである。

しかし仏教の哲理を少々学んだところで、所詮一知半解の知識でしかない。ましてや凡夫の身で、修行もせず
に悟りの世界に近づけるはずもない。

そうであれば、少々の心の乱れはあったとしても、自然体で「その時」を待つしかない。「雨ふらば降れ風ふかば吹け」だ。それが、わが身に似合っているのではないかと思っている。

* * *

最近、世の中の動きにだんだん遅れている自分に気付く。

AIは無縁の世界だし、スマホは使いこなせそうにな
いから持たない。車の運転もやめた。テレビはニュース
と天気予報以外は、ほとんどが面白くないから見る番組
が限られる。

そんな中ではあるが、政治のことにはそれなりの関心
を持たざるを得ない。

アメリカ、中国、北朝鮮、ロシア、EU、中東、その
他アジア、どこかの地域からも目が離せない。特に各地で
右翼ポピュリズムの勢力が伸長していることには危険を

感じる。民主主義が危機に瀕しているともいわれる。

そして日本はこうした情勢の中でどのようなスタンス
をもつて臨むべきか。

難しい。政治はその時々を取り巻く状況によって変化
するから、絶対的答えはない。しかもその答えは私が生
きている間には結果が出ないだろう。だから、関心は持
ちながらも、テレビのニュース解説者のようにみんなで
論じあう気分にもあまりならない。

* * *

ブッダの悟りの核心は、縁起という言葉で表される。
あらゆる存在は、因という直接の原因と、縁という間接
的な条件が関係しあって生起するものである。原因によ
って結果が起こり、原因が変化すれば結果も変わる。

それはブッダが創り出したものではなく、もともとの
自然の真理である。真理を覆っているものを取り払うこ
とによって、存在があるがままの姿で現れる。あたかも
「柳はみどり、花はくれない」であるように。

あらゆることを、そういう気持ちでみつめたい。

リハビリテーション

川村 邦生

五年前、下肢動脈梗塞の為、壊死した膝下の筋肉をバツサリ削られた。足首の切断だけは免れたが、約四カ月間動かさなかった足関節が固まり、いまだにリハビリを続けている。

一旦固まったところを回復させることは非常に難しいが、少しずつ動くようになった。リハビリ効果だ。

人間の体は完全に壊れていない限り、その周りが助けて補完する働きがなされると聞いた。それにはリハビリの必要があると。

前記の病氣事情もあり仕事から退いていたが、二年前突然復帰せざるを得なくなり、ペンを執る時間的そして気持ちの余裕が無くなった。月に二回程800字エッセイで頭を捻っていたペンクラブ活動を休止したまま、いまだに続いている。

一旦止まった執筆意欲はいざ再開しようとしても頭が働かず、つつい筆を置いてしまう。

まず書きたい事が浮かばない。それが浮かんでも書き出しが出てこない。まとまらない、まとめられない。

これって、体が動かなくなった症状と同じではないかと思った。執筆にもリハビリが必要だと認識した時に、『悠遊』26号の原稿依頼があった。

同時期に、所属しているゴルフ倶楽部からも、会報用「平成最後の年男、新年エッセイ」の執筆を依頼された。倶楽部は開場六十年の還暦、OBペンクラブは半還暦三十年、私は六回目の年男、そして平成最後の新年だ。

こういうお目出度い節目の時には是非参加すべきと考え、リハビリ不十分で拙い文章となったが、両方に投稿した。

運動そして執筆、共に早く復帰したいと思う。そのためにもリハビリだ。

創作短編



油彩 福本 多佳子

棚に上げて

馬場 真寿美

——ああ、熱いお茶が飲みたい。

と、昭平は思った。玄関の三和土で靴を脱ぎ棄てながら、大きく肩で息を吐く。出先から戻ったばかりのその足で、田邊昭平は真っ直ぐ台所に向かうと、古ぼけたやかに蛇口から水を注ぎコンロにのせた。

そして——、精も魂も尽き果てたようにダイニングの椅子にぐったりと沈み込んだ。



「おーい、お茶をくれ」

そう吐き捨てるように言うだけで、今までなら湯呑み茶碗がすいと目の前に差し出されていたはずだ。だが、長年連れ添った妻の茂子が死んだ今、お茶が飲みたければ自分で淹れるほかはない。

——茂子……。

生前から、それほど仲の良い夫婦だったわけではない。

些細な諍い事なら数えきれないほどあった。でも、それはどこの夫婦だって同じようなものではないだろうか。生まれも育ちも、価値観すら違う他人同士が一緒に暮らしていくのが結婚というもののなのだから……。

はた目には、昭平と茂子だって、ごく普通の仲の良い夫婦と映っていたはずである。

だが——、

茂子は昭平が望んで貰った嫁ではなかった。田邊家の遠い親戚筋にあたる娘で、昭平とはひと回り以上も歳が離れている。先祖代々の持ち家があるとはいえ、年老いた両親を抱え四十近くまで女性に縁がなかった昭平を氣遣って、お節介な親族一同が強引に取りまとめた縁談だった。当時二十三歳の茂子は、色白ではあっても目は糸のように細く、身体はがっちりと太りじしで、はつきり言って不器量な部類に入る娘だった。

（このまま年を経たところで、嫁に欲しいと言ってくれる奇特な男が出てくることはまずあるまい）と、口に出さずとも親戚の人間は皆思っていたはずだ。

けれども、見合いの席で緊張して恥じらう茂子の様子

は、やはり若いだけに初々しく、昭平が受けた印象はそう悪いものではなかった。

それに、

『美人は三日で飽きるが、ブスは三日で慣れるというじゃないか。』馬には乗ってみよ、人には添うてみよ』という諺だつてあるぞ。一緒に暮していれば、いずれ愛情が湧いてくることもあるだろうさ。結婚とはそういうものだ』

と、身内からも説得され、そんな周囲の思惑に押し切られるように、昭平はこの結婚を承諾したのだった。

——人生とは所詮こんなもの……。

分かっている、せめて、もう少し好みの容姿の女と所帯を持ちたかった。もつとも、昭平の見てくれだつて女にモテるような上等な代物ではない。背も低ければ髪もとうに地肌が透けていて、おまけに撫で肩の貧弱な体つきだ。それでも、男とは身勝手な生き物で、自分のことは棚に上げて、思い描いていた結婚への夢を壊されてしまったような気がして、昭平は恨めしかった。

そんな事情のもとで結婚した二人だったが、世間一般

の夫婦同様、家を構え子どもを産み育ててきた。

夫婦として暮らすうちに、昭平にも次第に茂子の美点が見えてきた。何よりも、茂子は働き者だった。何事にも手を抜かず一生懸命だったし、子どもたちにも愛情深かった。昭平の年老いた両親の介護も、一切の不満を口にすることもなく、もくもくと勤め上げた茂子に昭平は頭が上がらない。このままゆつくりと年老いていけば、二人の人生はまずまず幸せなものだったろう。

しかし、先が見えないのが人生である。

両親を看取り、就職した長男が家を出て、後に残った娘も大学生活を楽しむことに忙しく家にいる時間が少なくなつた頃、二人にとって本当の試練が姿を変えて、ヒタヒタと音も立てず近づいてきていることを、この時の昭平はまだ知らずにいた。夫婦にとって、共通の喜びであり目的だった子どもたちが巣立った後、空の巣症候群に陥った茂子がまず嵌つたのが、『韓国ドラマ』である。どの番組も限なくビデオに撮つて、茂子は毎晩遅くまで一人でテレビを観ているようになった。

子どもたちはすでに親の手を離れ、思い／＼の人生を

歩み始めている。一つ屋根の下で暮らしていても、昭平と茂子の間には会話もなければ視線が合うことすらない。

——私は、もう誰からも必要とされていないのだ。

茂子はパートで稼いだお金をすべて投じ、お気に入りタレントを追いかけて韓国に足を延ばしたり、コンサートに出かけ夜遅くまで興じたりするようになった。ドラマの中のハンサムな男性に一途に愛される主人公に自分を投影することで、胸の中にぽっかりと空いた穴が少しばかり満たされるような気がするのだ。

妻のこれらの行動を、昭平は呆れながらも見て見ぬふりをしていた。いや、実際のところ、妻が何に夢中になっているかなんて全く興味がなかったのだ。

茂子は、今まで通り家事はきちんとかなしていたし、料理に手を抜くということもなかった。むしろ、食糧というものに、怖ろしいほどの執着とこだわりを持ち、どこぞで売っているもののおいしいと聞けば、並んででも買ってきたし、食べておいしいと思ったものは、家でも必ず再現して家族にも食べさせようと試みた。それでいて、茂子の作る料理はこれといって美味しくもなく、

どれも昭平の口には合わないのだった。

茂子はずっと、子どもたちの学校のイベントやらPTAやら交友関係の広い女だったが、それらがすべて無くなった今、茂子には喋り相手が誰一人いなかった。そのせいもあって、「喋りたい」「聞いてもらいたい」「自分の存在を認めてほしい」という欲求は増す一方で、いったん喋り始めると止まらなかった。ひと度喋り出せば、相手に相槌を打つのも許さないほどに早口で話し続けた。相手が自分の話に興味を示さない場合は、さらに大きく声を張り上げる。

娘の彩香は、実の娘だけに遠慮も容赦もなく、

「お母さん、その話もう聞いた。もう、何回同じこと喋ってるの！」

と、呆れたように肩を竦める。

「お父さんも部屋に閉じ籠ってばかりいないで、少しはお母さんの話し相手になってあげたらどう？ お母さん、きつと寂しいのよ」

娘から諭されても、昭平は音楽を聴くふりをしてヘッドフォンを頭からかぶり、自室に閉じ籠っているのが常

だった。年齢的に、更年期に差しかかっていることもあり、茂子の気分は近頃ではいつも不安定で、口調もきつく攻撃的だ。昭平にとって、独りで好きな音楽を聴きながら読書をしている時間は至福の時である。もともと無口なタイプで、トラブルが何よりも嫌いだ。そんな昭平にとって、今の茂子は何よりも苦手な相手で、顔を見るのも苦痛だった。茂子の肉厚な唇は、何か不満を吐き出すか、さもなければ食べるためにせわしなく動き続ける。それは独立した小動物のように見えるときさえあって、昭平は意識して妻の顔から目を背けるようになった。

昭平には茂子の言いたいことは分かっていた。恐らく妻はこう言いたいのだ。

「私はあなたのご両親の介護に十年もの歳月を割いてきたのよ。これからの人生は、少しぐらい自由にさせてもらっても罰は当たらないと思うわ。誰のお蔭で安楽な老後が過ごせると思っているのよ？」

妻に感謝していないわけではない。だが、それなら、「おまえは誰のお蔭で安定した生活を送れてきたと思っ

っているんだ？ 会社でどんな辛いことがあろうと、俺

が誰にもこぼさず必死で耐え忍んできたのは、みんなおまえたち家族のためじゃないか！ 俺の苦勞が分かっているのか？ 俺の両親の介護？ だが、その両親がこの家を残してくれたおかげで、俺たちはローンも抱えずに住めているんじゃないのか？」

昭平は大声で叫びたかった。

やかんがカタカタと踊り始めた。ようやく湯が沸いたのだ。いつかどこかで聞いた言葉を、昭平はゆっくり思い出していた。

『女の怒りは、一滴一滴コップに雫が落ちて溜まっていくさまに似ている。そうして、やがて一杯になったコップは、ある時、ふいに堪えきれずに溢れだすのだ』

では、男の怒りはどうだ？ 男の怒りは、ふつふつと湯が沸いていく様子に似てはいないだろうか？

茂子が友人と電話で話している内容を聞いてしまったあの日、昭平の怒りは沸点に達してしまっただけかもしれない。

『私の結婚生活の大半は介護生活よ。夫の両親の介護

をしてきて、夫よりひと回り以上も若い私は、きっと最後はあの人の介護をさせられるのよ。あーあ、あなたはいいわね。離婚して、悠々自適の生活なんだもの。本当に羨ましいわ』

『……そうよね。私だって、絶対、夫と同じお墓になんて入りたくない』

友人との無駄話に調子を合わせていただけかもしれない。だが、そんな茂子の会話の中の何気ない一言、何気ないトーンが、昭平の心を深くえぐり、傷つけていたことに茂子は気づいていなかったに違いない。

「あなた、最近呆けてきたんじゃない？ もおー、それだけは勘弁してよ」

六十歳を越え、今や夫に対して遠慮も慎しみもすっかり失くなった茂子が、夫婦共に認知症を患って死んでいった昭平の両親を皮肉ってそう言い放つ。

（同じ墓に入りたくないのは、おまえだけじゃない）

無口で穏やかな昭平は心の中では思っている、それを口にすることはなかった。

しかし、人生とはつくづく分からないものである。

意外にも、あっけなく先に人生の幕を下ろしたのは、昭平よりもひと回り以上若い茂子の方だった。発見したのは娘の彩香である。珍しくその日、早く帰宅した彼女は、両手で心臓を抑えるような格好で、台所の床に冷たく横たわっている母親を目にしたのだった。

通夜も葬式も無事に終えて、昭平は茂子の遺骨を持って山手線に乗り込んだ。遺骨の入った四角い風呂敷包みを網棚に載せて、もう何周回ったことだろうか？

昭平はまだ決めかねていた。なかなか決心がつかなかった。それでもなお、しばらくは網棚をじっと睨みつけるように見上げていたが……。

ようやく……心が定まった。

（もし、誰かに見咎められることがあっても、そうだが、その時はこう言い訳すればいいじゃないか！）

「申し訳ありません。近頃は物忘れがひどくて……」と。

だって、そうだろう？ 俺だっておまえと同じ墓には、死んだって入りたくないのだから……。

和泉式部に会いに行こ！

内藤 真理子

塔子はこの一週間、Kテレビ局の資料室に籠って、薄型パネルの画面に映し出された『和泉式部日記』関連の本に見入っている。

「塔子さん、随分熱心だね。今度は古典ものをやるの？」資料室長の加納が、好々爺といった温和な顔で横から画面を覗いた。塔子は前のめりになっていた背中を椅子の背もたれにあずけ、厚化粧で倍の大きさになった目を加納の方に向け、顔を崩して嬉しそうに笑った。彼女はKテレビの番組企画部に所属している。見かけによらず資料室の常連で、そのギャップも面白くて定年間際の加納は孫感覚で、可愛がっている。

「和泉式部、最高っすよ。十二単なんか着てると貞淑そうに見えるけどんでもない！ 人間の感情なんて何千年経っても変わるわけないっす」熱弁する塔子に、

「ほう、塔子女史の人生観かな？」。加納はますます目

を細める。

塔子は『和泉式部日記』の出だしの部分をパネルに映し出した。

和泉式部が、亡き為尊親王のことを悲しく偲んでぼんやり外を眺めていると、垣根のあたりに故宮の文使いをしていた小舎人童が中を伺っている。懐かしく思っ侍女に近況を聞かせると、今は亡き為尊親王の弟君の帥の宮（敦道親王）にお世話になっているそうだ。その宮から言付かったと言っ、花橘を取り出し「和泉式部は、これを見てどうお思いになるか聞いておいで」と言われたそうだ。

式部はそれを見て、さつき待つ花橘の香をかげば 昔の人の袖の香ぞする」という有名な古歌を思い出し、亡き宮様のことを考えていると、侍女が、童に何と言伝てをしたらいかと催促するので

「かほる香によそふるよりはとぎす聞かはやおなじ声やしたると」

と式部は紙に書いた。

塔子はカーソルで文字を追いながら、加納の前で読み

上げた。

「ね、室長。和泉式部は自分のもとに通っていた為尊親王が亡くなったので思い出に浸っているんですよ。」

そこに、弟君の帥の宮が、ご機嫌伺いで童に花橘を持たせ、これを見てどう思うか聞いて来いと使いによこす。これって、弟君が、花橘は兄宮と同じ香りがして、亡き宮を偲ぶよすがになるのでは、と見舞っているのですよね。それなのに彼女の返歌は、花橘の香で、亡き方を偲ぶよりも、ほととぎすの鳴き声のように、兄弟二人が同じ声なのか、あなたにしかに会って聞いてみたい、って書いて童に持たせたんですよ。それって、亡き兄を偲んでください、と言ってきたのに、お兄さんに似ているあなたの声を直に聞きたいわ、と返信したんでしょう。大胆だと思いませんか？」

「そうだね。随分婀娜っぽいね。それをドラマにするの？」

「私、彼女の心理に興味津々なの。だから直に彼女に会ってインタビューしたいと思って……、企画書と一緒に出張願を出して、もうOKを貰っちゃいました」

塔子のいる世界は、西暦二千三百年。大抵の事務処理はタブレットで済むが、人の感情だけはそうはいかない。部長との交渉は大変だった。何しろ、塔子は脂の乗った三〇歳。服装は奇抜でど派手な化粧。飛んでる見かけの通り、ひとたびドラマのことになると、奇想天外、変幻自在、この世界では頼りにされている。タイムスリップをして帰って来られなかったら困る！と、部長のGOサインはなかなか出なかったが、見た目の迫力にもの言わせて、渋々ながらのOKを貰ったのだった。

日本のステーションからは、毎日、宇宙ステーションや火星・月に行くロケットが出ている。同じ敷地内には、タイムトラベル用のステーションも出来ているが、こちらはまだ歴史が浅く、時折帰って来ない人もいるという。行く場所も歴史検証が済んだピンポイントに限られていて、帰って来た人の話を聞くと、かなり正確に行きたい時代や場所に行けるそうだ。

塔子は早速、端末を駆使し、平安時代にすでに和泉式部日記を世に出した晩年の彼女の住いをインプットして

予約を入れた。

平安時代のこと、飛行場があるわけではないが、カプセルが止まった所で目を覚まし外に出てみると、都のはずれにその屋敷はあった。

塔子はタイムトラベルの説明書とともに届いた棒状のものを取り出した。これは全世界共通の「大風呂敷」という名のバリアーである。これをかぶせると、過去の人と同じ土俵で話が出来ると書いてあった。行きついた目的の場所全体を、時空の襞の中に誘い込み、過去でも現在でもない違う次元にバリアーを張ることが出来る。早速、その棒を相撲取りが塩をまく要領で、左下から右上に向かって、高見盛と同じ位豪快に振ってみた。空気が揺れたような気がしたが、景色に変わりはない。恐る恐る目の前の屋敷の入り口に入ってみた。人の気配がする。塔子はあらかじめ用意して来た短冊を持ち、入り口で声をかけて、出てきた女に、和泉式部さまにこれを渡してもらいたい、と差し出した。それには、

『行く道の先に在りたる我ながらふり返りきて愛でた

き花よ』と詠んである。侍女は、心得ているようで、短冊を手に取り奥に入って行った。

しばらく待つと、先ほどの侍女が妻戸から邸の中に案内してくれた。そこに和泉式部本人がいて、

「花は疾うに枯れてしまいました、時空をこえておいで下さったとお見受けします。花の盛りのことなど、今を盛りのお方に、なんなりとお話し致しますよう」

年は四十を過ぎているのだろうが、扇で隠した小さな顔の周りの髪にはすこし白いものが混じってはいるものの、艶やかで、小桂を纏った姿は活き活きとして美しかった。

未来からの客が度々来ているような雰囲気なので、聞いてみると、男女を問わず、もうかれこれ十人は訪ねて来たそうだった。

式部は顔を隠した扇を下し、塔子のアイシャドーとアイラインを塗りたくった顔を見ると、茶目つ気たつぷりに「大きなお目々だこと。さっきの人は、口の中が真っ黒だったけど、ホッホッホ」と笑った。きつと江戸時代の奥方でも迷い込んだのだろう。式部は、訪ねて来た人

に会うのを楽しんでいるようだ。

「和泉式部日記は、式部と敦道親王(帥の宮)との熱烈な恋愛物語ですよ。三人称で書かれています……」

塔子が問うと、

「ええ、あれは宮様との恋が成就するまでの十か月の間のことを、歌のやりとりで書いたのよ。

恋のはじまりは宮様の訪れ。はじめは妻戸の外と内とお話しをしていて、それから中に入って一夜を共に過ごし……後朝の歌になったのだったわ」

たしか、和泉式部は、夫が和泉の守になったことから、〈歌人、和泉式部〉と呼ばれるようになったのではなかったかしら。だから、不仲ではあるがれっきとした夫が居た。塔子は頭の中で資料を慌たしく紐解いた。

「三人称で書かれているのは、創造の産物ってことでしょいか?」

「あら、創造なんかではないわよ」

「あの、ではご評判通りの恋多き女と思って良いのでしょうか?」恐る恐る聞いてみた。

「だって、歌人ですもの。色々な男たちとの歌のやり

とりはあたりまえでしょう。秀でた歌人は恋をしなくては……。恋をするから歌を詠み、歌を詠みたいから恋をするのよ。でも、敦道親王に会ってからは、ただもう恋だけ……フツッ!」

「和泉式部日記で、熱烈な恋をする場面、私、ドキドキしちゃいました」

塔子が言う、式部は嬉しそうに、堰を切ったように話し出した。

「敦道親王には偉そうな北の方(妻)がいて、そのとりまきが、私の行状を、あることないこと告げ口するのよ。その度に揺れ動く宮の心を何とかしたくて、でもなかなか会えないの。それで歌のやり取りばかりしているうちに、私の歌が功を奏して、宮も私に逢いたい気持ちになったみたいなのよ。

ある夜、車で来て、家に入る訳には行かないからって、私を車に無理に乗せると、宮の住んでいる宮殿の誰も来ないような所に車を寄せて私を下ろし

『あなたの家だと、誰か通ってくる人があるかもしれないから、これからは誰にも見られないここで会うこと

にしましょう』なんて……。嫌なことを言うでしょう。

それから物語などして、明るくなったら、私だけ車に乗せて、宮はひと目があるからって……。私は帰る道すがら、何て不思議な逢瀬だったの！ 他人はどう思うかしらって思ったのよ」

「それって、情熱的っていうのか、乱暴っていうのか、大胆ですね」。塔子は思わず口をはさんだ。人目を憚んでこそそと！ やっぱり、時代は変わっても恋人同士の気持ちは同じなのかしら……。

「そんなに情熱的なことから、宮様はせめて送って下さってもいいのに、式部さまは怒らなかつたのですか」

塔子がきくと、

「いやだとは思ったわよ。でも、宮様は魅力的で、会わずにはいられないのよ。それで歌を贈つたの」。

『よひごとに帰しはすともいかでなほあかつき起きを君にせさせじ』 苦しかりけり

家人の目を盗んでやって来たのがあなただだったら、私なら遅く帰すことになっても、朝帰りなどさせないわ！ あんな逢瀬はいやですって。そうしたら宮様から返事が

あつて

『朝露のおくる思ひにくらぶればただに帰らんよひはまされり』

朝が来て、帰って行くあなたを見送る私の寂しさに比べれば、ただ帰ってしまうあなたの方がましではないかですって。思い切つて文句を言つたのに、勝手な事ばかり。それで次の日も車でやってきては『はや、はや』つて、また同じ繰り返しなの」

「情熱的じゃないですか。結局、式部さまの恋は成就したのですよね」

「苦難を乗り越えてね」

「お幸せでしたね」

「幸せは、苦難の間に出来た数々の歌よ」

そう言うのと、扇を手にしてお顔を隠してしまわれた。

「やっぱ和泉式部！ 半端ないじゃん」

塔子が大風呂敷を棒におさめカプセルに乗り込むと、何もわからなくなり、気がついた時には日本のタイムトラベルステーションに着陸していた。

これもDNA？

福本 多佳子

真希は昨年暮れに京都で知り合ったアメリカ人女性から「ミホミュージアムを知ってる？」と訊かれた。

「多分、有名な建築家Dr.Pei設計の美術館。京都からそれほど遠くない山の中にあるはず……滋賀県かな？」

長年気にかかっていたのに、何一つ調べもせずに時が経っていた。その場でスマホ検索してあげた。残念ながら冬期は休館中とあった。アメリカのドキュメンタリー番組に映っていた曇まじりの寒そうな工事現場が浮かんで来た。設計者の顔も話し振りの記憶に残っている。

帰国後しばらくして、九十年代終わりの一年を過ごしたマンハッタンのアパートが懐かしく、ネット検索してみた。そこで初めて設計者があのDr.Peiだと知った。

ルールのピラミッド入り口デザインの建築家である。

ー1999年、東京、ニューヨークー

九十年代後半、転職を考えていた真希は「そうだ、こ

の機会に海外で何か勉強してみようアメリカだな……」
と考え、実行に移した。単なる語学クラスではなく、興味あることを学びたいと考え、マンハッタんに住む大学時代の友人、太田美樹に頼み、話に聞くアートスクールの資料を送ってもらった。ジョージア・オキーフやジャックソン・ポロックら、多くの有名アーティストが学んだ学校だ。学生ビザを取得し、住まい探しの段階で、美樹の友人がロンドン転勤と決まり、当分の間アパートをサブリースするという連絡が入った。全てがスムーズに運んだ。下見に行ってみると、マンハッタン三十丁目というのに、明るいガラス張りの一階ロビーから広い庭へと通じる大胆なデザインが新鮮で気に入った。部屋は五階の大きめのStudio。壁一面がガラス張りで日当たりが良く、生活に必要な家具も揃っていた。入居してみると、最小限の食器や鍋類が残されていて、すぐにも食事の支度が出来ると喜んだが、その日は美樹につき合ってもらい、メイシーデパートのキッチン用品売り場へ向かい、二人分の明るい模様のモーニングカップ、皿、ランチョンマットを新生活記念として買い揃えた。可愛い花

束とデリで選んだ美味しそうな料理を手へ帰宅、美樹持参のワインでニューヨーク生活の第一歩を祝し乾杯した。

翌朝、ドアを開けると右隣のドアから出て来た女性と目が合った。黒い髪に緑がかった目の色がエキゾチックだ。可愛らしい黒いプードルが真希めがけて駆け寄って来た。ひざまずいてなでていると、その女性が「ハーイ、エレンよ。ジーンは貴方のことを気に入ったみたい」と言いつて握手を求めてきた。じゃれつく犬のおかげで、マンハッタンにしては気楽な挨拶から始まり、すぐに打ち解けることが出来た。彼女はカリフォルニア出身の俳優の卵とのこと。大学院に通いながら、将来は演出家を目指しているそうだ。

学校にも慣れ、居心地よさを感じ始めた真希がアパートに戻ると、明るいエレベーターホールでエレンと長身の中年男性が談笑していた。「ハーイ、真希、ジムを知っている？ 七〇一号室に住んでいる科学者」と紹介してくれた。ニコツと笑った彼の目を見て、「うーん、中々ハンサムだけど、目の輝きが何となく……変わっている」というのが初対面の印象だった。「今晚、彼の所で面白

い映画を見せてくれるというから、貴方も参加しない？」とエレンに誘われた。（金曜の夜だし、何の予定も無いし）と考え、八時にと約束した。軽い夕食をすませた後、カマンベールチーズの上に真つ赤な克蘭ベリーとくるみを飾った。「よし、綺麗だ！」その皿を手へ、エレンと一緒に、七〇一号室のベルを押すとプラチナブロンドの女性が二人を優しい笑顔で歓迎してくれた。ニュージャージーに住む医師で、ジムとはニュースクールでのシナリオライティングのクラスで知り合ったとか。奥から柔らかな毛色の犬が顔を出した。「あら、ゴールデンドユードル。本当に綺麗、微妙な色彩で素敵ね」と言いつてエレンが犬を抱きしめた。「真希、知っている？ 最近流行し始めた犬種よ。ゴールデンレトリバーの優しい性格と利発な大型プードルの組み合わせで、人気急上昇中。抱きしめるのは初めてよ」と嬉しそうだ。確かに利口、まさにハンサム犬だ。オーナーのアンにべったりで、アンもとろけそうな笑顔になっている。

リビングルームには大きなスクリーンが用意されていた。ジムは映画好きでテレビ画面だけでは満足せず、壁

にスクリーンを吊るして、プロジェクターで映画を観られるようにしてあった。コーヒーテーブルにはシャンパン、赤白ワインのボトルそれに人気のワカモリーディップにトルティーヤチップス、の皿が置かれてあった。

その夜の映画は不可思議な現象を描いたスピリチュアル短編ドラマだった。アメリカだけでなく、ヨーロッパやアジアの国々、日本の映画もあり、出演者もハリウッド有名映画スターあり、無名俳優ありのバラエティーに富んだものだった。シリアスな内容あり、コミックあり、アニメで彫刻家ジャコメッティを描いている作品もあった。彼らの話題に百パーセントはついていけない真希はもっぱら聞き役となっていたが、この三人のミステリアスな現象への関心の深さだけは十二分に理解できた。映画好きな二人は俳優であり演出家志望のエレンに興味を抱き、時々ワインの集まりに招待しているようだ。二人とも、医学、科学だけでなく、文学にも音楽にも造詣が深い。アルコールが進むにつれ、三人の話題は不可思議な体験話へと移って行った。アルコールで饒舌になったジムはインドでの数々の不思議な体験を披露してくれた。

「若い頃、アメリカでも不思議なことを色々体験したんだ。僕は宇宙人を見た。ニューオリンズで高校の親友と真夏の夜、古い墓場を通りすぎた時なんだ……」

真希は彼が幽霊の話をするのかと思った。が、そこに現れたのは間違いなく宇宙人だったそうだ。

「ちょうどその頃、自分の寝室の片隅が急に明るくなって、目の前に天使が現れた。この話は誰にも言ったことはない。僕はそうした体験を通じ、子供の頃に急にわき上がった疑問、『自分はどこから来たんだ。何故、ここにいるのか?』それを知りたい、極めたいと思ったからすぐには大学進学をせず、色々な仕事につきながら読書三昧の生活を続けた。僕にとって書物は一番の宝物だ。他にも不思議なことがあった。ある日、町を歩いていると不思議な強い光線を見て、それがどこへ差し込んでいるのかを見届けようと歩き続け、ある建物にたどりついた。そこでドアをノックした。出て来た男性に『すみません。おかしいと思われるかもしれませんが、光に導かれてこちらにたどりつきました』そう言うと、その紳士が自分をじっと見つめて丁重な言葉使いで『それは興味

深い。あらためてここへいらつしやい』と言った。帰宅して、その建物について調べてこわくなった。そこは悪魔研究結社のビルだった。二度と近寄らなかつた。普通はこんなこと、誰にも言わない。でも、本当なんだ」

ワインでおぼろげながら、ニューオリンズと聞いた真希は映画「夜明けのヴァンパイヤー」を思い起こした。

「そうか、高温多湿というニューオリンズなら、わからなくもない」とぼんやり考えた。「アメリカとしては歴史ある古い町。不可思議なことが起きる場所として何の不思議もない」そう思いながら、ソファアの背にもたれたまま眠ってしまった。ふと、エレンの笑い声で目がさめた。「あら、眠ってしまったわ、何時かな？」と朦朧とした頭で思った。三人ともまだ飲み、話し続けている。リビングルームの時計を見ると二時になっていた。温かいショールが自分の上にかけられていた。(起きないと……)とぼんやり思った時、エレンが「夢の中で婚約者が乗っていた飛行機が落ちて行く瞬間を見たの」と言っていた。ジムも「母が戦時中、弟が乗る戦闘機が火に包まれて海に落下していくのをはつきり夢見たと話してい

る」(そういうDNAを持っている人たちなんだ……)

— 2003年、鎌倉 —

昨夜は兄嫁の康子と鎌倉の伯父の家で通夜の後片付けをしていて一緒に泊ることになった。ヨーロッパ出張中の兄も明日には戻ってくる。布団の上に座った康子が客間の床の間を凝視していた。何かに取り憑かれたような顔で、「あそこに靈氣を感じる」とつぶやいていた。

「靈氣、うーん、私にはそうしたものを感じるようなセンシビリティーは無い。多分、一生無い」そう思いながら康子を眺めた。「そういえば、私は彼女の実家の事を余り知らない。『亡くなったお母様は金沢で占い師として知られていた』と、母が言っていた。彼女の叔母さまも同様な能力を持っているらしいと聞いたことがある」二週間ほどして「康子の叔母さんが入院した」と兄が言ってきた。「精神を病んでいるらしい。康子がとても心配している。彼女までそうならないといいけどな」とつぶやいていた。

— 2004年、東京・鎌倉 —

久しぶりにあのアパートの隣人達の夢を見ていた。翌

朝、手元のiPadにエレンからのメールが入っていた。ジムが仕事で東京へ行く。連絡先を教えてもいいかというものだった。

翌週、東京に着いたジムとホテルのロビーで落ち合った。二年ぶりに会う彼の顔には疲労感が漂っていた。真希は車で彼を鎌倉へ案内すると決めていた。車が走り出すなりジムはエレンの話を始めた。ここ二年ほど彼らはカップルとして行動しているらしい。

「彼女はとても繊細でシャープだ。でも、議論をし始めると興奮しだして、手におえなくなることがある。頭が良すぎるというか、考え過ぎ。神経がまいってしまうかもしれない。心配だ。彼女は真希といるとても落ち着く。不思議だと言っている」そしてニコリと言った。「ぼくも貴女と話をしているとほっとするんだ」

（それは……兄も私も平々凡々だけど、するどい感受性を持つ人を安心させる何かを持っているみたい。そして私もそうした感性に惹かれる……）と心の内で答えた。鶴岡八幡宮から長谷の大仏へと向かおうとした時、未亡人となった伯母、小夜子の顔が浮かんだ。（鎌倉に来

ているのに、連絡も入れないのは……）と考え電話をかけた。伯母は予想外に明るい声でジムと一緒に立ち寄るようにと言うのだった。客間で抹茶を味わいながら話していると隣の小さな寺からお経と木魚の音が聞こえてきた。「素晴らしいミュージック」とジムが感激している。

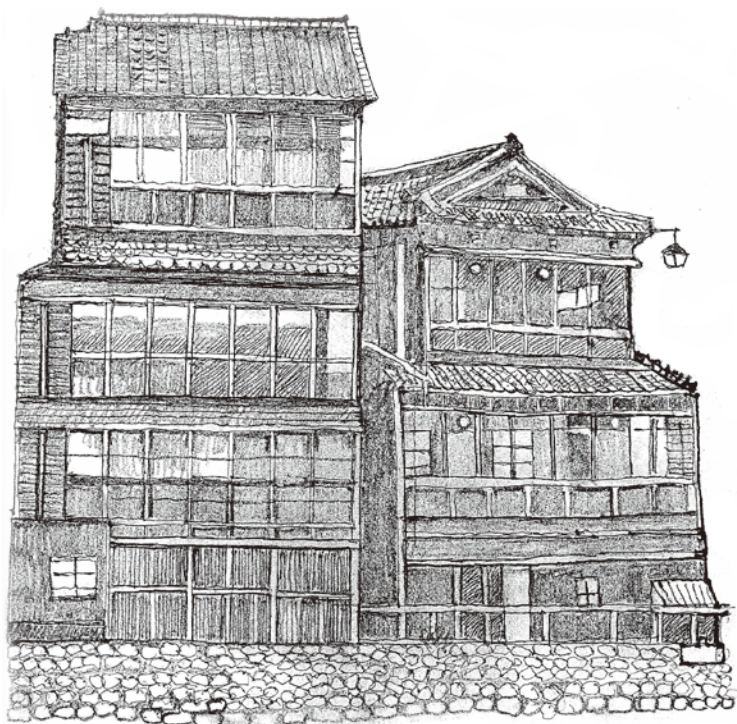
「あら、ジムさんにとっては音楽なのね……」

「伯母さまがこんなに社交的だったとは意外だわ」

「今までも外国人のお客様を家におよびすることはあったし、これからは観光ボランティアとしてお茶やお花で外国人観光客を歓待することを考えているのよ、フフ」兄と私、それに伯母には天才的な人々とに安らぎを感じさせる何か（DNA?）があるということかしら？ 帰途の車。穏やかな笑顔を浮かべてジムが言った。

「真希、今日はありがとう。売りに出た十二階の部屋をエレンと一緒に購入と決めて以来、口論続きで正式契約を躊躇していたんだ。彼女はD&Bの建築が好きで、ずっと物件が出るのを待っていたんだ。五月末には部屋の改装が終わるだろうから、今度は是非、休暇を取って遊びに来て欲しい。二人で大歓迎する。エレンが喜ぶよ」

活動報告



金沢 東町

鉛筆画 山縣 正靖

「何でも書こう会」の現状について

昨年は、クラブの更なる活性化を目指し、活性化委員会を立ち上げた。委員会は、各分科会の現状の把握、問題点の抽出を行い、今後の方向性を提示した。またアンケート調査により、会員の「何でも書こう会」に対する評価が示された。

- 1 出席状況については、多い、ほぼ出席が十二名。半分程度が五名。少ないが三名。ほぼ欠席が一名。
- 2 活性度について、活発が二名。かなり活発が八名。
- 3 満足度について、満足が五名。かなり満足が六名。中程度が三名。今一つが一名の結果となった。

出席状況については、現状一八名プラマイ四ぐらいで推移しているので、妥当な結果だ。活性度については評価が高いが、満足度に関しては、会員から様々なコメントが寄せられた。

文章が分かり易く書けるようになった、というコメン

トもあったが、満足しない方々は、「文章の巧拙」「修辞法」「言い回し」「文章を練る」「いい文章を書く」「文章の向上」等に時間を費やさない運営に、不満を持たれている様だ。また内容中心なのか文章作法か、運営がどっちつかずという意見もあった。エッセイコラムに投稿する事前感触に利用している人や、議論が作品から脱線しがちという人もいる。また本日のベスト作品を選んだらどうかの意見もあった。

「何でも書こう会」「八〇〇字文学館」を魅力ある会にするため、様々な意見があつて良いと思う。

「何でも書こう会」はカルチャー教室ではない。

プロマネは文章のプロでもセミプロでも無い。進行を和やかにスムーズに行うことが最大の役目だ。

会の内容を充実させるのは、参加している会員一人ひとりの発言だ。

(プロマネ 大越、大森、志村、三春)

『掌編小説勉強会』活動報告

本年『企業OBペンクラブ』は創立三十年を迎えますが、設立四年目には『小説研究会』が生まれております。その後、活発な意見交換によって研究会方式より各自が自由に文学賞を目指そうということで休会となりました。

平成十九年に作家の故深田祐介さんに当クラブの名譽会長に就任頂いたのを機に、新たに『掌編小説勉強会』がスタートしました。その名の通り、長編・短編よりも入りやすい掌編とし、互いに研鑽しあうということで勉強会方式になりました。現在のメンバーはコメントーターの方も含めて十六名です。コメントーターは、小説は書かないけれど、客観的に厳しいながらも愛情のある批評をしてくださる、大へん有難い存在です。

二ヶ月に一篇の小説を書き上げ、互いに読後のコメントを付けて勉強会に臨みます。そこでの意見やコメントを参考に、改めて書き直して、会員専用ページの「掌編小説」の欄に掲載しています。すでに七十二回開催し、その作品数は527編の力作が載っております。

また、会員の皆さんに関心を持っていただくよう「月例会」ではバワボを活用してビジュアルを入れての内容紹介もしております。

ぜひ、専用ページを開けてお読みいただき、「ヨッシ！自分の経験をもとに小説にチャレンジしよう」と、勉強会に顔を出しいただきたいと存じます。

例えば、一月に発表された掌編小説の表題は、

◆『とんだ間抜け男』◆『魔界から来た同居人』

◆『小説機関投資家(九)』◆『お四国さん⑤』◆『言えない』

◆『飛鳥ぶらぶら』◆『千恵子の一生(後編)』

◆『やすらぎの郷々遊行期の風景』でした。

青春風景もあれば浮気話も、さらには経済小説や歴史物も、また、紀行文もホラー小説、社会風刺小説もあります。母親の一生を描いた感動小説に、遊行期を迎えた話、夫婦間の意思が通わない嘆き節もあります。

どうですか。幅広いジャンルOK！です。皆さんも書いてみたいテーマがあるのではないのでしょうか。

参加をお待ちしています！

(プロマネ 内藤、廣澤、清水)

サロン21 活動報告

おりです。

昨年は、明治維新から百五十年という節目の年でした。米国並びに西欧の中国封じこめ政策が鮮明になった年でもありました。その中で世界史の中での近代日本の歩みに焦点を当て、最新の国際情勢、AI、ロボット、ブロックチェーンなど進化する科学技術などにも目配りしつつ、議論と勉強を深めることができました。

今年は、国内では御代替わりの行われる特別な年であり、米中の確執、EUの混乱など波乱要因もあり、国内外で大きな変動が起こりうることも予測されます。こうした情勢を注視しながら、意見交換を通じて会員各自の見識向上に努めてまいります。

サロン21では、さまざまな分野で活躍された会員の豊富な経験と知識を披歴いただくことが勉強を進める上で大きな力となっております。しかし、高齢化は避けがたい定めであり、新風を吹き込む意味でも若い会員の新規のご参加を期待しています。

二〇十八年の各月のテーマとプレゼンターは左記のと

一月	AIと俳句	上田 信隆
二月	アベノミクス総まとめ	鳥海 博
三月	ロボットの今と未来	安藤 晃二
四月	明治維新と南北戦争	浅井壮一郎
五月	日本の経済予測と問題点	山縣 正靖
六月	仮想通貨とブロックチェーン	杉浦 右藏
七月	明治百五十年を迎えて	森田 晃司
八月	夏休み	
九月	米朝非核化と米中貿易戦争	下山 健夫
十月	明治維新とクリミヤ戦争	浅井壮一郎
十一月	アベノミクスは是か非か	鳥海 博
十二月	東芝と日立の企業文化について	山縣 正靖
	(プロマネ)	上原 利夫
		森田、下山

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

平間真木子先生からペン俳句の句会を引き継いだのは二〇〇七年二月。私が句会を取り纏めるようになって、驚くことに十二年経ったことになる。干支にして一周した。この間のペン俳句メンバーの寛容と忍耐に負うところが大きい。私ごときの進行に協力していただき、ペン俳句が存続できていることに感謝している。おかげで私は俳句から離れることなく今に至り、メンバーも一定の人数を保っていることは嬉しい。当時からメンバーは大泉さん、安藤さん。この欄に欠かさず特別投稿句をくださっていた故玉山さんの句を見ないことは寂しい。

恒例の一泊吟行は十一月五日、晩秋の箱根湿生花園を再訪し仙石原に宿を取った。今年八月から新メンバーとなられた田中みづえさん（俳号・水え）、旧会員の猪股重子さんの参加を得て賑やかで実りの多い吟行となった。句会は毎月の第一木曜。前月に出される兼題、当日の席題を合せて五句出句となった。以前より余裕を持って

句会が運ばれるが、力作が並び活発な句会を保っている。「俳句は作り手半分、読み手半分」といわれる。句会で揉まれて完成する文芸……是非一度、御体験ください。

不二を置き元朝の空まつ平

西川 知世

まつすぐに朝日届けり注連飾

年酒酌む国の詠をまだ残し

墨痕の撥ねに癖あり年賀状

母の背に似し人のゐて初電車

吊革に身を預けゐて四日はや



水際に青鷺の立ち冬ざるる

安藤 晃二

連風の昇る彼方に雲光る

春寒の美喜記念館海光る

若葉風軍楽隊のチューバ鳴り

十五代墓所好日の樟若葉

二句目、季語の斡旋が快い。上五、中七の少しの甘さを福寿草という季語で締める技が効いている。俳句の向日性を大切にした句である。五句目、最近の街に溢れる外人観光客には驚く。渋谷の交差点は有名。異人という少し大げさな言葉を使って作者の戸惑いを表わしている。

一句目、冬ざれという季語は、冬の景色が一面に荒れ

さびた感じをいう。水際に脚を浸け動かない鷺は冬の景

色の中で絵のようである。三句目、大磯の澤田美喜記念

館を訪れた時の句と聞く。下五の光る海は美喜の育てた

子供たちが渡った海である。作者の感慨が句にある。

金婚の春頼もしき妻の腰

大津 そうかい

瀬の渦となりて崩るる花筏

展ぐれば新聞青き五月かな

新緑やこんな時間に酒を酌み

丹田の気の失せにける大暑かな

住職の代替はりせる報恩講

大泉 子泉

句心のいつも青春福寿草

遠来の客と嵯峨野の春に在り

西日浴び鉢に小さき冬薔薇

十字路に異人屯す十二月

俳号を「たかし」から「そうかい」と変えられ、毎月の句会でヒットを飛ばしておられる。句柄は軽みから、写生まで巾広い。三句目、五月の空気が展げた新聞から立ち上る。新緑やの句は日経新聞の俳句投稿欄に入選。勤めを終えた者が感じる自由をのびのびと詠う。

注連縄を縋ふ指の先葉踊る

齊藤 まさお

初雪や大空つかむ幼き手

春の夢触れなむとして覚めにけり

一瞬の風透きとほる九月かな

白露の落ちなむとする葉末かな

写生句に開眼されたと拝見している。読後、景や物が

浮ぶ句が多く、句会でもご活躍である。一句目、縋う葉

の先の撥ねるような動きと葉で荒れた指先が見える。三

句目は一転、心の機微を詠う。春の快い眠りの中に見る

夢、触れてみたい夢はあやしい艶つばさを感じる。

.....

陽は静か二日の昼の寺の庭

志村 良知

春燈や新婚の客よく笑ひ

競漕のオール翼と翻へり

山法師空飛ぶものへ咲き揃ひ

歌丸逝く南風蒼天に荒ぶる日

自在な句柄である。二句目は、華やいだ笑い声に、迎

えた側も楽しい時間を持ったことだろう。春燈の明るく

のびやかな光が幸せ感を増す。五句目、夏の季語、南風

は（はえ）とも読む。本来おだやかな風だがフェーン現

象を起こす好もしてからぬ風をも言う。季語に心象を託す。

.....

ほのぼのと三月生れぬ枝の先

首藤 しずを

哀しければ哀しく見ゆる桜かな

夕蟬に尿をかけられ秋暑し

畑よりどかと冬瓜差し出され

見番にはやも灯の入り雪催

句会では披露の任をたびたび担う活躍である。一句目、

はやく春が待たれる三月の心を詠っている。枝先に三月

が生まれたという感覚は秀逸。三句目、蟬は本来夏の季

語であるが、秋暑しが主たる季語となり、秋の句。尿は

（しと）と読み、いかにも残暑の暑さが句にある。

オリオンや子らを待つ親塾の前

田中 水え

金箔で描くほかなし枯茅野

白桃とチーズと紅茶遅き朝

便り待つ郵便受に蟬の殻

石狩の平野を開き稲の花

二句目、上五、中七の発見から下五への着地は、意外性があり、それでいて胡瓜揉の簡単な料理の出来栄と上五、中七はどことなく合うように思えて楽しい。手練れた句である。三句目、中七が晃也俳句の骨頂であろう。読む人に実感を伝え、夏祭の力強さも感じられる。

一句目、句会の最高得点句と記憶する。季語、オリオ

ンが句の中で輝く。塾に通う子の年齢、待つ親たちの寒

さも表出できた現代詠。二句目、初めての吟行でものさ

れた句。湿生花園は枯色に輝き美しかった。上五、中七

の措辞は冬の野の美しさを出す事に成功している。

少年の叫びは高し氷柱垂る

森田 元斐

書き込みの若き日捲る冬灯

裏方のいなせな手締め祭果つ

冬ざれへ鉄橋渡る終電車

天空へ聳える千木や神在月

安曇野は水湧くところ五月来る

中村 晃也

カタカナは漢字のかから胡瓜揉む

提灯をビリリと伸ばす夏祭

廃船の流れ着く浜冬ざるる

雑踏の塵の一人となる師走

二句目、冬の部屋を灯して、若い頃に読んだ書物を捲る。そこには、昔に書き込んだメモがあり、心はその頃に帰っていく。頁をめくるのではなく、若い日々を捲るという詩心。五句目、作者の故郷、出雲の十一月は、神様が集う神在月である。堂々と歌い上げる故郷讃歌。

二〇一八年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

二〇一七年の合宿の好評に気を良くして、二〇一八年にも合宿勉強会を挙行了しました。大阪在住の優秀ペン川柳メンバーである明迷（八木）さんのご尽力で、大阪・箕面に総勢十人が集結して研鑽を行いました。

以下に二〇一八年の勉強の成果として、各月一句ずつを昨年同様に世話人の無手勝流特選句（世話人の特権で敢えて勉強会での入選句とは別に）として掲載します。

●一月 お題【玉（たま、ぎょく）】

玉の與姑隠居で爪を研ぎ

（おにがらち）
（鬼瓦）

お金目当てではありませんでしたが、婿養子で入った家には怖い怖いお姑さんがいて、家を仕切っていました。夜、恋い焦がれた嫁と閨に入っても声は出せません（泣）。

●二月 お題【穴】

入る穴なくなるほどにかいた恥

（めいめい）
（明迷）

誰しも恥をかくと「穴があつたら入りたい」と人前から身を隠したくなってしまいます。作者は過去を顧みて、あまりにも多くの失敗をしでかしてしまつたので「もう入る穴がない」と嘆いているのです。謙遜です！

●三月 お題【掘る】

深い溝掘って別れて同じ墓

（すいしん）
（酔深）

一度こじれるとその撚りを戻すのは困難ですが、結局最後は同じ墓に入るのが夫婦なんでしょうね。作者の希望的観測だとのヤジが飛びました。今月の最高得点！

●四月 お題【芋】

芋づるを手繰ればスクープ大当たり

（ウオツカ）
（火酒）

ニュースのスクープは、芋づるを手繰るようにして得るのです。作者も地道な努力を継続することで、今月の最優秀句を勝ち取りました。これはスクープではありません。当然の帰結なんです。

●五月 お題【麦】

麦飲んで米を食うからなるメタボ

(明迷^{めいめい})

毎夕食の前にはビールを飲み、その後どんぶり飯を何杯も食らったのだから、今のメタボ腹は仕方ないんです。

●六月 お題【踏む】

お百度を踏んだ女に今踏まれ

(酔雅^{すいが})

作者の夫婦関係を如実に表した憂愁句です。同情票で最優秀に輝きましたが、作者はしきりに女房のことではないと抗弁していました。

●七月 お題【海】

海行かばプラスチックのごみの山

(損得^{そんとく})

作者お得意の社会派時事川柳です。プラスチックゴミは海洋生物にとり最大の脅威になっています。「海行かば」に極めて上手に関連付けられたプラごみ川柳になりました。

●八月 お題【鳴る】

ゴロとだけ鳴る雷は修行中

(明迷^{めいめい})

中途半端な雷鳴に対する愉快な句です。「修行中」が効いています。今月の最優秀文句なしでした。

●九月 お題【畑】

天才は種か畑かはた肥し

(安兵衛^{やすべえ})

世に天才と謳われる人物は、両親のどちらかの血を引き継いでいるか、それとも後の教育のお陰なのか？ 作者の場合、天才ではないですが、頭脳明晰？は自らの努力だと言っていました。

●十月 お題【光る】

恒例の合宿で、阪神は箕面に総勢十名が集結してお題

「光る」での楽しいお泊り勉強会でした。尚、勉強会の後で、

「天満天神繁昌亭」での大阪寄席を堪能。

秋深し稲妻光る闇の中

(だし)

作者にとっては未経験の世界を、例によって想像力逞しくして詠みましたが(実は経験がない訳ではない)！

●十一月 お題【月】

月あかりぼんやり見えて君きれい

(井波^{いなみ})

薄暗い月明かりの中だから君がきれいに見えるとは失礼な表現ですが、作者は恥ずかしいから謙遜しているのです。作者らしからぬ遠慮がちな控えめな表現に座の川柳士たちが点数を入れ、今月の最優秀句に輝きました。

●十二月 お題【霜】

霜焼けも死語にするのか温暖化

(零門^{れいもん})

確かに最近では耳慣れない「霜焼け」です。地球温暖化を霜焼けと関連付けて上手に読んでいます。

残念ながら、これまでご活躍されたペン川柳作家の鬼瓦さんは体調不良のため二〇一八年三月を以ってペン川柳をお辞めになりましたが、優れたペン川柳を今年も詠まれました。

二〇一八年の好成績川柳は、自薦または世話人推薦の優秀（憂愁）五句を以下に。（順不同）

【酔雅^{すいが}】

(西川武彦)

「玉」…来世ではちょっと乗りたい玉のこし

「穴」…傘寿すぎ穴を探して徘徊し

「踏む」…お百度を踏んだ女に今踏まれ

「鳴る」…ベルが鳴り辿りついたら不在票

「霜」…霜おりて下の回数右上がり

【不言^{ふげん}】

(岩崎洋一郎)

「玉」…玉の輿三日たたずに追い出され

「穴」…同じ穴入った仲間は皆あの世

「芋」…芋掘って聖戦勝つと屁をこいて

「麦」…麦踏みで都会っ子戸惑いたたら踏む

「霜」…霜踏んで竹刀撃ち合う寒稽古

【井波^{いなみ}】

(稲宮健一)

「玉」…パリジェンヌ藤田^{フジタ}が描く玉の肌

「掘る」…掘り当てた焼夷弾だと孫に見せ

「芋」…芋粥をすすった頃は肥満なし

「光る」…ビッグバン光る力で宇宙生む

「月」…月あかりぼんやり見えて君きれい

【酔深^{すいしん}】

(平尾富男)

「玉」…玉の興乗った筈でも尻の下
「掘る」…深い溝掘って別れて同じ墓
「鳴る」…のど自慢鳴る鐘一つでも喝采
「光る」…親の目が光っているのは手が出せぬ
「月」…待てど来ぬ月の報せに気がもめる

【だし】

(大野 昶)

「玉」…逆玉は後継ぎできてさようなら
「麦」…麦か芋何時まで続くこの勝負
「踏む」…踏んじやった我が家の地雷女房殿
「海」…海に山休日ばかりが増える国
「光る」…秋深し稲妻光る闇の中

【零門^{れいもん}】

(松谷 隆)

「玉」…逆玉を蹴って喰^くって五十年
「穴」…無礼講はしゃぎが過ぎて墓穴掘り
「麦」…麦へらし芋とブドウで達者だよ
「海」…荒海を知らぬ首相のユートピア
「霜」…霜焼けも死語にするのか温暖化

【損得^{そんとく}】

(細谷 博)

「穴」…落とし穴仕掛けた場所が見つからず
「芋」…不味い芋農林一号国救う
「海」…海行かばプラスチックのごみの山
「鳴る」…あの頃は鳴らしたもんだと腕さすり
「月」…婿探し月給いくらと先ず尋ね

【安兵衛^{やすべい}】

(山縣正靖)

「掘る」…ゴミ少々掘つくり返してタダ査定
「踏む」…勇み足えらいこっちゃとたたら踏む
「芋」…まだ出るか芋づる式のスキャンダル
「畑」…天才は種か畑かはた肥し
「月」…櫛いらず月に群雲冬寒し

【晃^{くるつぐ}】

(安藤晃二)

「穴」…歌舞伎町穴場さがして穴に落ち
「芋」…芋の葉の真珠コロコロ子をあやす
「畑」…シンガーに畑違いのノーベル賞
「光る」…破れ築地^{つくじ}恋路分け入る光る君
「月」…宗旨替え月並みを止め不可解へ

【火酒】
ウオツカ

(三 春)

「月」…近頃はスツポンばかりで月はなし
「芋」…芋づるを手繰ればスクープ大当たり
「麦」…豆抱いて麦と別れたビール党
「海」…米中戦海千山千口に栓
「光る」…あら捜し目を光らせる嫁姑

【鬼瓦】
おにがわら

(富田佳瑞)

「玉」…玉の輿姑隠居で爪を研ぎ
「穴」…女房が寝た後捜すそこ穴場

【明迷】
めいめい

(八木信男)

「穴」…入る穴なくなるほどにかいた恥
「掘る」…落とし穴掘ったあいづが落ちている
「芋」…ガス漏れの主犯じゃないと芋怒る
「麦」…麦飲んで米を食うからなるメタボ
「鳴る」…ゴロとだけ鳴る雷は修行中

【我々好】
ウイスキー

(浜田道雄)

「玉」…初詣ご縁を祈る五円玉
「穴」…靴下の穴かがりつつひとり飲む
「麦」…「麦を食え！」先見の明あり池田さん
「畑」…据え膳の畑にヤタネは蒔かぬ意地
「月」…月のものないと聞かされ逃げを打ち

【素つ頓狂】
すつとんきやう

(内藤真理子)

「畑」…夏過ぎて畑模様の秋の肌

【拿々】
だだ

(塚田 實)

「釣り」…あの夫婦不釣り合いでも仲が良い

ペン・フォト句会(後の食事会)

毎月同じ顔ぶれが集まる勉強会をいかに楽しく運営するかはプロマネの重要な仕事のひとつである。

勉強会の発足時は午後一時開催だったが、五時からの懇親会を楽しむために開催時刻を調整したこともある。

懇親会場も「とき」、「さくら」の連続では献立に変化がなく会話もはずまないのも、毎月場所を変えて美味しものを一緒に楽しむ行事を提案した。

言い出した責任上、勉強会場から近い新宿や渋谷で特徴あるレストランを探して懇親会を開催することにした。和食は京料理、蟹専門店、豆腐料理、高級居酒屋をはじめ、フレンチ、スパニッシュ、中華、台湾、朝鮮、ブラジル、ギリシャ、タイ料理などのレストランをネットで検索し、毎月二、三の候補店を訪ねて、十数名の会食のスペースの有無、店の雰囲気、料理の内容と価格、飲み放題の有無などを下調べした。

エジプト料理店を探した際、新宿にある筈の店は廃業していたし、渋谷の東急百貨店の前の店はレストランと

いうよりはキャッチバーの雰囲気近く会員を案内するのは憚られた。候補の選択に迷って、ある時は新宿歌舞伎町のオカマショーで有名な「黒鳥の湖」での食事も企画した。

この方式を二年間も続けたが、プロマネ一人の探索では、能力的にも時間的にも限界があり、食事会の幹事を毎月交代制に移行した。お蔭で食事会の場所も従来の新宿、渋谷から市ヶ谷、下北沢、荒木町、九段下、東中野、横浜などに広がった。また、夏休みには特命幹事をお願いして暑気払い会を設定し、鰻、どぜう、穴子料理などを楽しんでいる(次回は鯨か鯨が楽しみである)。

と同時に付け句のお題写真の出題や会の司会進行係も全員が年に一回程度は担当するシステムに変更した。

要は全員参加型に移行することで、会の活性化とマンネリ防止効果を狙っているのだ。

ご存知のように月例会での報告もパワーポイントを用いて視覚化したのが、今後報告者も月替りになる方式を検討中である。

(プロマネ 中村晃也)

英語を読もう会 2018年の活動報告

英語で書かれた文献、即ち報道記事、様々な論説、文芸作品などについて担当メンバーがプレゼンテーションを行い、その内容、語学的な面白さについて語り合った
(プロマネ 安藤)

開催月	題 名	担当名
1 月	The Remains of the Day by Kazuo Ishiguro (抜粋、翻訳内容に焦点)	富岡
2 月	A year of Trumps "America first" agenda has radically changed the U.S. role in the world by Washington Post (トランプ政治 1年)	大泉 安藤
3 月	Trump State of Union Address 1/31/2018, Fact checking by WP (大統領一般教書演説)	下山
4 月	It's No Cold War, but Relations With Russia Turn Volatile(米露関係不安定化) Women Barred From Sumo Ring, Even to Save a Man's Life (女性を土俵に入れない大相撲) NYT	森田
5 月	Donald Trump and Decline of U.S. Soft Power by Joseph Nye (米国の soft power。論説)	安藤
6 月	Essay on Currency, by U.K. Researchers Team (通貨の学術的解説。通貨の在り方)	富岡
7 月	The Second World War by Winston S. Churchill (第一次世界大戦から第二次世界大戦チャーチル回顧録)	大泉
9 月	Trump's War with Harley-Davidson Has Divided American Bikers (トランプ政策とハーレイ海外生産、支持基盤に亀裂)	森田
10 月	A major factor behind the US-China trade war is winning at a \$12 trillion technology-5G (米中貿易戦争、5G覇権争い)	下山
11 月	60 years of EU integration held hostage by Italy's game of chicken with Europe (伊予算で欧州委、ECBと対立)	安藤
12 月	Japan is struggling to deal with the foreign tourism boom, by ASAHI(観光公害) Japan's Great Gamble (IR法、関連産業界)	富岡

「何でも読もう会」で気分爽快に

昨年は発足二年目でした。メンバーはほぼ変わらず、十名ほどでやっています。

月に一回、午後の三時間半です。予定された二作品を読んできて、読後感や意見を述べあいます。作品の背景や作者を調べ、地図や写真、参考文献などを準備して満を持して現れるメンバーもいて面白いです。

昨年読んだ本は後記の通りです。みんな、肩に力がはいり気味でやや重い内容になっています。もつと軽々と読もうよと申し合せているのに、いざとなると――。

それでも読み終え、しゃべり終えたあとの満足感は格別です。昨年後半から、女性作家や現代作家を意識的に取り上げています。

二〇一八年

三月 『忘れられた日本人』

『金閣寺』

宮本 常一

三島由紀夫

四月

『野火』

大岡 昇平

『方丈記』

鴨 長明

五月

『砂の女』

安部 公房

『徒然草①』

吉田 兼好

六月

『悲の器』

高橋 和巳

『徒然草②』

吉田 兼好

七月

『深い河』

遠藤 周作

『死者の書』

折口 信夫

九月

『異邦人』

アルベール・カミュ

『等伯』

安部龍太郎

十月

『武士道』

新渡戸稲造

『茶の本』

岡倉 天心

『真鶴』

川上 弘美

十一月

『ロック母』

角田 光代

『白きたおやかな峰』

北 杜夫

十二月

『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ

『いきの構造』

九鬼 周造

(世話人 首藤静夫)

ホームページ関連

今年のホームページ関連の目玉は、何と言っても顔である公開サイトトップページの改訂である。使い勝手はそのままに、より若々しく魅力的にとプロジェクトを組んで案を練り、ホームページ管理会社のリプラス社様と何度も協議を重ね、今年初頭にアップした。見た目は大きく変わっているが動きなどは前のホームページを踏襲し、かつ使いやすくなっている。

代々木のオリンピックセンターでの月例会、各勉強会とともに当クラブの活動を支える柱であるホームページは、昨年も多く読者にアクセス頂き、主要コンテンツだけでも十萬アクセスを越えた。改定ホームページではOBペンクラブの紹介ページを充実させ、日々の勉強会活動も日程を公開して入会希望などご興味のある方々への便宜を図った。また、同人誌『悠遊』創刊号からの全バック・ナンバーを掲載した。

新しい作品の発表も毎月数十件に上っている。著作者

検索システムへのアクセス数が月平均九百件あまりに達し、この効果か前年に増して「八百字文学館」と「エッセイコラム」のアーカイバル作品が多く読まれた。これに刺激され、新しい作品も題名を工夫し、内容も充実させるなどアクセスして読んでいただくための努力が目立つようになった。

併せて会員専用サイトの部分改訂を行い、会員交流の場として使いやすくした。代々木での集まりになかなか

出席できない会員諸氏の当サイトへのご参加をお待ちしたい。

ホームページの改訂が起死回生狙いではなく、隆盛の中で行えたことは大変喜ばしく、これによりな一層の読者を獲得し、会員間の親睦も図れるものと確信している。

(プロマネ 志村良知)



企業OBペンクラブ
 エッセイや小説を讀いたり 句をひねったり 写真を撮ったり
 仲間と語り合って楽しんでいます
お仲間になりませんか
 本会は企業OBが中心ですが、
 今は、「書くこと」や「読むこと」に興味のある色々な方が
 参加する親睦活動の仲間です

- ＞ 入会のご案内
- ＞ 同人誌「悠遊」
- ＞ これまでに出版した本
- ＞ アクセス
- ＞ 著作権保護システム (PDF 形式で閲覧、コピー、印刷)
- ＞ 会員専用サイト
- ＞ 今月・来月の予定

トピックス 最近のフォト句より

企業OBペンクラブ本年の歩み

平成三十年（二〇一八年）

（会員への敬称略）

一、役員人事

前年十二月に役員の改選が行われ、左記の新役員が、以後二年間会の運営に当たることとなった。

名誉会長

西川 武彦

会長

清水 勝（理事留任）

副会長（総括）

安藤 晃二（留任）

副会長（総括）

大越 浩平（理事留任）

運営委員長

穴戸 三春（理事留任）

事務局長

志村 良知（留任）

理事（広報・渉外）

首藤 静夫（留任）

理事（財務・活性化）

斉藤 征雄（新任）

運営副委員長

塚田 實（新任）

会計担当

長尾進一郎（新任）

監事

池田 隆（新任）

二、年度方針

1、会員の増強

特に六十歳代の入会促進

2、更なる活性化を目指す

月例会参加者三十五名以上

分科会の更なる発展、活性化

3、会員談話室の活用

遠隔会員、月例会欠席会員への働きかけ

投稿原稿に会員からのコメントにより談話促進を図る

図る

4、以上の事項を検討する活性化委員会を設置する

三、各月の活動報告

一月例会（十七日）

・新年津軽三味線演奏会 村上豪氏

『よされ節』『十三の砂山』『じゃんがら節』

『ベンチャーズ・メドレー』など全十一曲。

・新年会（十九日）

会員・四十名、ゲスト四名参加。

・活性化プロジェクト発足(五日)

・退会会員Ⅱ羽田壽夫(二〇一七年十二月)

・逝去者Ⅱ高橋孝蔵(二十五日)

・新会員Ⅱ村谷卓一

二月例会(十五日)

・ゲスト講演Ⅱ古川勝弘氏(投資コンサルタント)

『日本の政治経済の裏幕たち』

・二〇一六年版会員名簿確定配付 会員数七十名。

・第十回何でも書こう会熱海合宿(五、六日)

三月例会(十七日)

・会員講演Ⅱ大津隆文

『お札の話』

四月例会(二十一日)

・ゲスト講演Ⅱ石田則明氏(古代史研究家)

『道鏡事件』の真相』

・『悠遊』二十五号配付

・新会員Ⅱ大塚喜子

五月例会(十七日)

・『悠遊』二十五号合評会。

六月例会(二十一日)

・会員講演Ⅱ大森海太

『私と世界史』

・逝去者Ⅱ玉山和夫さん(二十六日)

七月例会(十九日)

・ゲスト講演Ⅱ芳野まい氏(フランス文化研究者)

『フランスに学び、日本を伝える／考える』

・印刷局滝野川工場見学会(十日)

・活性化プロジェクトで全会員アンケート実施

八月(夏休み)

九月例会（二十日）

- ・ 会員講演Ⅱ野瀬隆平

『OBペンクラブと私』

― 趣味と学び、それから…

- ・ 活性化プロジェクト最終報告（二十日）

十月例会（十八日）

- ・ ゲスト講演Ⅱ市川健美氏（市川崑記念室）

『市川崑・和田夏十 夫妻の業績』

- ・ ペン川柳の会Ⅱ大阪箕面合宿

二十六日～二十七日

十一月例会（十五日）

- ・ ゲスト講演Ⅱ藤島大氏（スポーツジャーナリスト）

『日本ラグビー 現在過去未来』

- ・ ペン俳句会Ⅱ箱根仙石原一泊吟行（五、六日）

- ・ 会創立三十周年記念日（二十二日）

平成元年十一月二十二日 十七名にて旗上げ

十二月例会（二十日）

- ・ 会創立三十周年記念座談会

パネラー

都甲昌利、金京法一、西川武彦、松谷隆、

平尾富男

- ・ 退会会員Ⅱ富田佳瑞（十二月）

二〇一八年は新役員の第一年目で、会員数七〇名でスタートした。

二〇一八年、高橋さん、玉山さんと二人の会員が長逝された。ともに英国社会に造詣が深く、ボート部出身でスポーツマンの高橋さんはスポーツを通じての英国との関係の紹介に健筆を奮い、玉山さんは大戦中のビルマでの日本と英国の軋轢とそれから生じた誤解について、英国と日本での多数の著書の出版により精力的にその解消に向けて尽力された。ご両名の冥福をお祈りしたい。

会は十一月に創立三十周年を迎えた。それに先立って、会長年度方針により、三十年間を振り返り、新しい時代

のOBペンクラブに向けての活性化プロジェクトが設置され、会の運営と各勉強会の活動運営の見直しを行った。その成果の一つが、ホームページ公開サイトのトップページの改訂で、一般の読者向けに、よりアトラクティブに使いやすいホームページを目指し、本年一月から一新した。

定年延長、年金支給年齢の引きあげなどで、六〇歳代の会員を獲得するのは難しくなっているが、「団塊の世代」の約六〇〇万人が浮世の束縛・呪縛から解放たれ完全自由となる時代になってきている。

団塊の世代を含む戦後生まれで「戦争を知らない子供たち」の会員は現在二十四名、内女性会員九名と全体比率に比べ、圧倒的に女性が多く、各勉強会の世話役としても活躍している。

我が会では団塊の世代は若手バリバリ。来たれビートルズ、グループサウンズ、そしてクイーン世代。

(事務局長 志村良知)

www.obpen.com

エッセイや小説を書いたり
句をひねったり
写真を撮ったり

仲間と語り合っていて楽しんでいます
お仲間になりませんか

- 800字で書く
- フォト句を詠む
- エッセイを書く
- サロン21(時事問題)
- 掌編小説を書く
- 文芸作品を読む
- 俳句を詠む
- 英語を読む
- 川柳を詠む
- 写真を撮る

★詳しくは当クラブのホームページへ

活動時間と頻度

- 主として月1回・平日午後
- 幾つでも参加できます
- 活動時間は2～4時間/回

活動費用

- 入会金:なし
- 年会費:1万5千円
(遠隔地の方は1万円)
(初年度減免あり)

	氏 名	出 身 会 社
田原 敬	たはら けい	和田製本工業
塚田 實	つかだ みのる	日立製作所
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ（藤田組）
鳥海 博	とりうみ ひろし	山一証券
内藤真理子	ないとう まりこ	
長尾進一郎	ながお しんいちろう	東芝
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
新田由紀子	にった ゆきこ	シュプリンガー・ジャパン
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キヤノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
藤原 道夫	ふじわら みちお	日本赤十字社（現職）
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メディコ
松浦 俊博	まつうら としひろ	東芝
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
松田 昌康	まつだ まさやす	東芝
三 春	みはる	住友商事
村谷 卓一	むらや たくいち	明治安田生命（安田生命）
森田 晃司	もりた こうじ	三菱商事
八木 信男	やぎ のぶお	浪速学院高校（現職）
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
浅井壮一郎	味の素
阿部 典文	石川島播磨重工業
新井 良侑	ダイセル化学工業
安藤 晃二	三菱商事
池田 隆	東芝
市川 忠夫	東芝
稲宮 健一	三菱電機
岩崎洋一郎	三菱レイヨン
上田 信隆	東芝情報システム
上原 利夫	住友商事
鵜飼 直哉	富士通
内田 満夫	神戸製鋼所
大泉 潤	三菱化学
大越 浩平	NEC インフロンティア (旧 日通工)
大津 隆文	大蔵省
大塚 喜子	
大月 和彦	労働省
大平 忠	三菱化学
大野 昱	三井物産
大森 海太	三菱化学
川口ひろ子	アトリエ・リヴィエール
川村 邦生	第一勧業銀行
木村 敏美	郵政省福岡地方簡易保険局
金京 法一	三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	桜井会計事務所
児玉 寛嗣	東芝
斉藤 征雄	三菱化学
清水 勝	明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	リコー
下山 健夫	サントリー、B-R31 アイスクリーム
首藤 静夫	三菱化学
杉浦 右藏	NTT、三菱電線工業
田中みづえ	

▽「平成」が、現代を意味する言葉から過去を表す言葉に移し替えられます。そして当クラブは、「平成」とともに三十年の歴史を刻みました。『悠遊』はこれからもまた、新しい書き手を加えながら「ゆく河」のごとく滔々と流れ続けることでしょう。一時期、その編集に携われることに無上の喜びを感じます。

(斉藤)

▽今年から編集委員に加えていただき、先輩委員の所作を見習って校正作業に取り組みました。私より文章作成能力の高い方ばかりで、その力作の校正は大変なことでした。何度も読み返して気づいた点をコメントしてみましたので、参考にしていただけたなら幸いです。

(松浦)

▽「平成」とは、私には荒れた海に乗り出した一艘の小舟の姿が浮かんできます。「令和」にあつてはその小舟は穏やかな内海へときざ出される姿を思い浮かべたい。『特集 創立三十周年記念座談会』を読み進めると、当クラブ会員皆さんのたゆまぬ努力のおかげで歴史が刻まれたという事実を実感なさると思います。

(福本)

▽「三十周年記念座談会」のため当クラブの歩みを纏めることにし、その原資料を『悠遊』に求めました。各号から伝わってくる先人の熱気、奮闘の様子、紙面の中身の濃さ。三十年とはこういう期間の集積だったのかと思います。そして二十六号がこれに加わったことに安堵しています。

(首藤)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第二十六号

二〇一九年四月十五日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

清水 勝

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五（〒一六二〇八一）
TEL 〇三―三三六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

志村 良知

横浜市港北区大倉山五―三―一―八〇四（〒二二二〇〇三七）
Eメール：rychshinura@01.itcom.net
クラブURL：http://www.obpen.com

口座 三菱UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ（普通） 1086096

ペンフォト句 ②



梅雨ばれや
積もる遊びに
時忘れ

長尾 進一郎



早や七年
復興念じ
眼を入れる



矢澤 正二



平尾 富男



ベンチをも
紅に染めにし
楓かな

池田
隆

三 春



畳目を 数えて欠伸 茶の稽古

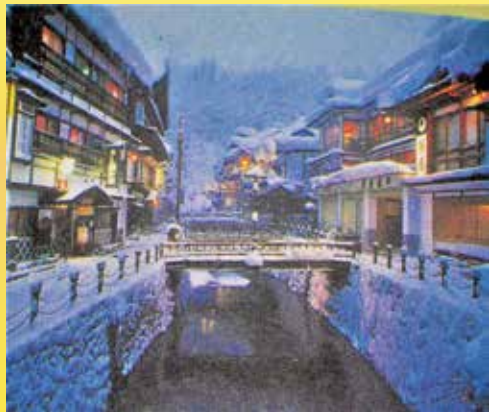


二丁目の 豆腐屋 店を
開めたとな

新田 由紀子

ペン フォト句 ④

灯がともり
心あたたか 細雪



清水 勝

山茶花の
一輪を生け
安らげり



安藤 晃二

雪原に
墨絵のごとく
水流る



大越 浩平

山の湯の 尽きせぬ談義
関節痛



大月 和彦

秋の鉄橋



水彩画 首藤 静夫

放課後の女子高生



水彩画 福本 多佳子



油彩画 安藤 晃二

胡桃



福本 多佳子

My Sculptures (写真着彩加工) 福本 多佳子

パティックで描いた 写楽の浮世絵



兎を抱いた孫娘と紫陽花



木村 敏美